
堕ちた魔王の理想郷

紅峰愁二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた魔王の理想郷

【Nコード】

N9585V

【作者名】

紅峰愁二

【あらすじ】

三柱の神が見守る世界『ディオ・リナ』。その世界で強大な力を持った魔王が魔族だけの国を築いた。しかし、それを良く思わなかった人間たちの策略によって魔王の国は崩壊する。残党のみで魔王たちは戦いを挑むも、魔王の封印によって敗北を喫する。それから一年後、封印されていたシフィア王国の崩壊によって魔王は魂だけ封印から逃れることに成功した。人間に魂を宿し、新たな身体を手に入れた魔王は封印を完全に解くために動くも失敗に終わる。更に身体奪った人間は何と封印を施した姫の恋人で、国を追われたため一

緒に旅をすることによって。人間の身に堕ちた魔王の反逆が始まる。

プロローグ

戦いが繰り広げられている。

シフィア王国の王城から轟音が絶えず響く。半壊した城には、床に家三軒分は並んで入れる大きさの穴が開いている。地下深くまで繋がった穴の中では、激戦が行われていた。

「人間如きが私の邪魔をするな！」

声を発したのは魔王だ。

眼前に魔法陣を展開し、目の前の敵を殺すための魔術を発動する。大樹のような太さで放たれた闇色の光が、目標へ真っ直ぐ貫かれる。しかし、魔術に長けた者なら迷わず逃げに徹するその攻撃は、あっさりと剣で両断される。

「だったらあんたが先に死になさいよっ！」

応えたのは、まだ成人にも満たない少女だ。一本の剣でたった一人で立ち向かい、魔王を足止め——追い込んでいる。

魔王の魔術を切り裂いてそのまま懐へ飛び込む。

「はあっ！」

「ぐあ………」

魔王は剣で胸を縦に斬られる。血が噴き出し、傷の深さを表す。重傷を負いながらも、次の攻撃に移ろうとした少女の体を魔王の巨体が掴んだ。

「調子に乗るな小娘が！」

魔王は少女を握る手に力を込める。ミシミシと嫌な音が漏れ、気を失う寸前の少女の手から剣が落ちる。

「十数年しか生きてない貴様に私が負ける道理はないのだ。——何の野望もない小娘が……我が願いを阻むんじゃないっ!」

ありったけの力で魔王は少女を地面に叩きつける。人間なら即死のそれを、少女はしっかりと両足で踏み込んで耐える。

「人間を滅ぼすことが野望——何て憐れなのかしら」

「……………」

「それに、わたしだって願うことはある。わたしは——みんなの平和を守る!」

少女は魔王に素手で殴りかかる。魔術で強化した拳を魔王に叩き返す。魔王はそれを腕を交差させて受けるも、勢いを殺せず壁まで吹き飛ばされる。

「……………ここまで、なのか……………」

もう魔術を作り出す魔力が尽きた魔王は、辛うじて肘を突いて地面から体を起こす。

「わたしもこれが限界みたい——だから、これで終わりにする」

少女が両腕を広げると足元に淡く光る魔法陣が浮かび上がる。徐々に光が増し、少女から魔王へと輝きが移る。それを見た魔王が驚愕に顔を歪める。

「取り上げるのか？ 私から仲間や国だけでなく、私自身でさえも！？」

魔王は発狂したように声を張り上げる。しかし、魔術は少しずつ完成していく。

「貴様らはどこまで傲慢なんだ。赦さん……赦さんぞ！」

「例え傲慢であろうとも——あなたは負けたのよ。永い眠りに付きなさい。それが、あなたの報いよ」

「うおおおおおおおっ！」

魔王の身体が光を吸い上げるように石化していく。封印が完了した魔王は石造となって動かなくなった。

こうして、人間と魔王の戦いは終了した。

人間や魔族など、様々な種族が生活する世界『ディオ・リナ』。その世界で嘗て、魔王と呼ばれる存在がいた。

魔王はアスカンディナ地方の大陸の一角を占領すると同時に、そこに国を築き始めた。魔族だけが住まう魔族だけの理想郷。そんな国を目指して魔王は各地方の大陸に散らばる魔族たちを集めていった。国はあつという間に大きくなり、魔王の名前は大陸中に広がった。

——争いのない平和な国で暮らしたい。

魔王と呼ばれる者には不釣り合いな願いと共に建国された魔王国は、想い通りの国家へと日々近づいていった。

しかし、それも長く続かなかった。

人間による魔王国の制圧。それによって魔王国に住む魔族たちは

問答無用で駆逐された。

平和を望んだ魔王は同じ想いの同士を集めていたただだが、その行為は人間にとっては単なる脅威でしかない。魔王たちがいつか戦力を揃えて攻めてくると、疑心暗鬼になっていた人間たちの先走った行動は後に“大戦”と呼ばれる悲劇を呼んだ。魔王国を制圧してからも魔王を中心とした残党が併合した国々の軍を蹴散らし、各地に莫大な被害を齎した。^{もたら}そして、魔王国に最も近いシフィア王国の国境内で魔族の進軍は止まり、決戦の舞台となったシフィア王城で魔王を封印するという形で大戦を終結させた。

シフィア王城の地下深くに魔王は嚴重に封印され、魔王国の残党も次々に大陸を追われていった。大戦のために集結した各国の軍に大きな損害、シフィア王国は王城と領内の一部を壊滅的な被害を受けた。

そうして魔王の脅威が去り、平和が訪れた。

それから、一年後――

誰もが眠り込んでいる深夜。家の中は勿論、町の街頭も最低限のものしかない筈のその時間帯に、夜の空を赤々と照らす光があった。シフィア王国の首都にあるシフィア王城が燃えていた。全体の殆んどが炎に包まれ、王城は少しずつその姿を瓦礫と化していく。シフィア王国の象徴と言ってもいい王城の焼失は国の崩壊をも意味していた。太陽と月を示したシフィアの国旗が激しく揺れる姿は、まさにこの国の危機を表すようだ。

現在シフィア王国は攻撃を受けている。敵国はリブラーク帝国。一年前に魔王を倒すために手を取り合った国の一つだ。

大戦当時、首都と王城は魔王による襲撃で壊滅的な被害受け、一年経った今でも完全に復旧を終えていない。そのため、整備が完了していない隙をうまく突かれ、大勢の軍の侵入を許してしまった。

王城だけでなく、大戦で王と王妃が亡くなったことにより次期後継者の体制の交代もうまく済んでおらず、指揮が全体に思うように伝わらなかったため対応が遅れていた。それでもシフィア王国軍は屈しなかった。大戦による人員不足に負けず、その時培った精密な動きで生き残った少数の部隊が一角の道を防衛している。

「……これより先には絶対行かせるなよっ！」

部隊長の言葉に兵士たちは声を張り上げて応える。

その様子にリブランク兵士が苛立つように言う。

「もう勝負は見えている。大人しく魔王を渡せ！」

怒涛と剣戟が響き合い、お互いが一步も譲らない。

そんな戦いが地上で行われている中、リブランクの最終目的である魔王封印の地も戦火を浴びていた。あらゆる場所に火の手が上がり、床の一面に軍服姿の人間の死体が沢山転がっている。大半がリブランクの軍服だが、シフィア軍の姿も所々ある。彼らは魔王を防衛していたシフィア兵と前の防衛線を突破してきたリブランク兵だ。全員が同じような斬り傷を作って絶命している。

その中で二つの影だけがこの場所で立っていた。死体の山を気にかけることなく立ち尽くす二人はとても異質だ。

一人は女性で、短い金髪に派手な真紅のドレス風の格好をしている。背中に開いた綺麗な肌からは悪魔を連想させる翼が生え、髪の毛の隙間から角を覗かせていた。見ただけで魔族と解る彼女は今にも涙を流さんばかりに恍惚した目をもう一人の人物へと向ける。

もう一方は男性で、白を基調としたシフィア王国の軍服を纏っている。彼の軍服に付いた装飾からかなりの地位であると窺える。血を拭ってから両手の剣を鞘に戻す。それから手を、腕を、足を確かめるように動かす。そして、整った顔に不釣り合いな笑みを浮かべる。

その様子に魔族の女はついに涙を流し、彼の名を呟く。

「――魔王様」

自身の使い魔の声に気づいて魔王は振り返る。人間の姿となって復活した魔王は、以前との目線の高さの違いに若干の懐かしさを感じる。

「人間にしては悪くない身体だ。礼を言うぞ、セシリー」
「勿体ないお言葉です」

セシリーは膝を突いて言う。

「それに……わたくしは魔王様の魂しかお救いすることが出来ませんでした。本当に申し訳ありません」
「良い。私を封印した者のことを考えれば仕方のないことだ。よくやってくれた」

魔王は身体を向き直し、本来の自分を見上げる。
今の身体の三倍はあろう巨体がそこにあった。憎悪に顔が歪み、封印された瞬間のままの姿で石化されている。肉体が安置された床と天井、壁に至るまでシフィア独特の魔術形式の封印が嚴重に施されていて今の魔王では手も足も出ない。

だが、魔王にとって現状は悪いことばかりではない。

「状況は上々……このまま肉体の封印も解いてしまおう」

セシリーの報告から地上の状況を知っていた魔王はほくそ笑んだ。
今まで叶わなかった条件が今日この瞬間に揃った。

「では、行かれるんですね」

「ああ——姫を殺そう」

新たな決意と共に魔王は封印の広間を離れる。
人間の姿にまで堕ちた魔王の反逆が始まる。

第1話：旅立ち

シフィア王城が陥落してから三日が経った。

城はもう瓦礫の山としか言いようがない有り様で、代わりにリブラークの国旗が遠目でもはっきり確認できる程高々に掲げられていた。城が焼失する攻撃を受けたのに拘らず、その周辺都市の被害は微々たるものだ。そこがリブラークの腕の良さであり、シフィアがあっさり敵国の思うままに敗北した結果でもある。

そんなシフィア領内では、ある噂で持ち切りだった。

「クリスティーナ様が殺されたって本当かな………？」

「城があんな状態だから有り得るかもな………」

「そんな………じゃあ、魔王はどうなるんだよ。クリスティーナ様のお力でやっと封印できたっていうじゃないか」

「分からんよ。我々には何も………」

駐在しているリブラーク兵に聞こえないように村人がヒソヒソと話している。

その内容は、シフィアの若き女王の安否と現在の魔王の脅威。

自分たちよりも、女王の心配をするあたりこの国での人望の高さ
がはつきりと解る。というよりは、シフィアの民はそこまで自分
たちの身に危険を感じていなかった。

理由は、リブラーク帝国の過去の戦歴にある。リブラーク帝国と
いう国は、過去に敵国を宣戦布告無しで攻め落とした経歴が何度も
ある。宣戦布告無しの戦争はただの略奪行為でしかない。しかし、
リブラークはそうやって占領した国の民を絶対に故意に傷つけない
のを信条にしていた。その証拠に、今回の戦いでも城以外の死者は
無い。過去数回の占領を経験をしても民からの不満は意外にも
少ない。寧ろ生活が豊かになったというところも存在するくらいだ。

現在のリブーク兵の対応の良さにそれが真実であると民は実感する。それ故に、自身よりも姫の安否を気にするのだ。治安の悪い国なら未だしも、信頼ある王たちの元で暮らしてきた民としては複雑な気持ちなのだ。

滞在している村の様子に魔王は呟く。

「腰抜け共が……」

村人の話し声を聞いて魔王は苛立ちを隠せない。

『魔王様？』

心話でセシリーが声を掛けてくる。姿を見られただけで魔族と分かってしまうため、セシリーは現在魔王の影に隠れている。

「何故自分たちの国が占領されたのに、こうも落ち着けるのか私には理解できない」

『現状をはっきり認識していないのではないのでしょうか』

「現状を認識していない……」

魔王はセシリーの言葉に訝しむ。

「いくら政治に疎い連中でもこの状況を見れば明白だろう」

『魔王様。人間とは弱い生き物なのです』

セシリーは諭すように言う。

『ですから、自分自身を守るために、現実から背けてしまうものなのです。実際に敵国に占領を受けてもリブークの過去の行いから“きっと今回も他国のように大丈夫”と自分を納得させているので

しょう。でなければ、不安で潰れてしまいます』
「そういうものだろうか……」

大戦時で魔王国は、一人の魔族が人間に殺されたのをきっかけに全員が立ち上がった。そのため、人間も最大戦力で挑まざる得なくなり、被害がより拡大していった。当時の魔族たちの行動が全て正しいと言うつもりはないが、現実逃避に明け暮れるこの国の民よりはまともだと魔王は思った。

『それに我々や軍の人間と違って戦うことに慣れていないと、やはりいざという時に動くのは難しいでしょう。戦いとは、平和に暮らす者にとっては恐怖そのものですから』

その通りだ、と魔王は思うが、どこか納得できない。崇める王を失ったかもしれないこの状況で、何の行動も起こさない人間たちがとても信じられない。

『……魔王様。慌てる気持ちは解りますが今は冷静になつてください。勝てる戦いも勝てなくなります』
「わかつている」

セシリーに指摘されて更に苛立ちが増す。セシリーは何も間違ったことは言っていない。魔王は自分の不甲斐無さから冷静さを失っていた。

魔王は未だに人間の身体のままだ。

そのことが、今の魔王の精神を大きく乱していた。魔王が肉体を奪った人間はどれだけ民衆に顔が知れているか判断できないため、現在頭をすっぽり隠す程深くコートに付いたフードを被っている。コソコソと人目になるべく避けるようにして歩く姿は、とても魔王と呼ばれる者の動きではない。

暫く歩くと、人気のない小屋の前まで来た。汚れは目立ち、今にも崩れそうだ。既に使われなくなつて数年経つだろう建物は、逃亡する身である魔王には打つて付けの場所だった。

目的地に着いて魔王は入り口前で深呼吸する。相手に悟られないために自分自身を落ち着かせる。眉間に寄つた皺を無理矢理直して建て付けの悪い戸を開いた。

「おかえりー、クルス」

入ると共に緩い挨拶を貰う。声の主はこちらに顔を向けることなく白い地図のようなものを床に広げ、それをジッと睨んでいる。この国の軍の緊急連絡回線らしいが繋がったところを一度も見えていない。何度も見た光景だけに魔王はついつい溜め息をつく。

「まだやっているのか。いい加減に諦めたらどうだ」

「そんなのわからないじゃない。文句言うなら黙っててくれる」

「食事を持ってきたのだが……」

「もう！　そういうことは早く言ってくれなくちゃ！」

広げた道具を片付け、やっと顔を上げる。そこには、魔王を今一番悩ませる顔があった。

肩に掛かる程の赤毛に、育ちの良さが伝わる白く綺麗な肌。魔王と同じコートを羽織っているが、その下には王族のみ着ることが許される装束を纏っている。魔王の仇敵クリスティーナ姫――魔王が封印されている内に女王となっている――だ。ちなみにクルスとは、魔王が奪つた身体を持ち主の名である。

いつも通り平然を装つてクリスティーナに近づく。

「それで……何か解つたのか、クリスティーナ？」

持ってきた食事を床に並べながら魔王は訊ねる。

「・・・・・・・・」

しかしクリスティーナからの返答はない。不機嫌を隠そうともしずに黙る。

またか、と魔王は心の中で頭を抱える。

「成果はあったのか、クリス」

「別に・・・・・・・・いつも通りよ」

返事はあったものの姫はご立腹のようだ。

「ねえ」

「なんだ？」

食事を口に含めながらクリスティーナは言う。行儀が悪いことこの上ないが敢えて何も口を出さない。

「何でいつもみたいにクリスって呼んでくれないの？」

クリスティーナは訊ねる。クリスティーナにとって当たり前の疑問に魔王は返答に困る。

クリスティーナと魔王が身体を奪った人間の関係は、幸か不幸か恋人だった。そして、お互いの立場柄、二人の時クルスはクリスティーナのことを“クリス”と呼ぶ。似た名前から話すようになり、次第にお互い魅かれるようにこっそりと付き合っていた。肉体を奪った魔王にはクルスの記憶がしっかりと受け継がれている。だから、二人の間で記憶が食い違うことない。魔王自身が意識しない限り・・・・・・・・。

「何か口調も少し普段と違うし」

「これが私の普通だ」

「嘘よ！ 前はもつと砕けた話し方してたじゃない」

「ああ、随分と無理をしていたと自分でも思う」

「うそん！？」

突然の告白にクリスティーナは戸惑う。構わず魔王は続ける。

「私は農村の出身だ。だから上に行くためには他人より何倍も努力しなければならない」

「そ、そうね………」

王制度を取り入れている国では何事も貴族が優先されるのは最早常識だ。シフィアも例外でなく、実力が重視されるようになったのは近年である。

「そこでまず意識したのが言葉遣いだ。いくら実力で上り詰めても若者口調では示しがつかない」

「……その割には随分と偉そうな話し方ね」

「村の連中に騙されたんだ。からかわれたと言ってもいい。気づいた時にはこの口調で定着していた」

「不憫ね……よく出世できた褒めるべき？」

「運良く周りの人々に恵まれたからな。シフィアは貴族の中で平民を見下す連中は極一部だけだからよく助けられた」

「ふーん。そうなんだ」

あまり納得していない様子なので更に付け加える。

「クリスティーナと話す時は敢えて昔の口調に戻していた。自分と

してはおかしくない常にか不安だったが、クリスティーナが砕けて話せていたと思っていたのなら大丈夫だったのだろう。この言葉遣いが不快ならいつもの口調に戻そう」

わざと諦めたような声と表情で言うと、姫はそれを首を大げさに振って否定する。

「い、いいよ！ 話しやすい方で。……そこまで嫌じゃないし」

「ありがとう。その言葉に甘えさせてもらう」

魔王が内心ホッとすると、

「話し方は解ったわ。それで、何でクリスって呼んでくれないの？」

再び難題が戻ってきて魔王は溜息をつきそうになるが、すんでのところで止める。

「お前は親しい者に全員クリスと呼ばせているな？」

敢えて強い口調で言うと、突然の態度にクリスティーナは戸惑う。

「呼ばせているってのは語弊ごへいがあるけれど……まあ、そうね」

「普段から様付けられることはあっても、呼び捨てでクリスティーナと呼ぶ者は両親だけだったのではないか？」

クリスティーナはその人柄から周囲の交流が身分階級問わず広い。クルスとの出会いもそんなクリスティーナだからこそあったと言っている。中には年齢の近い同性などいても、生前のクルスのように

愛称で慕っていた。

「これは私個人の願望——我が儘と言ってもいいが、クリスティーナの中でも特別の存在でありたいと思っている」

「うん……」

「だから、誰もクリスティーナの名を愛称や敬称以外で呼ぶ者がいないのなら、私一人でそれを独占したい。だめだろうか……」

一瞬、クリスティーナは驚いた顔をするが、

「そ、そんなことない！ 全然良いよ！」

魔王の言葉に興奮したように答える。クリスティーナは頬を染めながら、そっかそっか、と呟いていた。どうやらうまく誤魔化せたようだ。

「（誤魔化すだけで一苦労だな）」

うまく困難を乗り越えた魔王はクリスティーナに聞こえないように呟く。

『ノリノリに見えたのはわたくしだけでしょうか？』

「（気のせいだろう）」

疲れた目でクリスティーナを見る。

「えへへ」

クリスティーナは満足以上の結果にうっとりした表情で食事を再

開した。

ドツと押し寄せた疲労に押し潰されそうになりながら魔王も食事を始める。味気のない食事だが今は贅沢は言えない。クリスティーナの方は先程の魔王の言葉が余程嬉しかったのか、幸せそうに食事をしている。

とても国単位の組織に命を狙われている少女とは思えない。そもそもこの二人が一緒にいることが自体が異例だった。

封印から魂だけ開放されたあの日。魔王はクリスティーナを殺す筈だった。しかし、魔王が封印の地を出た時にはシフィア軍は既に壊滅状態で、たった一人で出会うリブラーク軍を次々に切り捨ててクリスティーナを探した。封印以前だったら有り得ないことだったが、人間と成り果てた魔王の体力はあつという間に限界にまで陥った。そして、いつまでも沸き続けるリブラーク兵士から窮地を救ったのがクリスティーナだ。そのまま魔王を封印した柙外れの戦闘力でリブラーク兵を蹴散らし、城外へ脱出。現在に至る。

クリスティーナを殺すのは簡単だ。だが、今殺せば魔王の身体がリブラークの手に落ちてしまう。人間一人の力では国を相手にできないのは先日身を持って痛感した。魔王の身体を取り戻す条件は、封印の地に確実にに行けることとクリスティーナの死亡だ。現在の魔王では後者は簡単でも前者が非常に困難である。だから、リブラークという国全体を揺るがくらいのことをしなければならぬ。そのため――

「ヴァナデイス神殿国に助力を求めるのは本気なのか？」

クリスティーナに訊ねるとにやけ顔がなくなる。

「アスカンディナ地方で唯一中立を保っている国だからね」

ヴァナデイス神殿国はどこの勢力にも味方しない中立国家だ。国

同士の戦争の加担や魔族との対立など、争いごとには絶対に関わらない。先の大戦も例外でなく、アスカンディナ地方で唯一戦いに参加しなかった。その反面、飢餓や災害などの人為的でない事態には協力的な国である。

「一方的にやられたとはいえ戦争だぞ。シフィアに加担するとは思えない」

「わたしがヴァナデイスに助力してもらうのは魔王の方よ」

「ッ!？」

意外な内容に魔王は驚きを隠せない。

「クルスの言った通り戦争でシフィアはリブラークに奪われた。ヴァナデイスはきつとこれでは関与しないでしょうね。でも魔王は違う。魔王は今回のように争いの種となる。これなら動いてくれる筈よ」

「………具体的にどうしてもらおうつもりだ？」

「魔王の保護、もしくは破壊をしてもらう」

魔王は対応を迫られた。

クリスティーナの提案は大きな賭けだった。自分の身体と接触するチャンスであり、同時にヴァナデイスが勝手に作業をやることになればもう終わりだ。この提案が通らなくても、チャンスを待たなければならぬ。人間の寿命が百年前後である以上のんびりしてられない。

「………そうするしかないだろうな」

「なら決まりね。今晚村人が寝静まってからここを発つわ」

「わかった………」

これで話は終わり、とクリスティーナは食器を片付け始める。

『これで宜しかったのですか？』

セシリーが心配するように声をかけてくる。

「（今はこれ以外ないだろう。近隣の国を挑発して戦争を誘うこともこの人間の身体を使えば可能だろうが、クリスティーナがそれを許す筈がない。ヴァナデイスに着くまでに考える。お前も何か案を考えておいてくれ）」

『畏まりました』

――さて、まずは無事にシフィアを出れるかどうかだな。

魔王は国境付近の地図を広げた。

第2話：旅立ち（2）

ヴァナデイス神殿国はシフィア王国から西へ真つ直ぐ五日程歩いて辿り着く場所にある。魔王たちはその間にあるルーニス王国を訪れていた。

シフィアの国境を出てから既に三日経つが、ヴァナデイスまでまだ程遠い。人目を避けるために敢えて迂回しているとはいえ、まだ中間地点のルーニスにいるのはあまりにも遅過ぎる。

その原因はクリスティーナにあった。城生活の長いクリスティーナは如何に戦闘能力が飛び抜けていても、旅をするのはそこの商人の方がマシなくらい足手纏いだった。長期の徒歩に慣れてないせいで歩くペースが遅く、野宿も否定的で毎夜どこかの宿屋を探さなければならぬ。お陰で資金は底を尽き掛けていた。

「魔王様。頼まれたものを買ってまいりました」
「ご苦労」

魔王はクリスティーナに悟られないよう気配を消したセシリーを部屋に招き入れる。魔族とバレないように魔王が渡したコートを脱ぎながら部屋に入ってくる。セシリーから頼んでおいたものを受け取り、満足気に頷く。

「悪くないな。これなら今よりはマシになるだろう」

セシリーが渡したのは女性ものの服と靴。クリスティーナのために態々町で買って来てもらったものだ。クリスティーナの格好は普段コートで隠していても、誰かに見られればそれだけで危険を伴う。シフィアの王とまで判らなくとも、高貴の出であることは子供でも気づけるのだ。

目立つことを避けたかった魔王は、クリスティーナがシャワーを浴びている内に服や靴などを金に替えていた。そのままではすぐに怪しまれるため、なるべく装飾は外してバラバラに売った。時間が経てば足が付くだろうが、今日一日くらいなら大丈夫だ。そして、十分な資金を確保できた魔王は、そのお金で旅用の服と靴をセシリーに買ってきてもらうように頼んだのだ。

「サイズの方も問題ありません。これで動きやすくなるでしょう」
「助かる。女の服や靴など私には分からないからな」
「こんなことでしたらいつもで仰って下さい」

セシリーが言うと、シャワー室から音がする。

「クルス？ 誰かいるの？」

セシリーが慌てて魔王の影に入る。

その直後、バスルームから濡れたままのクリスティーナが顔だけ覗かせる。危ないところだった、と魔王は内心ひやひやしながら答える。

「別に誰もいないが？」

「おっかしいなー。気のせいか……………」

クリスティーナは頭に巻いたタオルで髪を拭きながら部屋に入ってくる。たったそれだけの行動で魔王は激しく狼狽ろうばいする。

「ななな、なな……………」

「ななな？」

「何故服を着てこない!？」

クリスティーナは服を着ていなかった。裸ではないが、体をバスタオル一枚だけ巻いている姿は魔王が戸惑うのに十分だ。シャワーを浴びている内に魔王自身がこっそり服を売買していたのだから当然のことだが、まさかタオル一枚だけで部屋に戻ってくるとは思わなかった。

「熱いし」

「熱かろうが服は着ろ。お前には羞恥というものがいいのか！」

「部屋にいるのわたしただけだし」

「私が困ると言っている！」

魔王の様子にクリスティーナは首を傾げる。そして、ニヤツと口元を吊り上げる。

「もしかして照れてる？」

「そ、その格好は目のやり場に困る。それだけだ」

「胸を見れば良いと思うわよ」

「胸を………？」

言われるがままに魔王はクリスティーナの胸を見た。意外にも豊かな胸をしている。普段コートで隠れてたせいで気づかなかったが着痩せするタイプのようだ。腰が括くれているのもあってより胸がより大きく見えて――

「ってちがう！」

「あっはは！ クルスってば可愛い！」

そこまで考えて魔王は頭を抱えて絶叫する。そんな魔王を見てクリスティーナは腹を抱えて笑う。

『魔王様。落ち着いてください。バスタオル姿が何だと言うのですか』

「（よく見ろ。濡れているせいでタオルがすっかり体に張り付いてる。体つきがこんなにもはつきり解るのは最早裸を見ているも同然だろう!?!）」

『全く違うと思いますが・・・・・・・・?』

「（何故だ!?!）」

『例え全裸で在ろうとも、魔王様は堂々とすべきです。女性経験がお有りなのですからそこまで慌てなくても・・・・・・・・』

「（経験は・・・・・・・・確かにある。しかしそう慣れるものではないだろう? 小恥ずかしいというか・・・・・・・・）」

『今の魔王様はまるで乙女です』

セシリーの言葉に地味に傷ついて項垂れると、丁度クリスティーナも笑うのを止めた。

「クルスがこんなにも奥手だとは思わなかった」

「この局面で襲い掛かる者がいれば、そいつは節操無しだ」

「これで節操無しって・・・・・・・・」

「何というか、雰囲気がこう、な・・・・・・・・」

自分でも何を言っているか解らなくなってきた魔王は必死に言葉を探す。

そんな魔王を見たクリスティーナが悪戯を思いついた顔で近づく。そのまま、魔王をベットに押し倒した。

「なっ・・・・・・・・」

「これなら、雰囲気出る?」

クリスティーナが魔王に覆い被さる。

お互いの顔の間が三十センチ程しかない。そのせいか石鹼と女性特有の香りが魔王の鼻を刺激し、緊張を誘う。

クリスティーナも緊張しているのか顔が強張り、頬がバスルームから出た時よりも赤い。クリスティーナはその姿勢のままジツとこちらを見つめている。この先どうすればいいのか迷っているわけではなく、魔王の反応を窺っているのだ。

「（…………セシリー。ここはどう対処すべきだ？）」

どうすればいいか冷静に判断できない魔王は、自分の優秀な使い魔に助けを求める。

『抱きましょう』

「（セシリー！？）」

『魔王様。ここで手を出さなければ男が廃ります』

突き放されたような言葉だが、この状況ではそれが最善だと魔王でも思えた。ここで何もしなければ勇気を出したクリスティーナを傷つけることになる。今後一緒に旅をするのに当たって大きな影響が出る。しかし、魔王はクリスティーナの恋人の身体を使っているだけで、決して“クルス”ではない。何をするべきか解っていても理性がそれを許さない。

直視できなくなった魔王は視線を逸らす。左右どちらかに逸らせばいいものを魔王は視線を真下に向けた。そこで魔王は自分の失敗に気づく。目の先には大きな胸の谷間があった。そして、まるで狙ったかのようなタイミングでタオルが開ける^{はだ}。

「ぶっ」

「『子供か！？』」

クリスティーナの裸体を見たと同時に、鼻から血を噴いた魔王に
対して女性二人が厳しい突っ込みを入れる。魔王は鼻を押さえ、ク
リスティーナは突然の血にベットから飛び退いた。

服の袖で鼻血を拭くと既に血が出なくなっていた。出るのも突然
ならば、止まるのも突然である。ホッとしながら顔を上げると、ク
リスティーナと目が合った。だがすぐに視線が外れる。

気まずい空気が出来上がっていた。クリスティーナはタオルを巻
き直していたが、頬が赤いままだ。

「――風邪引くといけないから服着るわね」
「ああ」

沈黙に絶えかねたクリスティーナはバスルームへ向かおうとする。
その背中に魔王は声を掛ける。

「そうだ。服ならこれを着るといい」
「え?」

先程セシリーに買って来てもらった服をクリスティーナに差し出
す。それをクリスティーナは驚いた表情で受け取る。

「これを、わたしに……?」
「さっき買ってきた。サイズの方は適当だったから合っているとい
いのだが…….ああ、これから寝るには少し窮屈か」
「ううん。そんなことない」

そう言って、クリスティーナははにかんだ顔を隠すように渡した
服を抱きしめる。

「早速着てみていい?」

「ああ」

クリスティーナがバスルームへ駆け込む。そして、すぐに出てくる。

「どう？ 似合う？」

旅のために選んだ服だが、クリスティーナにはとても似合っていた。

クリスティーナが着ているのは、普通の市場で売られているワンピース状の服だ。動きやすさを重視し、尚且つ一般人に溶け込めるよう敢えて一般で売られている服を見繕った。値が安い割りに素材が良いため長旅でも持つだろう。靴の方も荒道でも対応できるブーツを選んだから、明日は今まで以上に早く目的地に近づける筈だ。

「ああ。良く似合っている」

「えへへ」

たったそれだけで機嫌を元に戻したクリスティーナに魔王は安堵する。

「そういえばさ」

クリスティーナが思い出したかのように言う。

「前着てたわたしの服知らない？ さっきから見当たらないんだけど」

キヨロキヨロと辺りを見渡すクリスティーナに魔王は告げる。

「あれなら売ったぞ」
「売った!？」

クリスティーナの目が驚愕で見開かれる。今度は怒りで顔が真っ赤になる。

「な、何で売ったのよ？」

震える声でクリスティーナは訊ねてきた。何を怒っているのか解らず魔王は素直に答える。

「資金が付き掛けていた。だから金が必要だった」

「だからってわたしの服を売らなくてもいいじゃない！」

「安心しろ。一日で足が付くようなへまはしていない」

「そういうことじゃなくて……」

苛立った声でクリスティーナは言う。

「せめて売る前に一言言ってくればいいのに」

「それはすまなかった。今買出しにいかねければ市場は閉めてしま
うだろうし、何事もなく明日の朝を迎えられるとは限らないから少
々焦っていた」

「それはそうだけど……」

言いたいことは解るが納得が出来ないといった顔をする。

魔王はクリスティーナの対応に訝しんだ。今の説明は理由がしつ
かりとした内容なのに、納得いかないというのはどうことなのか。
仕方がない、と魔王は更に説明を付け加える。

「それに今泊まっている宿も引き払う金が朝までに必要だったわけ

で——」

「もうわかったわよ」

魔王の説明を遮り、クリスティーナが疲れたようにベットに倒れ込む。枕に顔を押し付けた姿勢のまま言う。

「疲れたから寝る」

「……そうか。なら私はシャワーを浴びるとしよう」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

クリスティーナの背中を見ても不機嫌なのがよく解る。クルスの記憶でもその原因を知ることが出来ない。

——何がいけなかったのだろうか。

魔王には最後まで解らなかった。

第3話：旅立ち（3）

朝食を済ませ、泊まった宿を発ってから五時間ほど経過した。

全く変わらぬ景色にクリスティーナは溜息をついた。思いのほか大きかったのかクルスが振り向いてくる。

「もう疲れたのか？」

「ううん。そんなことはないよ」

「そうか」

軽く言ってからクルスは手にした紙に向き直る。クルスが見ているのは、昨日泊まった町で購入したルーニス王国の地図だ。

二人は現在、ルーニスの国境内の山地にいる。人目を避けながら通るには最高の場所で、山に生えた木々がルーニス本来の道から二人を覆い隠してくれる。しかし当然ながら人が通るための道ではないため、自然のままの大地を木々の間を縫うようにして進まざる得ない状況だ。そのせいで体力は平地を歩くより多く必要とする。それでもクリスティーナが未だに音を上げずに歩き続けことが出来るのは、クルスに買って貰った服と靴のお陰だ。体力が付いてきたのも事実だが、それ以上に体が動かし易い。服は基より、靴が荒道でも足を取られることがなく、山道という環境でも普通に対応してくれる。

本当なら喜ぶべきことだがクリスティーナの表情は暗い。心が晴れないのは昨晚のクルスの行動にあった。

昨晚の出来事は正直頭にきたが、一晚経てば流石に気持ちが悪く落ちてきた。王族として身に纏っていた装束は、背負っている剣を除いて唯一のシフィアでの持ち物だ。金銭面で当てのないクリスティーナとしてはいつか資金にする覚悟はあったが、シャワー中にこっそり売られることになるとは予想できなかった。突然の“彼”ら

しくない行動にクリスティーナは疑念を抱く。思えば、城と一緒に出てからおかしな点はいくつもあった。状況が状況だけに気のせいと感じていたが、それも限界がきていた。

——これがクルスの本当の姿なのかな。それともわたしが我が儘なのかな・・・・・・。

王城で過ごしたクルスとの思い出は楽しいことばかりだった。性格から意見が食い違うこともあったが、今回のような気持ちは初めてだ。

現在の状況にクリスティーナは本音を言うと、嬉しかった。リブラークによってシフィアは無くなったが、そこで暮らす民は変わらず平和のままだ。逃走の際に立ち寄った村の様子からも、自分たちが無事なら王が誰でも構わないのが解る。平和なら、民が幸せに暮らせるなら——それで良い、とクリスティーナは思う。王として民を守るために幼少から政治の勉強は勿論、剣や魔法の腕を磨いてきた。そのことに疑問を抱いたことはないし、それが正しく自分の目指すものだと思死に頑張ってきた。

しかし、一人の女の子としては耐えられないことだった。王である以上、好きな男性と結婚できる可能性は低く、相手が特別な家柄の出でないなら尚更だ。それではクルスと結ばれることなど出来ない。そのことがクリスティーナの——王としての心残りだった。当時は、クルスと幸せになりたい気持ちが強くなる一方、どこか諦めた感じになる自分に嫌気が差していた。そして、シフィアが失われた今、クルスと共にこうして旅をしている。旅の目的が違えど、夢が叶ったと言っても過言ではない。

二人の距離は三步程しかない。最初は並んで歩いていたが、現在はクルスが少し先行している形となっている。クリスティーナの歩く速度が遅いのが原因だが、恋人の距離としては遠過ぎる。追いつきたくてもこれ以上足がいうことをきかない。今の距離を維持するだけで精一杯だ。クルスはそんなクリスティーナの心境に気づくことなく歩き続ける。地図に目を向けるばかりでこちらに気かけよ

うともしない。

——わたしは夢を見てるのかしら。現実の恋って結局こんなものなのかな……？

クルスへの疑問から今度は自分の常識を疑い始める。もう自分が何を考えているか解らなくなり、頭の中がぼうつとする。そして、そのまま体がぐらつと傾く。

「あれ……」

情けない声を漏らしながらクリスティーナは体のバランスを崩す。同時に、誰かに支えられる。

「大丈夫か？」

支えたのは当然ながらクルスだ。クリスティーナの肩を抱きながら、もう一方の腕で額に触れる。

「軽い熱中症だな。少し休もう。丁度良いところを見つけたところだ」

「気にしないでいいから……わたしなら大丈夫よ」

「私が休みたいんだ。悪いが付き合ってくれ」

抵抗を試みたクリスティーナだが、クルスに軽く流される。それが彼なりの優しさだと知っているクリスティーナは微妙な気持ちで頷く。

やや強引にクリスティーナはクルスに引っ張られ山の奥へと進む。すると、木々で生い茂っていた場所の一角が切り開かれているのが見える。正確には自然によって広がった空間がそこにあった。

「池？」

「ああ。丁度日陰もあって休むには絶好の場所だ」

木々に囲まれるように池があった。

クリスティーナは近くの木に凭もたれながら腰を掛ける。日陰に入り、ぼうつとした頭が徐々に落ち着くのが解る。風も流れてきて更に涼しくなる。その涼しさを感じながら目を閉じていると、頬に冷たいものが当たる。「ひゃあ」と恥ずかしい声を上げると、目の前に水筒が差し出される。

「水だ。汲んだばかりだから良く冷えているぞ」

「あ、ありがとう」

お礼を言って水筒に口をつける。クルスの言う通りよく冷えていて喉が潤う。飲み終えて水筒をクルスに渡すと、そのままクリスティーナの口にしたところで水を飲む。

「あ………」

たったそれだけで何だか不思議な気持ちになる。クルスはそれに気づくことなくお腹を擦る。

「少し小腹が空いてきたな。これなら町で何か買っておけば良かった」

「それなら良いがあるわよ」

クリスティーナはリュックから包みを取り出す。包みを広げると、中には沢山のイチゴがあった。包み一杯に納まったイチゴをクルスは物欲しそうに凝視する。クルスの好物なのだ。

クリスティーナはその内の一つをクルスに差し出す。

「またそんな無駄なものを買って……」

「いらなの？」

「捨てるのは勿体からな」

言い訳するように言いながら、クルスはクリスティーナからイチゴを受け取って口に放り込む。そして包みから一つ、また一つとイチゴを取っていく。頬が緩んだ顔で幸せそうに食べる姿は子供っぽくて可愛い、とクリスティーナはこっそり思いながら自分もイチゴを食べる。甘くてうまい。

沢山あったイチゴはあっという間になくなり、クリスティーナは包みをリュックに仕舞った。お腹も膨れて少し眠くなる。このままここで昼寝でもしてしまいたいという衝動に駆られる。

ふと、クルスの方を見ると難しそうな顔をしていた。

「どうかしたの？」

「いや、今後のことを考えていた」

「何か気になることもあった？」

「気にするな。クリスティーナの心配することではない」

そう言ってクルスは荷造りを始める。クルスが気にするなと言うなら本当にそうなのだろう。しかしクリスティーナにとっては良い機会だと思った。そして思い切って訊ねる。

「クルスは、さ。今後のことをどうしたいと思ってるの？」

「そういうクリスティーナはどうしたいと思ってるんだ」

質問に質問で返される。

軽く流された気持ちだが、こちらの意見を伝えるのも重要なので、敢えて気にしないことにした。

「わたしとしてはシフィアは正直どうでもいい。国を取り戻したいとか、リブラークに復讐したいとか……が普通なんだろうけど、どうもそういう考えはわたしには無理みたい」

「それなら一体どういう――」

「わたしはみんなが平和ならそれでいいの。まあ、リブラークのやり方は気に食わないけどさ。最終的にそこで暮らす人たちが幸せなら、わたしが頑張る意味なんてないな、ってね」

「……」

「気掛かりなのは魔王だけ。あれはわたしがやらないといけないから。ただ、それだけ！」

クリスティーナは自分の思うままの言葉で言い切った。この気持ちに嘘はない。クリスティーナの心から望むことだ。魔王の件が終わった後のことはまだ考えていない。クルスと二人でずっと暮らせたら――と夢は見るが今は魔王を優先している。

話を聞いていたクルスの表情はやや暗い。

「王として失格よね」

「……そうだな。しかしその考えは個人的に悪くない」

「そ、そう？」

クルスに言われると何だかこそばゆい。少しだが、クリスティーナは自分の考えに自信が持てた。

「だが私には賛同しかねる部分もある」

「え？」

認められたと思った矢先のことにクリスティーナは困惑する。クルスの表情も陰しくなりクリスティーナは動揺を隠せない。

「やはり私は憎いよ。油断すればすぐにでも復讐したい衝動に駆られてしまう」

「クルス……」

「仲間が大勢死んだんだ」

クルスが搾り出すように呟く。

「助けられる命が沢山あった。それも目の前で！　しかし私が未熟だったばかりに誰も助からなかった。次々に仲間は私のすぐ隣で死に、生き残っている者も容赦なく刃を向けられ殺された。……・最後は、自分自身すら守ることも出来なかった」

クリスティーナは思い出す。

クルスはクリスティーナが駆けつけた時には既に一人でリブラーク兵たちと戦っていた。それは仲間が死んで孤立したからに他ならない。クリスティーナが偶然その場に遭遇しなければ、今ここにクルスはいないだろう。

仲間が死に、自分だけが助かったことにクルスは負い目に感じている。ショックだったに違いない。目の前で何人も仲間が死に逝く中、自分だけに救いの手が差し伸べられたのだ。いくら平気を装っていても、何も感じていない筈がない。

それをクリスティーナは今更ながら気づく。そんなこと、少し考えれば分かることなのに……

——クルスがそんな風に思ってるなんて……考えもしなかった。

クリスティーナは城を出てからずっと自分ことばかり考えていた。クルスがいつものように相手にしてくれないことを怒ったり、冷たい態度に不審を抱いたり、と自分勝手にも程がある。それをクリスティーナは痛感していた。

あの日から、クルスは苦しんでいた。それでもクリスティーナに

気づかれないようにしながらずっと近くで支えてくれた。いつものクルスらしくない行動は、そんな彼の精神的な疲労からのものだろう。

クルスの目から涙が零れる。

「何故私を助けたんだ。殺してくれれば――放って置いてくれれば楽になれただろうに……」

それは城を抜け出してから始めての愚痴だった。

そしてクルスの苦悩そのものだった。

クリスティーナはクルスに手を伸ばす。殆んど無意識に伸ばした両手でクルスを自分の胸元に抱き寄せる。

「……ごめん。無神経なこと言って」

自然とクリスティーナの涙腺もゆるくなる。それでも泣かないように今の想いを伝える。

「ずっと苦しんでるのに気づけなくてごめん。わたし、自分のことばかり考えてた」

「そんなことはない。クリスティーナだって苦しんでいただろう」

「ううん。クルスはわたしを支えてくれた。でもわたしは何もしてあげられなかった」

「イチゴはうまかった」

「あはは……たったそれだけしか出来なかったけどね」

クルスの髪を擦りながらクリスティーナは言う。

「今度はわたしが支える。だから、これだけは言わせて」「なんだ？」

「これはわたしの我が儘。でも本心からの願いよ。――もう、自分で自分を殺すようなことは言わないで」

「・・・・・・・・っ」

「どんな形でも良いから生きていて」

微かにクルスの体が震える。嗚咽が漏れる。それを必死に隠そうとするのが解る。

十秒程待ってクルスから出た返事はたった一言。

「――もう少しだけ、こうさせてくれ」

「ええ」

返事になってない答えだが、クリスティーナはそれを受け入れた。子供をあやすようにクルスの頭を胸で抱きながらついに自分も涙を零す。

暫く、二人は静かに泣いた。

第4話…天使

太陽が沈み、辺りが真っ暗になった。月明かりのみを頼りに魔王たちは夜の山を歩く。

夜の山は危険なのは承知だが、魔王たちには歩みを止めない理由があった。

まずは休める場所が確保できないこと。慣れない地理のせいで地図を眺めても全く分からない。荒れた道なき道を通っているため、中々野宿できる場所が見つからない。そしてもう一つの理由は、歩みを止めて顔を合わせるのが気まづかったからだ。

昼間のことを思い出し、羞恥^{しゅうち}だけで死ねるのではないか、と魔王は苦悶する。

「（セシリー。寝る場所を確保した後、クリスティーナとどう対話するべきだ？）」

この事態を解決するため、セシリーの助力を求める。

『普通に話せば良いかと』

だが、返ってきたのは、何を言っているんだと言わんばかりの言葉だった。

「（気まづくて顔を合わせ辛い）」

『それなら、気まづさを忘れるような話題を提供して距離感を戻しましょう』

「（小粋なジョークか？）」

『それは止めた方が良いかと……』

そんなやり取りをしている内に、今まで歩いてきた荒道が嘘のよ
うな平地に出た。

明らかに開拓された形跡のある場所で、切り倒された木々の一部
が端に積まれていた。馬車など道幅を多く必要とするものが余裕で
通れる程広い。そういう切り開かれ方をされていることから、ここ
で新しい道の開発を行っていたのかもしれない。

しかし、直進するように作られた平地は雑草などで生い茂ってい
た。人工的なものでなく自然に生えた草だ。積まれた木々も暗くて
判り難いが、よく見ると朽ちている。放棄されてから長い時が経っ
ている証拠だ。

『こんな場所に開拓地……？ この辺りに何かあったでし
ょうか』

「(何もない。自然の広がった場所が続いているだけだ。最近の地
図を購入したから間違いない)」

『だとしたら一体……』

「(分からん。しかし最近まで人が手を加えた様子がないなら、一
晩ここで野営しても問題はないだろう)」

魔王は、まだそれ程朽ちていない木に腰掛ける。そのままクリス
ティーナに向き直る。

「今日はここで休もう。ベットで寝ることはできないが今回は我慢
してくれ」

「うん。わかった」

クリスティーナは何事もなく魔王の横に座る。
その様子に魔王は困惑する。

「(何故クリスティーナは普通にいられるんだ)」

『何故と言われましても、気にしているのは魔王様だけです』

「（ふむ……）」

そうなのか、とやや納得しかねながらも受け入れる。

魔王は肩を揉む。重いリュックを背負っていたせいで肩が痛い。隣のクリスティーナは伸びをして身体をほぐしている。お互いに疲れが溜まっていた。

「今日はもう寝よう」

「早いわね」

「いつもと違って軟らかい布団で寝れるわけではない。野宿で休息するのも限界がある。だからその分睡眠を取っておく」

「ベットで寝れないのもそうだけれど、シャワーがないのも辛いわね」

「そこは次の町まで辛抱してくれ。今の我々に水は貴重だ」

立ち寄った池で水は十分に確保したが、温存しておくに越したことはない。例え余裕があったとしても、見知らぬ地で旅をする以上身体を洗うために使うのは危険だ。女としては男より汗の臭いなど気になるだろうが、ここは耐えてもらうしかないまい。

魔王とクリスティーナは早速野営の準備を始める。

すると、クリスティーナがいきなり剣に手を伸ばす。

「クルス！」

『魔王様！』

二人の叫ぶ声と共に、魔王はクリスティーナに蹴り飛ばされる。同時に魔王がさっきまでいた場所が吹き飛んだ。

「攻撃！？ どこから？」

「あそこ！」

クリスティーナが指した場所を見る。そこには魔王たちから十メートル程離れた場所に剣を携えた者が一人いた。

一人、と表現するのは間違いかもしれない。その者は明らかに人でない威光を放っていた。

大きく広げられた翼は月明かりを受けて白く輝き、見る者を圧倒する。闇夜でも判る紅い鎧は頭から足まで余すことなく包まれている。頭上に浮いた光の輪はその者の純粹さを示す。そんな姿をした存在を、魔王は一つしか知らなかった。

「――天使」

「え！？」

魔王の呟きにクリスティーナも驚きを隠せない。

天使とは、世界で唯一神の僕として認められた存在である。神の傍に仕え、神のためだけに生きる種族。例外もあるが、本来なら堕天でもない限り『ディオ・リナ』に出現する筈がない。

しかしそれが目の前にいる。それ故に魔王は齒噛みする。

――どうして気づけなかった。

天使は見れば解るが、それなりに強大な存在である。気配なら例え隠していても、本来の魔王であればすぐに看破しただろう。それだけで魔王が奪った人間の身体が魔術師に向いていないのか解る。使い魔であるセシリーでも察知できたのだから明白だ。

悔しい気持ちを抑えながら魔王は敵を分析する。

穢れの無さを表した天使の輪に、純白の翼。神の従属を示す汚れない鎧。そして、その鎧の色が意味するのは――

ヴァーチユーズ

「第五位天使――力天使か」

「分かるのですか」

初めて天使が口を開く。兜から無表情な顔が覗けた。その顔は男にも女にも見えるが、声から察するに男性だろう。

天使が纏う鎧には意味がある。自分の身を守るための防具であると同時に、階級を色で見分けられるために使われる。そのため今回現れた天使の鎧の色から魔王はすぐに力天使だと判った。

「現代では『ディオ・リナ』で天使について知る者は時が経つにつれて減ってきているというのに……・……・感心しました」

「私にとっては常識に等しい」

「ほう——ならば、『ウィルフレド・イマ』での力天使の立場をご存知ですか？」

『ウィルフレド・イマ』とは、『ディオ・リナ』を管理する神々と天使が住まう世界だ。たった三柱の神とそれに従う天使のみが暮らすその世界は、『ディオ・リナ』で生活する魔王には未知の場所だ。

だが、魔王は悩むことなく問い掛けに答える。

「天使の階級としては五位に数えられるが、神に仕える天使としては二番手の扱いとなっている」

「何故？」

「第一位から第三位の上級天使が神ですら力を持て余す存在だからだ。力が有り過ぎる故に実体も理性を持たず、力の塊と化している」
「付け足すなら、実体と理性を持てば神をも凌駕する存在となり兼ねないからです」

「だから今でも上級天使は『ウィルフレド・イマ』で幽閉されている。もっとも、奴らには幽閉されている自覚すらないだろうがな」
「その通りです」

天使の情報はある程度なら魔王は熟知している。

だからこそ解らなかった。何故神に仕えている筈の天使が目の前にいるのか。魔王は一つの結論を口にする。

「お前はローレンツェルの天使なのか？」

ローレンツェルの天使。

それはローレンツェルと呼ばれる人間によって放置された大聖堂を拠点としている墮天使の集団だ。『ウィルフレド・イマ』から追い出された墮天使たちは『ディオ・リナ』に移り住み、ローレンツェルに籠っているという。魔王でも詳しく知っているわけではないが、この天使たちの大きな特徴として、彼らには仕える神がない。それ故に自由に行動が出来る。

「違います。彼らと勘違いされるのは不快です」

天使は首を振って否定する。魔王も解っていただけに嫌な気持ちを隠せない。

天使が墮天使すれば、頭の輪と翼が黒く染まる。中には容姿すら変わる者もいるという。しかし目の前の天使にはどれも当てはまらない。それがどういう意味か魔王は理解しているが、信じたくない気持ち強い。

「だったら何しに来た？ 神学でもご教授してくれるのか？」

「それも違います。……いや、そうであったなら良かったのですが」

「？」

「私をお気になさるのは当然のこと。しかしお連れ様の方にも気を使うべきだと忠告します。……もう、遅いかもしれませんが」

「何・・・・・・・・・・？」

天使に言われるがままにクリスティーナの方へ顔を向ける。
クリスティーナはどこか怯えたような表情で魔王を見ていた。心配になって一步近づくとクリスティーナも一步下がった。どう見てもいつもと様子がおかしい。

魔王が何が起こったのか理解できないまましていると、セシリーから心話で声を掛けられる。

『・・・・・・・・魔王様』

「（クリスティーナに何があった？）」

『喋り過ぎです』

「（何をだ？）」

『お忘れですか。天使については、魔王様だから知り得たことなのです。・・・・・・・・“人間クルス”には決して知り得ないことなのです』

「（・・・・・・・・）」

魔王は絶句する。

当たり前のように天使と会話していたが、その内容は普通なら知ることすら難しいことだ。『ディオ・リナ』と『ウィルフレド・イマ』の二つの世界に交流がない以上、その情報を得るには先祖より語り継がれるか、専門の学者でもない限り決して知ることが出来ない。

魔王は、“魔王”だったからこそ識っていたのだ。

魔王が奪った身体の主は平民の出身だ。古くから先人より何か受け継がれているわけでも、専門の学者に知人がいるわけでもない。それは、身体を奪った魔王が一番良く知っていることだった。

「ねえ、何でクルスがそんなに天使について詳しいの・・・・・・・・」

「？」

クリスティーナの疑問は尤も^{もつと}だった。当然ながら今口にした情報は、シフィアの王であるクリスティーナですら分らない内容だ。それを一騎士が日常会話のように話していれば不審に思うのも無理はない。

「答えは簡単ですよ。クリスティーナ様」

十メートル以上もある距離を、一瞬に近い速さで詰めた天使が手にした剣を魔王に振り下ろす。

「クルス！」

魔王はクリスティーナの声に関係なく反射的に剣を抜いていた。辛うじて防いだものの、たった一撃で腕を痺れる感覚が襲う。反撃することも出来ず、鏢^{つば}迫り合いになる。徐々に押され、主導権を手に持っていかれる。

「二刀流ですか。使いこなすには相当の修練が必要だったでしょう。……あなたが本物なら」
「うるさい！」

魔王はごり押しで天使の剣を弾く。そのまま天使に斬り掛かる。魔王の今の剣術は奪った身体の主が習得した技だ。それを魔王が人間クルスの記憶から学び、元々身体が憶えていた感覚を利用して戦っている。しかし知識として二刀流を熟知していても、体を動かす以上それだけでは意味がない。

本来、剣すら触れることのなかった魔王が、慣れない剣術をこなしているのは単なる勘に過ぎない。知識の中から学んだ剣術と“な

「なんとなく馴染みのある」動きで剣を振るっている。そのため、必ずと言っていいくらい抜け目がある。そこを魔王の影に入ったセシリーに、クリスティーナに分からない程度の魔術で補助してもらっている。

魔王の本来の戦闘スタイルとしては、魔術を行使することを前提として戦うものだ。だが現在の魔王には魔術が使えない。それは、魔王が奪った身体に、魔力が全く備わっていなかったからだ。

魔術師の強弱は習得した魔術の数と魔力の高さで決まる。魔術は剣術と違い、修練すれば誰にでも扱える技というわけではない。確かに才能が必要なものだ。突然魔術の才が開花する者もいれば、古くからの血筋によって受け継がれる者と二つのパターンがある。前者は魔王で、後者はクリスティーナに当たる。

そして、魔王は魔術に長けた者の中でも最たる者だ。莫大な魔力を体内に保持し、あらゆる魔術を知る魔王は魔術師に置いて最強と言っても過言はない。それも昔の話で、強大な魔力の備わった身体は封印されてしまったため、魔術の行使方法を知っていても発動させることが出来ない。

今ではセシリーのサポートでやっと天使の動きについていけるのが限界だ。

使い手と同じく汚れない白い剣が魔王を襲う。

「良い動きです。それを失うことになるとは…………とても残念です」

「思う通りに行くと思うなよ」

「その通りよ！」

魔王が戦っている横からクリスティーナが天使に斬り掛かる。それを回避して天使は飛翔する。

「出来ればクリスティーナ様とは剣を交えたくはないのですが」

「ふん。そう思うならさっさとやられなさい」

クリスティーナは左手を天使に向けて掲げる。掌から月と太陽を示すシフィアの魔法陣が浮かび上がる。そこから光の矢を無数に出現させ、天使に放つ。

「小賢しいことを！」

天使はその攻撃を回避し、避けきれない矢を剣で叩き落す。それを追いかけるようにクリスティーナは魔術で空を駆ける。

その姿を見た天使は初めて表情を崩す。

「空を飛べるのはあんただけじゃないのよ！」

「くっ」

クリスティーナに重い一撃を貰って空中でよろめく。クリスティーナの手は休まない。体勢を整えようとする天使に容赦なく攻撃を加える。落下中にも拘らずうまくそれを受け止めた天使は、流石空で戦い慣れているといったところだ。

天使はクリスティーナに言う。

「何故あの者を助けるのです。先程のやり取りを見て疑問を感じなかったのですか！？」

「気になることはあった。でも悩んでも仕方ない。それに、それがあんたにクルスを斬らせる理由にはならない」

「その疑問が今後のあなたの人生を左右する問題だとしてもですか？」

「だとしたら尚更あんたは関係ないでしょうが！」

空中に見えない地面があるようにクリスティーナと天使は斬り合

う。

剣撃が速過ぎてお互いの剣がぶつかった時の火花しか見えない。高速の斬り合いでも天使の方が押されているのが魔王でも解った。人間が、天使を——それも力天使を圧倒している。魔王を倒した時もそうだったが、クリスティーナの潜在能力は最早人間を超えている。

「気になることがあったら聞けばいい！ 話す気がないなら無理にでも聞き出せばいい！」

クリスティーナの剣に天使がついにバランスを崩す。そこへ間を空けず踏み込む。

「私はあなたのためを思って——」

「関係ない！ わたしたちの問題に後からしゃしゃり出たあんたにつべこべ言われる筋合いはない！」

天使が地面に叩き落される。勢いよく吹き飛ばされた天使は魔王に向かって落下してくる。

「クルス、そっち行ったわよ！」

「おう！」

魔王は落下物を一閃する。しかし天使は空中で回転してそれを受け流し、魔王の背後に回る。

「何て身のこなし——」

「言っても無駄なら、見てもらう他ありません」

天使の剣が魔王を——魔王の影を刺す。刺した剣は地面でなく影

だけを正確に貫いている。それが魔王には解る。その事実には魔王は驚愕を隠せない。

「まさか!？」

「その、まさかです」

剣が発光する。

発光した部分から影が引き剥がされる。その影が人の姿で突然出現する。

「きゃっ」

「セシリー!？」

紅いドレス風の女性がよろめきながら魔王に近づく。いきなりのこととでセシリーは動揺するもすぐに天使に向けて構える。

しかし魔王には天使のことなど気にならなかった。魔王は真っ直ぐに地面に降りてきたクリスティーナを見る。

「なん、で……魔王の使い魔がクルスから……」

震える声でクリスティーナは状況を理解しようとする。

クリスティーナは大戦時にセシリーを目撃している。魔王の使い魔であることも知っている。そして、使い魔は主に絶対的な忠義を持っていることも、常に傍にいる存在であるということも知っている。

「どういことなのよ! 説明してよ!」

夜の山にクリスティーナの絶叫に近い声が木霊した。

第5話：天使（2）

魔王とクリスティーナが対峙する。

クリスティーナはこれまでにない形相で魔王を睨んでいる。こんな表情は大戦時の決戦でも見せなかった。それ程にショックが大きかったということだろう。

「（・・・・・・魔王様）」

「（お前は天使のことだけ気にしている）」

「（・・・・・・畏まりました）」

セシリーにそう指示を出すと、魔王はクリスティーナに近づいていく。

この状況で天使を無視することは出来ない。魔王自身が弱体化している今、セシリーだけに任せるにはあまりにも危険だ。だがそれ以上に無視できない問題が目の前に存在する。

「それ以上近づかないで」

歩み寄ろうとした魔王にクリスティーナの冷たい声が掛かる。

お互いの距離は約五メートル。クリスティーナの実力なら一瞬で詰め寄れる長さだ。

クリスティーナは剣を地面に突き立てる。それでも剣の柄から手を離すつもりはないらしい。

「説明して」

「・・・・・・」

魔王は回答に困った。

セシリーが魔王の影から現れた時点でクリスティーナに正体がバレたと判断していい。クリスティーナは屈強な剣士にして優秀な魔術師。使い魔とその主の関係を知らない筈がない。

使い魔とは、魔術師が使役する絶対的な従者のことだ。そのスタイルは、主の守護や共に戦ったりと、魔術師と契約する使い魔によって大きく異なる。

中でも全てに共通するのが、使い魔は常に主の身を守る立場にあることだ。姿形は問わず、主の危機に即座に対応できるようにすぐ傍で控えているのが使い魔の在り方である。

そして今回の場合、セシリーは影で控えていた。魔王には仲間が多くいたが、使い魔はセシリーののみ。

その意味は一つしかない。

「どうしてクルスから魔王の使い魔が出てきたのかって聞いているのよ!？」

魔王を焦らせるようにクリスティーナは叫ぶ。

クリスティーナが魔術と無縁だったらどんなに楽だっただろうか、と魔王は思う。

怪我をしていたから放っておけなかった。悪いのは魔王であって、彼女ではない――。

そんな偽善染みた言い訳が頭の中に出てくる。しかし魔術の心得があるクリスティーナに効果はない。

――関係ないか。

魔族が人間を嫌うように、人間は魔族を畏怖^{いふ}する。それがこの世界の現実だ。人間が魔族と一緒に行動しているだけで異常なのだ。それこそ魔術師と使い魔のような主従関係でもない限り。

何を言っても意味はない。

だから、魔王は決断する。

「私が魔王だからだ」
「……………っ!」

クリスティーナは予想通りの回答を得られた筈だが、驚きは隠せないようだ。

「どうして……………わたしの封印は不完全だったってこと……………?」

「お前の封印は完璧だった。ただ先日の戦争で封印が一瞬だけ緩んだ。その隙を突いた私の使い魔によって助けられた」

「じゃあっ! 何でクルスの姿をしているの!? わたしに近づく理由は分かるけど、あまりにも出来すぎじゃない!」

当然の疑問だが、魔王に答えられるのは一言しかない。

「それに関しては偶然としか言いようがない」

「偶然でわたしの恋人の姿に何てなれるわけ——」

「残念ながら私に変身能力はない」

「だったら何で!」

「人間クルスは既に死亡している」

魔王はクリスティーナにとって残酷な事実を突きつける。国を追われ、味方を失い、クリスティーナの唯一の拠り所だった恋人が、既に故人である現実を魔王は包み隠さず告げる。

「私が封印から逃れた時には既にリブラークの兵に殺されていた」
「……………い……………」

「魂だけとなった私は一番近くにあった死体を拝借してその身体を貰った」

「——や、だ……………」

「そして我が使い魔の魔力で死体を修繕して現在に至る。奪った身体の主がお前の恋人だったのは本当に偶然なのだ」

魔王が身体を奪った人間について話し終える。

だが、クリスティーナの耳にはあまり入っていないようだ。

「嫌だ。クルス……わたしを独りにしないでよ」

「……………」

「嫌だ…………嫌だよ……………」

クリスティーナは柄から手を離す。そのまま倒れるように地面に崩れ落ちる。涙で顔を濡らしながらクリスティーナは魔王を見る。自分の恋人の姿をした魔王を縋るように視る。

そこにいるのは、元シフィアの王でも、魔王を倒した姫でもなかった。力なく地面に座り込んだクリスティーナは、どこにでもいる少女だった。大切な人を失った現実を知り、悲しみで打ち拉ぐ。普通の人間……………。

そんなクリスティーナの姿を見て魔王は思う。

——私もあいつを失った時にあんな顔をしていたのだろうか。

本当なら仇であるクリスティーナが苦しむ姿を魔王は喜ぶ筈だった。どうだ、我々はそれ以上の苦痛を味わったのだ——と罵り嗤うつもりだった。

しかし魔王にはそれが出来なかった。

現在のクリスティーナを見ても、そんなことをしようなどと思う気にすらならない。寧ろ、手を差し伸べたくなる衝動に駆られる。だがそれは魔王には許されない。クリスティーナの恋人を殺したのがリブラーク兵であっても、あの戦争を引き起こした原因は魔王なのだ。慰めの言葉を掛けれる立場ではない。

——長く一緒に居過ぎたか。

今の魔王には驚く程憎悪がない。封印前後は憎くて仕方がなかつ

た。けれど今は、ただひたすらに目の前の少女が憐れにしか見え
ない。

この気持ちは数日の旅で情が移ったのか、人間クルスの感情が入
り混じっているのか、魔王には判らない。

「――赦さない」

クリスティーナは言った。

「赦さなあああああああい！」

クリスティーナの叫びに周囲の空気が揺れた。立ち上がり、剣を
握る。目に見える形まで全身から魔力を放出させ、それだけで威圧
せんとばかりの眼光を魔王に向ける。

――嗚呼、同じだ。

魔王はクリスティーナを見て確信した。

――目の前のあれはあの日の私だ。

大切な人を失った悲しみを、怒りを、ぶつける場所を求めて吼え
る。

そして、その目標は魔王へと向けられた。

「返してよ。わたしのクルスを返してよ」

「人間クルスは死んだ。死んだ者は誰であっても返って来ない。人
間も……魔族も。そこに例外はない！」

「あるじゃない。目の前に」

「先程も言った通り、私は人間クルスの死体を拝借したに過ぎない。
私の魂を引き剥がしたところで朽ちる現実が待っているだけだ」

「関係ない……関係ない！ 返して――返せえええええええ
えっ！」

クリスティーナが魔王の間合いに飛び込んでくる。咄嗟に剣で受け止める。天使の時とは比べられない衝撃が武器から腕に伝わり。思わず剣を取り落としそうになる。

——剣の動きが見えなかった!?

反射的に防御行動を取らなければ、今頃魔王の胴体は二つに分かれていたかもしれない。正に神速。生身の人間の目では追い着くことが出来ない。鋭い戦慄が全身を駆け抜けた。

「(天使の方はどうなっている?)」

『(どうやら静観するようです。しかしわたくしを魔王様の下へ行かせる気もないようです』

「(わかった。こちらは何とかする。絶対に天使を逃がすな)」

『畏まりました。ですが、具体的にどうなさるのです?』

「(具体的なプランなどない。ただ分らず屋の目を覚まさせるだけだ)」

魔王は受け止めた片方の剣を下段から上段へ振り上げる。クリスティーナは後方に跳んで避ける。魔王はそれを追いかける。着地を狙って剣を振りかざす。攻撃を即座に読んだクリスティーナは魔術で振りかざした剣を弾く。あっさりと剣は魔王から離れ、地面を転がる。

しかし魔王は追撃を止めない。もう一方の剣でクリスティーナの間合いに近づく。クリスティーナは再び魔術を放つ。だが魔王はそれを上回る速さで回避する。

「・・・・・・っ!」

その動きを見たクリスティーナの顔に驚愕が浮かび上がる。

魔王はクリスティーナの剣や魔術に対応できない。単純にそれだけの実力の差があるからだ。けれど、今はそれが出来る。

——どんな猛者も冷静さを失えば弱者と化す。……大戦時の私が良い例だ。

自嘲するように分析しながら剣を構える。クリスティーナの攻撃は速い。目で見てからでは手遅れになる。だが、冷静さを失った今のクリスティーナは速くても動きが単調——ようは簡単に攻撃が読める。

攻撃のタイミングが解ればどんなに速くても対策が打てる。殺害まで至らなくても、一撃を加えることなら出来る。

——今なら！

魔王は剣を一閃する。防御が遅れたクリスティーナに最高の一撃を与える。

「があっ！」

直後、頭に強い衝撃が走る。頭蓋骨を直接ハンマーで殴られたような痛みが魔王の脳を揺さぶる。

「なん、だ………？」

辛うじて剣を離さずに立ち尽くすと、変わらずクリスティーナがそこにいた。全身から魔力を放出させたまま魔王と対峙する。

——放出された魔力？

そこで合点がいった。

「放出した魔力で防いだのか」

「加えて攻撃もね」

苦しげに言った魔王にクリスティーナはニヤツと口元を吊り上げる。

魔力は魔術を行使するために必要な原料だ。当然、垂れ流された

魔力が使えない道理はない。

攻守の働いた魔力によって魔王の腕は殆んど使い物にならなくなっていた。直接ダメージを受けた剣から、腕、脳と伝って魔王は戦闘するのに致命的な損傷を追った。

手は剣を握るので精一杯で、腕は上がらない。間接的に受けた脳でさえあれだけの衝撃なのだから、まだ立てるだけ運が良かった方だ。

「頭に血が昇るとろくなことがないわ。でも、お陰で目が覚めた」

クリスティーナの頭から一筋の血が流れる。やっと届いた一撃。そして、それが魔王にとっての限界だった。

クリスティーナは血を拭う手の甲で拭うと、同時に垂れ流された魔力が消えていく。

——まずい。

「（セシリー！ 今すぐ私の影に戻って来い！）」

『で、でも天使が！』

「（一瞬で良い。一瞬だけ魔術的補助が出来れば……！！）」
『畏まりました』

魔王の影にセシリーが入る。同時に背中から天使が近づく感覚がする。正面には魔力を通常に制御したクリスティーナがいる。

——勝負は一瞬。背水の陣で挑まなければならない。

魔王は飛び出し、クリスティーナに向かって武器も構えずに突っ込む。

「え！？」

突然の魔王の有り得ない行動にクリスティーナは反応が遅れる。

その隙を魔王は逃さない。

魔王の眼前で闇色の六芒星が輝く。それを見たクリスティーナは再び驚きを隠せなくなる。

「垂れ流されて放棄された魔力が使えるのは、何も放出した本人だけでない」

魔王の企みは単純だった。空中に漂っているクリスティーナの回収しきれなかった魔力を利用し、状況を覆す。人間クルスでは魔術を使えない。だから、影でセシリーに魔術補助をしてもらう必要があった。

久しぶりの魔術的感覚に魔王は顔に出さないように歓喜する。少量で全力の魔力を込める。

闇色の魔法陣の輝きが増し、破裂するように弾けた。

魔王とクリスティーナの間に爆発が生まれる。視界が灰色に染まる。爆風で転びそうになるが、耐えて魔王は更に前へ踏み込む。

魔王の計画は杜撰だ。^{ずさん}それを魔王自身が一番自覚していた。

視界を奪ったところでクリスティーナをうまく見つけられるとは限らないし、逆に利用される可能性がある。煙を魔王ごと吹き飛ばす魔術が使われればそれこ意味がない。こんなくだらない戦法の対策などいくらでも打ちようがある。それでも魔王はやらないわけにはいかなかった。ただ黙ってやられることなど、魔王には出来なかった。

――届け・・・・・・・・！

魔王はうまく動かない腕で無理矢理剣を振り上げる。渾身の一撃を加えるために魔王はクリスティーナへ駆ける。

しかし魔王の動きが止まる。何者かに左右から腕ごと身体を捕まれる。

「何だ!？」

「何よこれ……!？」

視界が見えない中でクリスティーナの声が響く。どうやら魔王と同じような目に合っているらしい。

莫大な気配が魔王の周囲に集まる。

そして、突然の強風によって視界が晴れる。

「……馬鹿な」

魔王は目の前の光景に絶句する。

天使がいた。

魔王の左右に二体。クリスティーナには四体。それぞれ緑色の鎧を纏った天使が拘束している。他にも視界に入らない者も含めて複数の天使が魔王とクリスティーナを囲っていた。

「今度は第七位の権天使か」
プリンシパリティ

最初に来た力天使と比べれば大したことはないが、数で攻められれば手の打ちようがない。その証拠に、力天使を圧倒していたクリスティーナも羽交い絞めされて動きを封じられている。

最初に現れた力天使が魔王の前に降りる。

「流石は魔王。一目見ただけで解りますか」

「……どういうつもりだ？ 私とクリスティーナを争わせるようなマネをして——目的は何だ？」

「お二人を戦わせるつもりはありませんでした」

今更どの口が言うのか、と魔王は内心で吐き捨てた。

そんな魔王の心境も解らず、力天使は衝撃の事実を告げる。

「私は主の命令で、貴方たちと主の仲介を頼まれただけですよ。・
・・・会っていただけますね？ 我が主に」

第6話：神

天使の言葉に魔王は困惑する。

天使とは神の僕。即ち、天使の主とは神に他ならない。

——神がここに来る？ 私の目の前に？

『ディオ・リナ』を管理する三柱の神。

これは魔王だけでなく、『ディオ・リナ』に住む全ての生物が例外なく知っていることだ。だが、強いて言うならば、それだけしか知らない。

神の存在は最早常識となっている。それなのに詳しいことは意外に伝わっていないのだ。神はいつから『ディオ・リナ』を管理しているのか、一体人々に何を求めているのか、何故存在しているのか——疑問に思うことは多くあれど、事実は不明。それでも神の存在は認知され、それらの信仰も沢山ある。

魔王でさえ、神は強大な力を持った存在としか知らない。天使を従えている時点でそこは考えるまでもないだろう。そして——

「神は傍観者だ」

「傍観者………？」

魔王と向かい側に拘束されたクリスティーナは首を傾げる。

魔王を見下ろす力天使を強く睨む。それでも天使は無表情を貫く。

「傍観者がどうしてこんなところに来る？ そんなことは——」

「そりゃあ、傍観するからに決まってんじゃん」

魔王の言葉は割って入った声に遮られる。

聞き覚えのない声。声の発生源を探して首を動かすと、いつからそこにいたのかこれまた見覚えのない少女が力天使近くの木の枝に

腰掛けていた。

場違いな少女だ。

歳は精々十四、五ほど。身体の膨らみが全体的に乏しいのにも拘らず、踊り子が纏うような露出が無駄に多い格好をしている。そのせいか、子供が無理に大人ぶっているようにしか見えない。

腰まで伸びた所々癖のある金髪から、整った顔立ちが覗いている。それは面白いものを見つけた子供のような笑顔だった。

「楽しいことが起こるって分かってたら近くまで見に行くのが普通っしょ」

「誰だ？」

「ご指名の神ですが？」

目の前の少女の一言に魔王の思考が一時停止する。

「……………お前が？」

「その通り！」

少女は肯定を示して勢いよく木から飛び降りる。そして、魔王を指し、何やらポーズを決める。

「『ウィルフレド・イマ』を統べる神が一柱、エストレイアとは私^{あて}のことだー！」

「……………」

「気軽にエストって呼んでくれていいよ♪」

「……………」

「あれ。反応が薄い？　もしかして魔王くん声届いてない？　意外に耳が遠いお年頃だったとか？」

「お前のどこが神だ」

魔王には突然現れた少女が神などと思えなかった。

現在魔力ゼロの人間の身体を使っている魔王だが、全く察知できないわけではない。以前よりかなり鈍くなったことは否めないが、目の前にいる者の魔力が読めない程落ちぶれていない。セシリーによって影で魔力補助されている今なら尚更だ。

エストレイアの魔力はゼロに等しい。現在の魔王と良い勝負だ。天使たちでも隠すことが出来ない魔力を、それ以上の莫大な力を持つ神が偽れるわけがない。

魔王の呟きに自称神のエストレイアは、うーん、とわざとらしく唸る。

「んなこと言われてもなー。それっぽい格好して『跪け愚民共！おほほほほほ！』って見下すように言えば信じてもらえる？」

「どこの女王だそれは」

「……何でわたしの方見て言うのよ」

「仲良いなー二人はー」

「話を戻せ！」

妙な話の流れになってきたので魔王は修正を試みる。それでも態度を改めようとしないうエストレイアに若干憤る。

「お前から魔力を感じられない。天使でさえ感じる魔力を神であるお前から感じられないのはおかしいだろう」

「ぶーぶー！ 偏見反対！」

「真面目に答えろ！」

「真面目にって言われてもねー。巧妙に察知されないように隠してあるからに決まってるじゃん？ だってほら、でなきゃあてが現れる度に有名人よろしくとばかりに囲まれちゃうぜ」

「そんな筈がないだろう」

「随分と自信があるようだけど、やっぱそれは偏見だよ」

おどけた調子から一変して、エストレイアは窘めるように言う。

「魔王くんが本調子ならきつと一発で見破れたかもしれないけどさ・
・・・・神ってのは強大な力を持つてるからといって、強大な魔
力を持つてるとは限らないんだよ」

「何だと？」

「これが『ディオ・リナ』と『ウィルフレド・イマ』の力の価値観
の違いだろうね。思い出して。魔王くんは神がどんな存在だと思っ
てた？」

「傍観者・・・・・」

「そう、傍観者。傍観者が態々管理している世界の住人よりも強く
なる必要はないよね？」

まさに青天の霹靂。
せいてん　へきれき

衝撃の事実には魔王は驚きを隠せない。

「し、しかしそれではおかしいではないか！」

「おかしくないよ。神が強大な存在って考え自体がそもそも偏見な
んだよ。神なんて所詮役職みたいなもんだからね。だから崇められ
ても人々を導かない。神の仕事は『ディオ・リナ』という世界の管
理であって、その中の住人は含まれていない。ただ、見守るだけ。
そう——傍観するだけだよ」

「天使は？　強大な存在だから従っているのではないのか？」

「王様や貴族みたいな偉い人が護衛を雇ってるは自分の身を守るた
めだよ。今のあてもそれと同じ」

「そんな・・・・・」

「まあ、神と天使の関係はもっと複雑なんだけど説明はだるいから
却下」

これでこの話は終わり、とエストレイアは態度を戻す。

魔王は分からなくなった。

神とは絶対的な存在。だから象徴的な存在であっても、何も出来ない時に誰もが一番に頼る。魔王とて幼少の頃は、目の前にいない神に縋った黒歴史がある。人間なら特に絶望的なことがあれが誰もが縋るだろう——神様助けて、と。

神とは傍観者。それは魔王の中で確立した定義だ。『ディオ・リナ』を管理する存在が戦争で人や魔族がどれだけ死んでも助けようとしな。国でいう王のような立場のくせに、常に見ているだけという体たらく。解っていたはずなのに、実際に会ってみると改めて落胆せざるおえない。

そんな魔王の様子にエストレイアはニタニタと不快な笑みを浮かべる。

「納得できないって顔だね」

「……………」

「信じるのは魔王くん次第さ。神は所詮、人が最後の最後に縋るに値しない存在だってね。神も一個の生物。人や魔族と一緒にさ」

魔王の心を見透かすような発言に押し黙る。

エストレイアの言っていることに嘘はない。直感でしかないが、魔王はそう信じる。

だが、それならば何故神は人々に崇められる存在となったのか。どうでもいい筈なのに、魔王にはそれを無視してはいけない気がしてならない。

こちらの思考を打ち切るようにエストレイアが手を叩く。

「神に関する質問はこれ以上却下ね。第一、こんな堅苦かたつくしい話をしに来たんじゃないし」

「……………」では、一体何のために私たちの前に現れた」

「君たちと立場とか抜きで仲良くなりたくてねー」

冗談とは思えない答えに魔王は苦笑する。

「どの口がほごく。これだけ掻き乱しておいて仲良くも何もないだろう」

「ホントにねー。シャイなあてのために仲介を頼んだのにぐっだぐだじゃん」

そういつて傍らに浮く力天使を見上げるエストレイア。

力天使はエストレイアの横に降りる。その表情は相変わらず無表情だ。

「申し訳ありません。お戯れが過ぎました」たわむ

「ホントにねー。クリスちゃんに魔王くんの正体バラすとか超クライマックスじゃん。……。しかも正体隠して一週間と経たないとかショボすぎでしょ」

「全くですね」

「ねー」

「ふざけるにも程々にしろ」

魔王は殺意を向けた目でエストレイアを睨む。自分の身体を取り戻すために手に入れた僅かな可能性を、こんな奴らに潰されたのかと思うと、魔王は悔しくて仕方がない。

魔王の睨みも意味なく、エストレイアは口を押さえて笑う。

「そんな両手に花持つてる状態で言われてもねー」

魔王を左右から押さえているのは女性の天使だ。

表情を変えない力天使と違い、権天使たちはエストレイアのセリ

フに恥らう様子を見せる。しかし拘束を緩めるようなミスはしない。

「迫力に欠けます。寧ろ、ふざけているのはそちらでは、と問いたくなるくらいです」

「わかるわかる！ それあても思った」

「もういい！」

魔王は目の前の二人のやり取りにうんざりする。

「お前たちは本当に何が目的で現れたんだ？」

「二人と友達になりたくて会いに来た」

「その二人を殺し合いまで追い込んでおいてか？」

「それはそれ。だからあてはまず二人の仲から戻してしんぜよう！」

エストレイアは高らかに宣言した。

クリスティーナは何とも言えない気持ちで薄暗い山道を歩いていた。

同行者は神のエストレイアと魔王の使い魔セシリーの二人？だ。

その周囲は緑色の鎧を纏った天使が一定の距離を保って固めている。逃げることは不可能だ。

そもそも、どうしてこうなったのかクリスティーナにはいまいち分からない。気づいたらこうなった、といった状況だ。

エストレイアの提案はこうだ。

「お風呂に入りましょう」

「はあ？」

「だから、裸の付き合い！ これが仲直りの一番の道！」

そう言われ、平地から離れて山を下っている今に至る。

仲直り、と言われてクリスティーナは複雑な気分になる。クリスティーナと魔王の問題はそれだけで済む話ではない。魔王の方も言い分はあるだろうが、きつとお互いに譲れない。お互いに赦せないことをしたのだ。

やがて広く切り開かれた場所に出た。以前に見た池のような所だ。違いがあるとすれば、水が光っていることと水面から湯気が出ていることだ。

近くまで寄って手で掬い上げる。

「これは？」

「温泉だよ」

「天然もの？」

「そうだよ。あ、光ってるのは暗いと入りづらいから魔術で明るくしてるってだけね」

エストレイアの言葉に疑問を感じる。

温泉の周りは不自然に整えてあり、端の方には掘削した形跡が見られる。天然では有り得ない状態だった。

クリスティーナの様子を察したのかエストレイアは付け足すように言う。

「天然ものってのは間違いないけど、それをルーニス王国が偶然見つけて観光用に温泉を広げようとしたんだよね」

「ああ……それで」

「でも工事の途中でそれは無理だって分かって計画はオジャン。だから中途半端に弄ったまま放置ってわけ」

「どうして無理なの？ 今もこうして沸いてるじゃない」

「正確には沸いてないよ。ただ溜まってるだけ。火山活動とかで偶

然流れた水脈がここに溜まったんだろうね。んでもって、吸い上げればいつか限界がくるのが分かったから放棄したのさ」

成程ね、とクリスティーナは納得する。

最初に訪れた平地は明らかに人の手が加えられた跡があった。どうやらそれはルーニス王国による工事跡らしい。中途半端な開拓と、放置されていた理由に合点がいく。

「それでもまだ温かいままなのね」

不思議と掬った温泉は熱くも冷たくもない、心地良い温かさを保っていた。

「うん。自然の力って偉大だね」

エストレイアも感心するような目で温泉を見る。

そして、前触れもなく服を脱ぎ出した。いきなりの行動に流石のクリスティーナも戸惑う。

「な、何してるの？」

「何って。温泉入るなら服は脱ぐでしょ？」

「それはそうだけど……」

——この子には羞恥はないのかしら。

以前の宿の出来事を棚に上げてクリスティーナは思う。同性とはいえ、誰かと一緒に風呂に入る習慣のないクリスティーナには裸を見せるのに抵抗があった。

こっちのことはお構い無しにエストレイアは温泉の奥へと入っていく。

「早く入りなよ。良い湯加減だよ」

「そうは言っても……」

「大丈夫だよ。周りにいる天使は全員女だから恥ずかしがることなんてないよ」

このままどこかに逃げてしまいたい——そんな衝動に駆られる。

しかし天使の包囲網を突破することは無理だ。クリスティーナは取り上げられた剣の代わりに渡されたタオルを頼りなく掴む。そしてもう一人、さっきから黙っている同行者に助けを求める。

「ねえ、あんたからも何か言いなさいよ」

「わたくしは魔王様と一緒にならどこへでも行く覚悟です」

やや拗ねた声でセシリーは言う。

仲直りの名目で連れて来られたのに肝心の魔王はここにはいない。エストレイアの命令で、魔王は力天使によって湯浴みを覗かれないように隔離されているとのこと。それがこの使い魔は不満らしい。クリスティーナとしても話し合うのに隔離するのはおかしいと感じずにはいられなかった。

そんな二人にエストレイアは容姿に不釣り合いな妖艶ようえんな笑みを浮かべる。

「知りたいでしょう？ 魔王のこと」

エストレイアは歌うように口ずさむ。

「知って欲しいでしょう？ 自分の主のこと」

戸惑う二人に手が差し伸ばされる。

そして、神は誘いざなう。

「教えてあげるよ。お互いが知りたくて堪らない大戦^{あのひ}のことを――」

第7話：魔王国

魔王はでかい廊下を闊歩^{かっぽ}していた。

でかい、とは仰々しい言い方かもしれないが、魔王城ではこれが当たり前だった。

何せ、地面から天井まで約六メートルあり、壁と壁の間は五メートル程の幅で作られている。その理由は魔王の身体の大きさにある。魔王は普通の魔族よりも三倍近くある巨体ため、城の中全てにおいて大きめに作らなければ生活も儘^{まま}ならない。

それでも魔王にとっては窮屈な場所に変わりない。だからといって、魔王の全ての要望を叶えてしまうと、魔王城だけでとんでもない大きさと広さを必要としてしまう。領土に限りがある以上、贅沢はできない。

目的地に着くと魔王は屈んだ姿勢で扉を開けた。面倒だと感じながら魔王は部屋へ入ろうとする。

何故屈む必要があるのかというと、自室と出入口を除いた扉は全て広大な廊下に合わせて設計されていないからだ。これもまた魔王に合わせてしまえば、扉の開け閉めだけで一苦労することになる。そのため、魔王が屈んでやっと入れる大きさに統一されたのだ。魔王に不満は勿論あるが、城を利用する全ての者のことを考えれば、そんな我が儘はできなかった。

入室してから最初に魔王の目に映ったのは、上半身を開けた^{はだ}女性の背中だ。その背中が扉の音の氣づいてこちらに振り返る――開けた上半身ごと。今の自分の状況を忘れているのか、魔王を見ても自然と話しかけてくる。

「あら、速かったのね。…………どうしたの？」
「いや、まあ……………」

おそらく顔を真っ赤にしているであろう魔王に女性は首を傾げる。女性の向かい側にいる老婆がニタニタしながら、からかうように「まあまあ」と呟いている。

腰の中程まで届くさざりとした薄い青色の髪に、丸みを帯びつつもほっそりとした小顔。腰は括れ、四肢はすらりと伸びている。外見こそ二十歳前後の若者に見えるが、実年齢は向かい側の老婆より何倍も上だ。

そして、この少女のような容姿の女性が魔王王国建国の立役者だ。立場上、魔王が魔王国を建国したと謳っているが、その経緯はこの女性から始まった。何も無かった魔王にきっかけを作り、今日という日まで傍で支え、導いてくれた女性。

故に、この上半身裸の女性は魔王にとってとても大切な存在だ。魔王は女性の名を呼ぶ。

「・・・・・・・・フェルミア」

「何？」

年齢に合わない幼さを感じさせるつぶらな瞳を向けられ、魔王は言い淀む。だが、頭を掻きながら決意する。

「服が脱げているぞ」

「へ・・・・・・・・？」

フェルミアは視線を真下に向けると、自分の現在の状況は把握する。すると、見る見る内に顔が羞恥で真っ赤になり、慌てて両腕で胸を隠す。そして、羞恥から怒りへと顔を染めていく。

「き、気づいてたならさっさいええええええええええっ！」
「ぐうおっ」

叫びながら魔王の顔面にきつい蹴りを入れられる。魔王は中途半端な入室のせいで後頭部を扉の角にぶつけた。ぶつけたところを押さえながら魔王は蹲る。うつすくま

その隙にフェルミアは服装を整えると顔を赤くしたまま魔王を睨みつける。

「ありえないありえない！ 人が着替えてるところに部屋に入ってくるとか信じられない！」

「……知らなかったのだ」

「ノックくらいしなさいよ！ 常識でしょ、常識！」

「貴方様も普通に対応していたではありませんか」

フェルミアの罵詈雑言はまりざつげんから助け船を出したのは一緒にいた老婆だ。何やら呆れた様子で老婆は魔王とフェルミアを見ている。

「それに、今更裸を見られたところで恥ずかしがるような関係でもありますまい」

「それとこれは別よ」

「まだまだ初心うぶということでしょうか」

「もう。からかわないでよ」

「ほっほっほ」

陽気に笑う老婆に対してフェルミアは照れた表情で壁に立て掛けてあった剣を担ぐ。それを見た老婆は慌てて剣をフェルミアから引っ手繰る。しかし重さに耐えられずに剣を床に落としてしまう。

「ちょ、何するのよ」

「いけません、フェルミア様。こんな重たいものを背負って生活してはお身体に障ります」

「これくらい平気よ。いつも持ち歩いてるんだし」

「医師として許可できません。魔王様からも何か仰ってください」

話に付いていけず、魔王は回答に困る。

魔王が訪れたのは医務室だ。そして、目の前の老婆は魔王国屈指の医師である。フェルミアに呼ばれてすぐに来たのだが、まさか診察中だとは思いつかなかったのだ。

——診察？

魔王に嫌な予感が過ぎる。

「フェルミアの身体に何かあったのか？」

「それはですね——」

「重い病気か？ それとも怪我でもしたのか！？」

魔王は焦燥^{しやうそう}に駆られる。

診察室に呼ばれたこと。診察を受けているフェルミア。

この二つからフェルミアが何らかの治療を必要とする状態であることは明白だ。しかも、態々魔王を呼び出すくらいだからただの怪我や病気などではない。

「お、落ち着いてください魔王様！」

「これが落ち着いていられるか！ 何があった！？」

「逆ですよ。逆！ 病気などではありません」

「逆だと……？」

言っている意味が解らず魔王は困惑した顔でフェルミアを見る。フェルミアは、はにかんで頬を赤らめ、お腹を擦る。その動作の意味を流石の魔王も知らない筈はなかった。

「まさか……」

「はい、魔王様。おめでとうございます」

魔王はフェルミアの傍に寄り、お腹に――手が大きすぎるため――指を当てる。魔王の大きい指を抱き締めるように上からフェルミアは腕を置く。

「ここに、いるのか？」

「うん。あたしたちの最初の子供……出来ちゃった」

形ある幸せの誕生を魔王とフェルミアは心から喜んだ。

魔王と王妃であるフェルミアの間に子供が出来た。

その朗報は瞬く間に国中に伝わった。

それから祝福の言葉を綴った手紙や妊婦向けの食料など、魔王城に多くの贈り物が送られてきた。一度街へ行った時は大勢の魔族に囲まれ、魔王とフェルミアが子を授かったことを、まるで自分たちのことのように喜んでくれた。そんな民たちの様子に魔王とフェルミアは照れながらも心から嬉しく思う。

そして、フェルミアが魔王の子を宿したことが分かった日から三ヶ月経った現在。

「今日もこれだけの贈り物が届きました」

セシリーが魔王とフェルミアの部屋に抱えなければ運べない程の荷物を持ってきた。部屋の中には既に多くの進物で埋まり、置く場所もなくなってきた。最初の頃と比べれば減った方だが、毎日のようにこうして何らかの物が贈られてくる。それだけで魔王とフェルミアが国中から慕われているのが判る。

「ありがとう。でもこんなに沢山一人で運ばなくても……」
言ってくれば手伝ったのに」

「産休中のフェルミア様の手を煩わせるわけにはいきませんから。それに、これはわたくし自身が好きでやっていることですので」

「産休は大袈裟よ。まだ全然お腹大きくなってないんだからそれぐらい大したことないわよ」

フェルミアのお腹は本人が言う通り産休する程大きくはない。しかし服越しに見ただけでは気づかないが、触ってみると少しだが膨らんでいるのが判る。まだその程度なのだが、セシリーは相変わらず心配性のようだ。寧ろお腹の子に対して過保護と言った方がいいかもしれない。

セシリーは空いているスペースに荷物を丁寧に置く。

「それでもお身体に気を使わなければならないのは事実です。何かがあつてからでは遅いのです」

「はいはい。わかりました。………つたく、セシリーは相変わらず石頭ね」

「わかつていただけたのならわたしは満足です」

フェルミアの冗談を軽く受け流したセシリーは魔王へと向き直る。

「魔王様。こちらの準備も整いましたのでいつでも出発できます」

「わかった。すぐ行く」

セシリーは一礼して部屋を退室する。

それを見送ったフェルミアは魔王を見上げる。

「今回はどこへ向かうの？」

「北のセリアンスロープの集落を訪れようと思っている」

魔王は魔王国建国に至り、多くの魔族を勧誘した。いくら国を築いても、そこに暮らす者がいなくては意味がないからだ。そして、それは建国後の現在でも続いている。誘う相手にも本気になってもらうため、王である魔王が直接交渉に向かう。

「今回はいつもより長く国を空ける。留守を頼む」

「任せておいて」

「本当なら少しでも多くの時間一緒にいたいのだが……」

「もう。あなたもセシリーみたいなことって……。どうせ産まれたら産まれたで子供から離れたくないって言い出すんだから今の内にやれることやっておきなさいよ」

「あっははははは！ 違うない！」

凶星を指され、魔王は豪快に笑う。

セリアンスロープの集落は魔王国とは距離があるため、交渉する期間を考えれば往復で最低三週間は掛かる。それだけの期間でも離れるのが惜しいのだ。実際に子供が産まれれば、きっと今以上に気持ちが抑えられないだろう。

フェルミアを優しく抱き締める。それは魔王が国を出る度の習慣だった。

名残惜しみながら離すと、はにかむフェルミアの顔が魔王を見つめる。

「では、行って来る」

「いつてらっしゃい、あなた」

魔王は平和に近づくため、国を出た。

魔王が国を出てから二週間程経った頃。

フェルミアは夜中に目を覚ました。

嫌な汗が流れ、体が重い。妊娠している内は珍しくない症状だが、やはり慣れることはない。汗を冷たいタオルで拭き、背中を擦って欲しいと思った。こういう時のために常に隣の部屋に誰かを待機させている。しかしたったそれだけのために起こすのは申し訳なく、とても呼ぶ気になれなかった。

水でも飲もうとベットから降りる。すると、不意に人の気配が部屋の隅から発せられた。

その方向へ体を向ける。

窓から差す月明かりが侵入者を照らす。影で顔が見えない。性別も不明。ただ、人間とも魔族とも言い難い気配をした人物が一人そこに佇んでいた。

「誰・・・・・・・・？」

回答は攻撃によって齎された。

フェルミアは正体不明の攻撃を受けて床を転がる。斬られた傷から血が溢れる。しかしフェルミアは動かない。

そして、フェルミアが背を向けていた壁には太陽と月を合わせた紋章が刻まれていた。

第8話：魔王国（2）

魔王はセリアンスロープの集落から引き返し、自国へと向かっている。魔王国から緊急事態であると連絡が入ったからだ。

報告は、人間によって魔王国が攻撃を受けている、といった内容だった。

それ以降の連絡は魔王国から一切届いていない。その意味を魔王は理解して、最速で移動する。

——無事でいてくれ。

魔王たちが魔王国を視野に入れる程近づく、惨状が見て取れた。魔王国を囲む強固な外壁と、壁では隠しきれない魔王城が所々崩れ、今も煙が上がっている。しかし、その原因となった攻撃の音がしない。まだ距離があるとはいえ、あまりにも静か過ぎるのだ。まるで、戦いが既に終わっているような……。

不審に思った魔王は近くにいた魔族を呼ぶ。

「おい、確認に向かえ」

「御意に」

控えていた一人が頷くとすぐに消える。

現在の状況を見ても、魔王の予想では圧倒的に魔王国が不利と言える。国内を把握していない内から判断するのは危険だ。それでも国のトップとして最悪の事態まで考えなければならぬ。

まず、最初に魔王国が人間から攻撃を受けていると報告をした魔族の行方。無事に魔王国に到達していれば、再び魔王に何らかの連絡を寄越す筈だ。しかしそれが無い。そして、魔王国での戦いが終わったかのような現状の様子。終了しているのならそれはそれで問題ないのだが、どちらが勝っているのかで今後の動きが大きく変わってくる。

勝って終わっている場合。魔王国内の状況を確かめ、すぐに動ける者を集めて怪我人の治療、及び街の修復の準備。同時に次の戦いに備えなければならない。

何故なら、今回の攻撃はただ魔王国が襲撃されただけで済む話ではない。これは、人間による魔族への宣戦布告だ。今の時点で既に戦争は始まっている。勝利で終わっていても不利な事実は変わらないだろうが、手を引く術がない以上戦うしかない。

負けて終わっている場合は――

「魔王様。ただ今戻りました」

確認に向かわせた魔族が戻ってきた。

「報告を」

「はっ。……現在魔王国は完全に人間に制圧された模様。戦闘は行われていません。魔王国を人間共が我が物顔で出入りしています」

「……っ！」

報告の内容に魔王だけでなく、ここにいる全員が絶句している。魔王国の人口は約五十万人。人間の国の人口と比べれば少ない方だが、数日で制圧される程ではない。

――何らかの対軍兵器でも用意しているのか？

情報が少ない今、何を言っても全て憶測でしかない。ここでやるべきことはただ一つ。

「制圧して油断し切っている今しかチャンスはない。剣を取れ。我らが国を取り戻すぞっ！」

応！！ と魔王の言葉にこの場にいる全員が迷うことなく応える。

全員で魔王国へと駆ける。意気込みとは裏腹に魔王たちの行動は静かで、尚且つ迅速な動きだった。

何故なら、魔王を含めてこちらの戦力は三十名程度。魔王の護衛として交渉に付いてきた魔族たちだが、本格的な装備は勿論ない。戦うことを前提に集めたメンバーではないのだから当然だ。どちらにしろ、魔王国に元々配置していた兵たちと比べれば、大した戦力とは言えない。しかし時間が経てば経つ程、こちらの戦況がより不利になる。不利な状況を更に悪化させないためにも、今ここで立ち上がらなくてはならない。

そういった作戦の意味を抜きにしても、ここにいる全員の気持ちとは一致していた。

——人間共め、赦さない！

魔王が攻め込もうと意気だっていた頃。

魔王とフェルミアの部屋。中央の床に布団が敷かれ、そこで血塗れのフェルミアの治療が行われていた。

生死の境を行き来し、現在もその激痛に苛こまれている。傷口や口から血を何度も噴き出しては輸血、包帯の交換を繰り返す。ある程度医療施設が整っている魔王城だが、戦争中のため満足の行く治療が行えない。籠城ろうじょう中の今は薬などの資源も限られている。フェルミアに医師がやれることは延命と気休めしかなかった。

「ねえ……お腹の子は無事、よね……?」

「ええ。フェルミア様が庇ったお陰で元気でいますよ」

何度交わしたか分からないやり取り。

しかし医師は疲労を見せないように力強く答える。老体の身体には体力的に限界に近かったが、少しでもフェルミアを不安にさせな

いために医師は諦めない。

今のフェルミアを生かしているのは、潜在的な魔力による自己修復能力と医師たちによる治療——そして、自分の子供の存在だ。

だから、医師は嘘を付き続ける。フェルミアのお腹の子が既に亡くなっている事実を隠し通す。それを知ればフェルミアは自分を保てなくなるだろう。今ここでフェルミアの心が折れればそのまま死へと向かう。支えを失えばあつという間にフェルミアは生きることが諦めてしまう。それだけは医師として避けねばならなかった。魔王国内の戦いを終わらせ、安静な場所で手術を行うことが出来ればまだ助かるのだ。まだ助かる命を見捨てることなど出来る筈がない。

「頑張ってください。後もう少しです。……もう少しで魔王様も帰ってきます。それまでの辛抱です」

「そう……よ、ね。あたしがいなかったら……ほんと、何もできないんだから」

虚ろな目で呟くフェルミアに医師の心の方が折れそうになる。流れ落ちそうになる涙を抑え、必死に治療を続ける。

すると、扉が勢いよく開いて一人の兵士が入ってくる。

「た、大変です！」

「無礼者！ 現在のフェルミア様の状況を貴方は知らないのですか！？」

「魔王城の門が破られましたっ！」

医師の返事の代わりに最悪の事実が告げられた。

「そ、そんな……人間たちは一体どれだけの大軍で攻めて……」

「いえ。一人です。たった一人に魔王城の門が破られました」

絶望的だ、と医師は思った。ただでさえ不利な状況なのに、大軍でも防衛できる門をたった一人に破壊されるとは。現実かどうか疑いたくなる。

それでも医師のやるべきことは変わらない。

「……わかりました。それで今は徐々に魔王城内が人間に制圧されているのですね？」

「それが……不可解なことに、その一人以外侵入者はいません。現在、門を守っていた兵士で城内へ入らせないように交戦しているところです」

兵士の言う通り、それは不可解なことだ。門を破れる程の実力者なら露払いを任されることはおかしくないが、その後に軍隊が攻め入らないのはありえない。効率が悪い上に、最後の砦を突破したのだから出し惜しみをする必要もない。

とりあえずこの場に留まるのは危険だと判断した医師は兵士に指示を出そうとした瞬間、

「——お前か？」

何者かの声に遮られる。

そして、突然入口に立っていた兵士が縦に割れる。頭から股間まで真っ直ぐ割け、血が左右から噴き出し、元は一つだった肉片を汚し合う。綺麗に二等分された兵士の奥に立っていたのは黒い男だった。

男、と断定するには難しい風貌だ。黒いコートを纏い、同色の鍰えりの広い帽子を被っている負のオーラを放つかのような格好。襟が高くて口元も隠れ、帽子とコートの間から覗いた暗くぎらついた双眸がこちらを捉えている。

性別がどちらであったとしても、まともな人物でないことは戦場に立たない医師でも分かった。

医師はすぐにフェルミアの前に立ちほだかる。医師自身には何もできない。せめて助けがくるまでの時間くらい稼いでみせる、といった思いからの行動だった。しかし、黒い男が急に見えなくなる。体は動いていないのに何故か天井を眺めている。

医師は自分が首を斬られたことにも気づかぬまま絶命した。

魔王は魔王国へ突入することに成功した。いや、突入どころかあっさり入ることが出来た。

魔王国内は明らかに戦った後があり、見渡す限り人間と魔族の死体が転がっている。しかし、そこに生存者がいない。気配を探っても、人間も魔族も全く感じられない。

「おい。これは一体どういうことだ」

偵察に行った魔族に魔王は訊ねる。

「いや、私が見た時は普通に人間共がここを出入りして……」

直接その光景を見た本人が一番戸惑っていた。

この者の言っていることに嘘がなければ確かにこの状況はおかしい。魔王が報告を受けてここに来るまで十分も掛からなかったのだ。たったそれだけの短い時間で、果たして人が気配も残さずに消えるだろうか。

「とりあえず、城へ向かう。道中生存者を見つけたら種族問わず保

護する」

「人間も、ですか？」

「この状況は不可解過ぎるからな。話を聞きたい。だから周囲の探索を怠るなよ」

「はっ！」

そういつて城へ駆ける。

生存者の気配へと意識を集中しながら走るが、見えるのは絶命した人間と魔族。感じるのは死の空気。まるで、死者の国にでも迷い込んだ気分だ。城に近づくにつれてその感覚がより強くなる。

城門前に着くと、魔王一同は足を止めた。そこは他と比べられない程酷い有り様だった。

百人分くらいは在りそうな人間の死体が山のように積まれ、その全てが身体を切断されていた。胴体、四肢、頭部とバラバラに刻まれた人間が城門前の広場を埋め尽くす形で散らばっている。どれも鮮やかな切り口から、同一の武器で殺されたことが解る。

——誰の仕業だ？

倒れているのが人間だけであることから、殺ったのは魔族で間違いないだろう。そして、魔王の中でこれだけの数を相手に出来る魔族で心当たりがあるのはフェルミアのみだ。魔王国最強の剣士であるフェルミアなら、高が人間百人を持ち前の技量と知恵で倒すことは造作もないだろう。しかしフェルミアがやったにしては不可解な点がある。

魔王城を護る厚い鉄製の城門がぱつさと斬られている。人間の死体同様、鮮やかな斬り方だ。その奥ではここで転がる人間の死体と同じく、身体をバラバラにされた魔族の姿が沢山あった。この城門の広間の犯人は同一人物——フェルミアがそんなことをする筈がない。

「魔王様」

と、セシリーが魔王の傍に駆け寄ってくる。

「どうした？」

「生存者を発見しました」

「・・・・・・そうか。案内しろ」

「こちらです」

セシリーに案内されて魔王が向かうと、一人の人間兵士が味方だった肉の塊に上下左右と挟まれる形で横たわっていた。死体に埋まっていたせいで気配が鈍っていたのか、と内心で納得しながら魔王は肉の塊を取り払うよう命ずる。魔族たちによって兵士の上に乗っていた死体が退かされ、男の姿が露になる。

見るからに屈強そうな肉体。それも鎧ごとぼっそり斬られ、手足はない。味方と自分の血で全身を汚し、荒い息で魔王を見上げている。出血の多さから生きているのが不思議なくらいだ。つまりこの兵士が斬られてからそんなに時間が経っていないことを意味する。

魔王は訊ねる。

「誰にやられた？」

「ひ、とりの・・・・・・黒い、男に・・・・・・」

男は誰に話してるのか解っていないのか、魔王に問われるがままに答える。

「一人の男にお前たち全員やられたのか？」

「突然、そいつが現れて・・・・・・一瞬で皆、殺^やられた」

「この人数を一瞬で倒しただど!？」

魔王含め全員が男の言葉に息を吞む。

城門前の広場は、人間の死体があることと、門が斬られていることを除けば普段と何ら変わらない。

この人間の死因は何らかの刃物によるものだ。魔術を使った可能性も否定出来ないが、一瞬で大勢の人間を亡き者にしたとすれば、大規模魔術の系統を使用したと考えられる。しかし周囲に余波らしき被害は無い上に、魔術を行われた痕跡がない。大規模魔術となれば、普段の魔術では考えられない量の魔力を使うことになるため、殆んど必ずと言っていいくらいその痕跡が残ってしまう。大規模魔術が行われたのがつい先程なら尚更だ。事前にそれを察知出来ない程、魔王は愚かではない。

——大規模魔術でないなら一体どうやって………。こいつが幻覚を見ていた可能性も視野に入れるべきか。いや、今はそれどころではない！

考えを振り切って魔王はその者の攻撃方法よりも現在最も知らなければならぬ質問をする。

「そいつは今どこにいった？」

「門を、あっさり斬り裂いて、城へ……。」

最後にそう言い残して男は目を閉じる。死んだのだ。

魔王はやるべきことを理解し、全員に告げる。

「城へ突入する。中に入ったら全員で生存者及び不審な男の搜索。

男の方は見つけ次第私を呼べ。………決して交戦はするな」

『はっ！』

「では、散れ！ セシリーは私について来い」

「畏まりました」

魔王たちは城へ突入した。

フェルミアは部屋の状況をただ見ることにしか出来なかった。
立ち上がることも、声を出すことも出来なかった。
今もただ、侵入者を睨むことしか出来ない。

「お前なのか？」

黒い男は訊ねる。顔を近づけ、表情のない顔を男はフェルミアに向ける。フェルミアが返事をしなかったからなのか、男は顔を上げる。そして、壁に刻まれた太陽と月の紋章を凝視する。

「違うのか？」

顔を向き直し、男は抑揚のない声で再び訊ねる。問われている内容の意味が解らず、回答に困る。

しかし、顔を見詰め合っている内にフェルミアは気づいた。気づいてしまった。

「あなた、まさか……………」

男はフェルミアの眩きに首を傾げる。

「はは……………噂はバカにできないものね。生きてるか、死んでるかも解らないあなたが……………一体、何を求めているの？」

やっと喋った第一声が男にとって不快だったのか、問い掛けを止めて拳を振り上げる。

何をしようとしているのか解ったフェルミアは咄嗟に近くにあったナイフに手を伸ばす。

金属と金属がぶつかる音が響く。フェルミアのナイフが砕け、包帯の巻かれたお腹が斬られる。傷口が開き、血が噴き出すのを砕けたナイフの刃が刺さるのにも拘らず手で抑えた。

——こんな、ちんけなナイフじゃ防げないか……。

元々包帯を切るハサミの代わりに用意されたナイフだ。見ただけで戦闘用のものでないと判る。それでも、鉄で出来た刃に変わりない。それが砕かれることの意味をフェルミアは一瞬で理解した。

——勝てない……。

実力に差があり過ぎる。例えそうでも、本来のフェルミアにはそれを切り抜けるだけの技量と実力がある。怪我をして起き上がれない程の重傷を負っているが故に、今程度の反抗しか出来ない。

男が止めと言わんばかりに再び拳を振り上げる。フェルミアは次に来るであろう衝撃に目を閉じる。

だが、攻撃は来なかった。代わりに、空間を揺らす衝撃と魔力の奔流が男が立っていた場所に流れた。

目を開けて入口を見ると、そこには愛する夫——魔王が立っていた。

第9話：魔王国（3）

魔王は自室へ駆け込んでから間を置かず魔術を展開する。右手を掲げ、魔王特有の歪んだ六芒星の魔法陣が完成する。そして、そこから闇色の閃光が放たれた。

迷いはなかった。フェルミアを襲っている黒いコートの人物へ容赦なく殺傷力の高い攻撃を与える。

黒衣の男は攻撃をまともに受け、魔術の奔流に呑み込まれる。部屋の壁を魔術が突き破り、自室を半壊させる。

「フェルミアっ！」

「フェルミア様っ！」

魔王とセシリーが慌てて横たわるフェルミアに駆け寄る。出血が酷いが魔王たちを首だけ動かして見上げる。生きている、という安堵と同時に妙な気配が漂う。

部屋の奥。魔王の攻撃で壁が崩れ、魔王城外の景色のみが見えるその場所で黒衣の男が佇んでいた。傷どころか服に汚れ一つ見当たらない。足が付く筈のない空の上で、まるでそこに見えない床があるかのようにこちらに歩いてくる。

魔王はすぐに黒衣の男に飛び掛る。魔術で身体を強化し、黒衣の男に殴り掛かった。

金属と金属がぶつかる音が響く。魔王は鋼鉄さえも切り裂く強度の爪で男の体を貫くつもりだった。しかしそれを見えない何かで防がれた。黒衣の男は爪を何かで防ぐ動作をしたまま静かに魔王を見上げる。魔王はその何かを掴み、それを魔法陣で包んでいく。あつという間に透明のそれに魔法陣が埋め尽くされ、途端にガラスが割れるような音が響いた。

黒衣の男の武器が露になる。持っていたのは特殊な形をした武器

だった。

分類としてはおそらく短剣だろう。全長は五十センチ程度。その先端の刃が六つに分かれて扇状に広がっている。剣というよりは、柄のある鉤爪といったところか。

その特殊な六爪剣をそれぞれ両手に持ち、魔王の爪を防いでいる。

「それで殺したのか？　この国の魔族と攻めてきた人間の軍隊を！
」

城内の魔族は、魔王が自室へ行く途中で見た者は全て殺されていた。その殺され方は、城門で見た人間のように身体がバラバラだったり、一本の剣で一刀両断されたように切り捨てられたりと、死体によってまちまちだった。統一性のなさに複数犯の可能性も考えていたが、この男の武器を見て同一犯だと判った。この武器なら出来ると解ってしまった。

城内に人間がいないのは目の前の男が城門までに全滅させたからだろう。そして、城内の魔族もおそらく魔王が引き連れてきた者たちを除いて全員やられている。

問い掛けに答えない男に魔王は苛立ちが隠せない。

「何が目的でここに来た！？　どうしてこの国の住人を皆殺しにした！？」

魔王の必死の言葉も男は何も感じていないように沈黙で答える。

人間が魔王王国を襲う理由は分かる。魔族が人間を嫌うように、人間は魔族を畏怖する。だが、目の前の黒衣の男は人間とも魔族とも言えない異様な気配を放っている。種族による偏見を除いても、現在の状況から黒衣の男の目的は分からなかった。

「アイツがここに来た」

「アイツ？」

やがて黒衣の男が静かに呟いた。

「でも、国中捜してもいなかった」

「人捜し？ それならどうして殺して回る必要がある！？」

「向かってきたから」

淡々と黒衣の男は言う。その声色に感情はない。

男の態度で魔王の怒りが爆発した。

「そんな理由でっ！」

魔王の声に合わせて黒衣の男を魔法陣が取り囲む。上下、前後左右と六つの魔法陣が男を拘束する檻となる。

拘束されても黒衣の男は無表情を貫く。顔だけ動かして自分の状況を確かめている。

魔王が男から離れる。

「滅びろ！」

魔王が指を鳴らす。すると、魔法陣が黒衣の男に向かって移動――直撃する。

途端、男を中心に閃光が炸裂する。そこで起こった爆発も、その衝撃も魔法陣の檻の中で暴れ回り、外には漏れない。爆発によって生まれた煙が充満して中が見えない。

魔法陣を開放すると、陣内で溜まっていた煙が溢れ出した。爆発後特有の臭いが鼻を突く。一瞬で煙が散り、明けた場所には何も残らない。

魔王が放った魔術は成功すれば、攻撃対象の肉体すら残らないも

のだ。だから、この光景は何も不思議はない。
だが――

「・・・・・・・・逃げたか」

魔王は齒噛みする。

逃げ場のない檻の中で黒衣の男を死体も残らない灼熱の中で爆死させた。見た限り何も不思議はない。“見た限りは”。

爆発後特有の臭いを嗅いで魔王は呻く。

――焼死体特有の肉が焼けた臭いがしない。

一瞬で焼却した死体であっても、案外臭いは残ってしまうものだ。
嫌な臭いであればある程に。

だが、今はそれがない。

理由は単純。そこにいないからだ。

魔王はあの状況でどう逃げたのか興味があったが、今は置いておく。近くに気配がない以上、黒衣の男は少なくとも魔王国外の領域まで離れている。一旦の危機は去った。

――今はっ！

魔王はフェルミアの元に戻る。

フェルミアはセシリーによって止血を行われている最中だった。

押さえられた白い布はすぐに血液を吸い、あっという間に真っ赤に染まる。それから再び新しい布へと交換していく。しかしそれもすぐに血で汚れる。

魔王が交戦中ずっとその作業を繰り返していたのか、セシリーの隣には赤く濡れた布が散らばっている。作業を行っていたセシリー自身の服もフェルミアの血で濡れていた。

「・・・・・・・・魔王様」

セシリーは一瞬驚いた顔をしてから、縋るような目で魔王を見上

げてくる。近くに寄って初めてそこに魔王がいることに気づいたようだ。セシリーの顔には精神的な疲労が見て取れた。こんなにも弱々しいセシリーを見たのは魔王も初めてだ。

「フェルミアの容態は？」

「血が・・・・・・血が止まりません」

涙声でセシリーが答える。

新しい布を交換しようとしたところでその手を掴まれる。

「もう、いいから・・・・・・」

「ですが、フェルミア様！　ここで止血をしなければっ！」

「良いのよ、セシリー。もう良いの・・・・・・」

そういつてフェルミアはセシリーから手を離れた。掴んだ場所にはフェルミアの血がべつとりと付いていた。セシリーはフェルミアの言葉に抑えていた涙を流し、嗚咽を漏らさないように口元を押さえる。

フェルミアがセシリーから魔王へと目を向ける。

「あなた・・・・・・やっと来て、くれた」

「ああ、私はここにいるぞ」

魔王はフェルミアの手を握った。その瞬間全身がぞつとする。

――何だ、この冷たさ。

生暖かい血に濡れながらも、握ったフェルミアの手は凍ったように冷たかった。

「もっと近くに、来て。ここからじゃ・・・・・・あなたの顔、遠くて見えない」

「え——」

魔王とフェルミアの距離は体格の違いから、本来お互いの顔が二メートル程離れている。だが今は、寝ているフェルミアを覗き込むように魔王は屈んでいる。お互いの顔の距離は一メートルもない。決して遠くはない。

魔王は震える手でフェルミアを抱きかかえた。手を握った時とは比べ物にならない冷たさに、思わず氷を抱いている錯覚に陥りそうになる。新しく身体から流れた血が熱く感じる程だ。それに、

——軽い。

酔い潰れてベットに運んだ時よりも、体に乗せた時よりも、好き放題に引っ張り回そうとするのを止める時よりも。ずっと——。

抱きかかえて初めて気づく。フェルミアが横たわっていた場所には赤い水溜りが出来ていた。身体よりも、自身の血を吸った服の方が重く感じる。服で吸い切れなかった血が背中に伝って今も水溜りにぽつぽつと落ちる。

——こんなに血を流したら、もう身体に何も残ってないじゃないか！

目に見える形で命が抜けていく。その事実の魔王は戦慄する。

そんな中でもフェルミアは微笑み、魔王を見る。

「温かい………。あなたの手、すごく温かい」
あった

「ああ」

「もう、あなたは魔王なんだから。すぐに泣いちゃ駄目だって……昔から言ってるのに………」

いつの間にか流していた涙を拭こうとフェルミアの手が伸びる。しかし、届かない。真っ直ぐに伸ばせば届く距離にある魔王の顔でなく、虚空を掴み続ける。

それを魔王は自分の顔に引き寄せる。

「フェルミア！ 私は……私はここにいるぞ！」
「わかってる……わかってる」

静かに、フェルミアは言う。

「ごめん、ね」

「何を謝っている？」

「あなたの、赤ちゃん……産んで上げられなかった」
「……っ！」

魔王はその言葉に再び涙がこみ上げて来る。

フェルミアは知っているのだ。もう子供が——自分が助からないことを。これだけの出血では生きている方がおかしいのだ。それをフェルミアも解っているのだろう。

「そんなことはない。まだ諦めるな！ セシリー！ 医者は——医者はいないのか！？」

セシリーの反応は声にはならなかった。涙を流しながら首を横に振る。

答えは魔王にも最初から分かっていた。部屋に入った時からそこに医師の死体を転がっているのを見たから。それでも訊ねずにはいられなかった。

街の医師もいない。魔王と共に来た魔族の中にもいない。魔王やセシリー自身も医術の心得がない。

ここには、ただフェルミアが死ぬという事実があるだけだ。頭では理解していても、言葉にするのが何よりも恐ろしかった。助ける方法は最早皆無。魔王はあらゆる魔術を習得しているが、属性の都合から神聖系のような治療が出来ない。使えるのは、ただ誰かを傷

付け、殺す魔術のみだ。魔王は己の妻の目の前で死に掛けているのに、何もしてやることも出来ない。

フェルミアは全て解つてると言わんばかりに微笑みながら魔王の頬を撫でる。

「大丈夫。あたしがいなくなっても、あなたを支えてくれる人が沢山いるから」

「ああ」

「だから、もう泣かないで。笑って。最後にそんな湿っぽい顔はやだな」

「ああ………！」

魔王は笑った。フェルミアの最後の願いを叶えるために精一杯に笑顔を作る。

しかし、それでも涙は止まらない。寧ろ多くなっていく。

「後のことは任せろ。全部うまくやってみせる」

魔王は溢れる涙を誤魔化すために言葉を続ける。もう叶わない嘘を付き続ける。

「人間が何千、何万と攻めて来ようと絶対に民を守ってみせる」

「うん」

「魔族が平和で在り続ける未来を必ず作ってみせる」

「うん」

「私たちの理想は叶う。これから幸福な生活を送る魔族どんどんが増えていく。だから――」

嗚咽でうまく言葉が出ない。言いたいことが山ほどある筈なのに、うまく出てこない。

「フェルミアもそこに……」

「そこにいられないけれど。あたしの分まで幸せになって」

魔王の言葉を遮ってフェルミアが告げる。

「幸せに……みんなが平和に暮らす国を——理想を……」

言葉は続かなかった。

フェルミアは静かに目を閉じ、魔王の頬に触れていた手が落ちる。止まらなかった血がもう流れない。魔王の腕の中には眠ったように動かないフェルミアがある。

その事実には、魔王は——

「あああああああああああああああああああああ
！」

慟哭する。喉が張り裂けんばかりに絶叫する。

そして、壁に刻まれたシフィアの紋章を睨む。

——シフィア——この国が、魔王国を……フェルミアを殺した元凶！

フェルミアをゆっくり下ろし、魔王は立ち上がる。隣には何やら決意したセシリーの姿が、部屋の入り口には駆け付けた魔族たちがいる。

魔王は宣言する。

「全ての元凶はシフィア王国！ 仇を討つため、死んだ者に報いるため——奴らを滅ぼすぞっ！」

魔王の決断を否定する者は、この場にはいなかった。

「――その後はご存知の通り、シフィア王城で魔王くんはクリスちやんに負けて封印される。以上が大戦での裏話ってやつね」

何気なく言うエストレイアの言葉にクリスティーナはハツとなる。周囲を慌てて目だけで確認する。

クリスティーナは温泉に浸^{ひた}かっていた。隣には、フェルミア様、と感傷に浸^{ひた}っているセシリーがいる。

どうして自分がこんな状況なのか解らないクリスティーナは今まで経緯をよく思い出す。

確かエストレイアに誘われて温泉に来て。それから……。

――思い出せない。

気づけば魔王の過去を視せられ、何事もなかったかのように三人で温泉に浸かっている。

「ん？ どったのクリスちゃん？」

「何、今の……？」

「へえ、魔王くんの過去を視せられたことよりも先に、どうして温泉に入ってるか訊いてくるかと思ったけどそっち先訊くんのだ」

と、エストレイアは言ってくる。何もかも見透かしたような目でエストレイアはクリスティーナを見返す。

「一種の意識を誘導する魔術でしょ」

それに反抗するかのように、やや棘のある言い方でクリスティーナは答える。解らないとはいえ、大体は予想のつく手法だ。

クリスティーナの回答にエストレイアはニタニタと笑う。

「まあ、正解っちゃ正解だね。うん。良い答えだよ」

「何よ。あっさり当てられて僻^{ひが}んでるの？」

「いやいや。誘導したのは事実だけど、魔術じゃないんだなこれが」
「じゃあ何よ。催眠術とでも言うつもり？」

「んー、似たようなもんな。やったのはね、あて特有の能力ってやつでね。何て説明すればいいかな・・・」

「特殊能力？」

「そうそう、それ！ さっき視せた魔王くんの過去の記憶もあての特殊能力」

おどけた調子のエストレイアに対して、クリスティーナは冷静に彼女曰くの特特殊能力を分析する。

クリスティーナは魔王のことを知リたかった。そこをエストレイアに心理的に突かれた。クリスティーナの興味を誘い、精神に干渉。その後に温泉へと誘導し、魔王の過去を視せられた。

だが、疑問がある。

——魔王の過去に詳し過ぎる。

魔王を詳しく調べなければ、あそこまでエストレイアは知ることが出来なかった情報だ。偽りでないことはセシリーを見れば一目瞭然。それでも詳し過ぎる。当時あの現場に居なければ分からないことばかりだ。

「随分と詳しいですね。もう一度あの光景を見る日は来るとは思いませんでした」

セシリーが静かに言う。若干挑発する目でエストレイアを見ている。それでもエストレイアは態度を改めることなく対応する。

「あての特殊能力の一つなんだけどね。他人の記憶を視たり視せたり出来るんだよ」

「他人の記憶を………?」

「そうそう。あては“魔王”のことを個人的に調べててね。だから探らせてもらいました♪」

「まさか、魔王国の生き残りに逢ったことがあるんですか!?!」

セシリーが驚きで声を上げる。

魔王国の生き残り。大戦時に魔王と共に行動していた数十名の魔族。現在の生死は不明で、辛うじて逃げ延びている者がいるとかいないとか……。シフィアでも噂になっていた。

「いや。あてもそっちの方をまず捜したけど無理だった。生き証人が見つからないから代わりに眠っている人から拝借したのさ」

「それはもしかして………」

「そう。封印されている魔王くんの身体」

「そんなことが出来るの?」

「記憶は魂に刻まれ、脳に記録として保存されている。封印越しでも問題ないさ。何せ、あては神だもん」

自信気に小さな胸を張るエストレイア。

とりあえず、とクリスティーナの方を見る。

「魔王くんの過去——大戦時の裏話の一部を見れた感想は?」

「感想って言ったって………」

不意の問い掛けにクリスティーナは戸惑う。クリスティーナとしても突然過ぎて気持ちの整理が出来ていないのだ。

「まあ、あてから見れば問題なしかな。後は………自分た

ちで話し合おうと、良いよ」

「え、エストレイア？」

表情を変えずに沈んでいくエストレイアにクリスティーナは慌ててその腕を掴む。体中が真っ赤だ。顔を覗き込むとエストレイアはぼうっとクリスティーナを見ている。いや、見えているかどうかさえ疑問だ。

「…………結構長い時間浸かっていましたからね」

「そういうことね」

クリスティーナは呆れながら逆上^{のぼ}せたエストレイアをセシリーと共に温泉から引き上げた。

第10話：魔王国（4）

クリスティーナは逆上^{のぼ}せたエストレイアの看病をセシリーに任せて山の中を歩いていた。

冗談半分で言ってみたのだが、あっさり出歩く許可が出た。驚きつつも、その言葉に甘えさせてもらうことにした。エストレイア程ではないが、クリスティーナも身体が火照って風に当たりたかった。それに、今は一人で居たい気分だった。視界に入らないところから天使の監視が続いているが、今のクリスティーナには気にならない。大戦の裏側。魔族側の事情。

魔王国が魔族を大陸中から集めて回っていることはシフィアでも知っていた。それはいつか人間と戦争するための準備だと、シフィアを含め近隣の国々では考えられていた。クリスティーナ自身その考えに疑いはなかったし、寧ろいつでも立ち向かえるように剣を磨いていた程だ。しかし、それは間違いだった。魔王国が魔族を集めていたのは、戦争の戦力を増幅させるためではなく、ただ住人を――仲間を増やしたかっただけだ。

特別なことではない。それを人間は検討違いしてしまった。だから、大戦は起きてしまった。要因はそれだけではないが、人間による魔族への偏見がより酷い戦争へと発展させてしまったことに間違いはない。

魔王が暴れたことによって多くの国で被害が出た。だが、その発端は愛する人々の死から始まった。何者かに妻を殺され、人間たちによって国民を皆殺しにされた。そんな魔王を一方的に非難する権利は誰にもない。

『――何の野望もない小娘が……我が願いを阻むんじゃないっ！』

シフィア王城の決戦で魔王がクリスティーナに言った言葉。

この言葉はまさにその通りだった。魔王の全力の訴えをクリスティーナが一方的な理由で押し付けた。

魔王の願いは愛する者たちと平和に暮らすこと。

その何がいけないことなのだろう。当たり前で、理想的な願い。それを人間が――クリスティーナが阻んだのだ。誰かの策略であったとしても、最後はクリスティーナ自身の手で終わらせたことだ。怨まれることはあっても、怨むことはあってはならない。

大戦時の魔王による襲撃で両親を失ったことも、封印中にリブラークに裏切られて国を奪われたことも、それで恋人のクルスが死んだことも。

全ての元凶は人間――クリスティーナなのだ。

「どうして、今まで気づかなかったんだろう……」

クリスティーナはポツリと疑問を口にする。

本当に何故気づかなかったのだろう、とクリスティーナは思う。

魔族は邪悪な存在。そう幼少の頃から教育されていた。だから、国を守るため、そして魔族を倒すために剣や魔術を磨いてきた。そのことに少しも疑問を抱かなかった自分自身を今になって疑う。

魔族も人間も変わらない。それはエストレイアに視せられた魔王国の光景を見れば一目瞭然だ。魔族だって人間のように笑うのだ。

大切な者のために毎日を一生懸命生きているのだ。それを邪悪な存在だとして言い切れるのだろうか。

「わたしは取り返しをつかないことをしたのね」

今更ながら痛感する。

魔王を倒した英雄ではない。魔族を追いつてた卑怯者だ。

クリスティーナは自分自身をそう思わざる得ない。

何が正しくて何が間違っているのか、解らない。これからどうやって償えば良いのかも。その答えが見つからないクリスティーナは山道を歩き続ける。

すると、見覚えのある場所に出た。最初に訪れた平地だ。いつの間にか戻ってきたらしい。あの時はまだ魔王を恋人のクルスと勘違いしていた。あれからそんなに長い時間経ったわけでもないのに、今は遠い昔のように感じられる。

何となく周囲を見渡すと、今度は見覚えのある背中を見つけた。

「・・・・・・・・クルス」

恋人の背中。否、恋人の姿をした魔王だ。横に積み上げられた木々に腰掛けながら月を眺めている。

今まさに考えていた人物の登場にクリスティーナは足が止まる。思考が止まり、動けなくなる。クリスティーナは魔王の背中を見つめ続けた。

「――いつまでそこにいるつもりだ」

こちらに振り返ることなく魔王は言う。誰に対しての言葉かわからないクリスティーナではなかった。どれだけ時間が経っただろうか。魔王に気づかれたらしい。

「話がある。こっちに来い」

誘われ、戸惑う。しかし、迷ってばかりもいられない。クリスティーナは一步を踏み出した。

セシリーは温泉で逆上せたエストレイアを看病していた。

体を冷やした方が良いとはいえ、流石に全裸にしたまま放置するのは心苦しかった。そう思ったセシリーは身体をよく拭いてからエストレイアに服だけ着せて頭を自分の膝の上に置き、背中の翼で器用に扇ぐ。幸いにもエストレイアの服は露出が多くて丁度良かった。それにしても、とセシリーは思う。

堂々と温泉に入らせた時や今こうして看病していても、周囲を監視している天使は見ているだけで寄って来る様子がない。主が逆上せただけだとはいえ、倒れたのは事実だ。普通他人任せにするだろうか。況してや、セシリーは今日出会ったばかりの他人だ。それに種族柄馴れ合えるとは限らない。セシリー自身はエストレイアに対して多少疑惑はあっても不快な気持ちは抱いていないが、天使の立場としてはそう安易な考えは持っていない筈だ。

——信頼されているのでしょうか。

主であるエストレイアを任されるということはそう解釈する他ない。だが、信頼されるようなことをした覚えがないのも事実。

——魔王様の過去を天使の皆さんもご覧になったのでしょうか。それならば少しは納得が出来る。自分の主の過去にはそれだけの動機があった。それでも、やはり足りないと思った。その足りない何かが今のセシリーには分からなかった。

暫くすると、エストレイアがぼんやりと目を開けた。

セシリーと目が合う。

「んにゃ。おはよう。セシリーちゃん」

「おはようございます。時刻としては間違っていますが」

「細かいこと言わないの」

そういつてエストレイアはセシリーの膝から起き上がった。

「あっ」

「ん？」

思わず出してしまった声にエストレイアは首を傾げる。

「どったの？ 物寂しげな顔して」

「・・・・・・いえ。膝枕をするのが随分と懐かしかったもので」

「あーそういや、魔王くんと出会ったばかりの頃によくやってたもんね」

「そんな昔のことまで分かるのですか」

「まーね。・・・・・・それじゃセシリーちゃんのご希望に応えま
すかな」

エストレイアは再びセシリーの膝に頭を乗せて横になる。乱れた前髪をセシリーが手で整えるとエストレイアはくすぐったそうな顔をする。その姿は第三者から見れば、仲の良い姉妹と誤解するかもしれない。

「魔王様のこと・・・・・・どれだけご存知なのですか？」

「魔王くんのことなら何でも。ファンですから」

何気ないセシリーの質問にエストレイアは平然と答える。

「でも、“魔王”のことは正直あんまり分かんないなー」

エストレイアは変わらず喋り続ける。対してセシリーは表情が暗くなる。

「だからさ、セシリーちゃんの記憶をちょろっと見てみたいなーなんて思ってたりする」

「それは堅くお断りさせていただきます」

「だろうね。それとも話せない理由でもあるの？」

「自分の過去を覗かれても良いと言う人などいませんよ」

「そう言われると返す言葉がないな」

からかうように笑うエストレイアにセシリーはどうしたものかと困惑する。エストレイアの言っている内容がどういった意味なのか解る故にセシリーは答えられない。

話を逸らすため、それよりも、と切り出す。

「どうして魔王様とクリスティーナ姫を今になって二人きりにしたのですか？」

「二人には一度お互いに本音で語り合ってもらうべきだと思ったから。魔王さんの正体をバラした手前で言うのもなんだけど、あの状態じゃ話にならないからね。冷静に考える時間を作る意味でもクリスちゃんには魔王くんの大戦時の過去を視てもらいたかった。その方が少しは魔王くんに対する認識も変わるだろうしね」

そこまで考えていたのか、とセシリーは心の中でこっそりと感心する。見た目や言動で甘く見てみたところセシリーは改めて思われる。

「問題は魔王くんの方だけど………そこんとこセシリーちゃんから見えてどうよ？」

「魔王様なら大丈夫です」

セシリーははっきりと言い切った。

「魔王様はきつともう——クリスティーナ姫を許しています」

「………意外。どうしてどう思うの？」

セシリーの迷いのない答えに今度はエストレイアが驚いた顔をす

る。

「魔王様は世界で一番お優しいお方ですから」

セシリーは魔王が魔王国を建国した根本的な理由を知っている。

建国前からずっと側で仕えているのだから当然だ。

平和。

ただそれだけを望み、求めて魔王国を造った。魔族同士でいつまでも笑っていられる理想郷を描いて造られた魔王国。実際、魔王やフェルミアが望んだ国が出来上がり、日々善くなっていた。怨みや憎しみとは無縁の場所だと言っても過言ではない。そこを造り、そこで暮らした一人としてセシリーは自信を持って言い切れる。

何故なら、魔王国を造った王が何よりもそれを望むから。誰よりも優し過ぎる魔王は誰よりも怨みや憎しみとは無縁なのだ。辛い目に遭っても、愛する者を奪われても、魔王は憎しみ切れない。誰よりも優しい魔王の最大の長所であり、短所だ。戦争を起こした人間は赦せなくても、その戦いで同じように大切な者を失ったクリステイーナを許している。

それは決して同情ではない。魔王はクリステイーナを一人の人間として見ている。大戦当時から一年後の現在までクリステイーナは失ったことに負けず、今に至ることを魔王は解っている。未来のシフィアの王として育てられ、魔王を倒すほどの力を持っている、所詮は十年とちょっとしか生きていない少女なのだ。苦勞と苦惱なしに今日まで来れるわけがない。継る相手を奪った魔王だからこそ、それを深く理解している。直接本人から聞いたわけではないが、それに気づけないセシリーではない。

「だから、大丈夫です」

魔王の使い魔は自信を持って言った。

第11話：魔王国（5）

「――いつまでそこにいるつもりだ」

いつまでも突き刺さる視線に苛立ちながら魔王は言った。それでも視線の主の動く様子がない。

「話がある。こっちに来て」

動かぬのなら呼ぶしかない。言って振り返ると、困惑したクリスティーナの顔があった。目が合うと迷うように視線を逸らす。だがすぐに決意した目で魔王を見返し、こちらに歩み寄って来る。

「隣、いい？」

「ああ」

魔王が許可すると、クリスティーナは隣に腰掛けてくる。

隣、と言ってもクリスティーナは敢えて少し離れた場所に座った。二人の間には人一人分と少し空いている。片方では手が届かない距離。しかしお互いが伸ばせば届く長さ。近いようで遠い距離。それが今の二人の心の距離でもあった。

クリスティーナは座ったが良いが、何を言っているのか解らないのか俯いて黙っている。それに対して魔王は隣に座ったクリスティーナに見向きもせず、空高くにある月を眺める。

今夜は雲一つ無く、満月がはっきりと映っている。そのお陰で月明かりだけでお互いの姿がよく見える。

「今日は月が綺麗だな」

「・・・・・・そうね」

「月は形こそ光加減で変わるが、その姿は結局は変わらない」
「何が言いたいのか……」

クリスティーナが魔王を怪訝な顔で見る。

「毎日のように見る月は変わらないのに、それに照らされる私たちは日に日に変わっていくなあ、と思ってな」
「……」

自分で言うってから、魔王は本当に変わったと改めて思う。
一年前まではフェルミアや魔王国の魔族たちに囲まれて平和に暮らしていた。しかし今はフェルミアも仲間だった魔族たちもセシリーを除いて全員死んでいる。魔王国も存在しない。

何より、魔王自身が魔術を扱えない人間になっているのが驚きだ。魔族とて人間と同じように寿命がある。だからフェルミアや他の魔族が亡くなっているのも不思議ではない。だが、自分の姿が変わることとは普通なら起こりえない。こんな状況を一年前に誰が想像できただろうか。

「さっき……エストレイアにあなたの大戦の時の過去を視せてもらった」

クリスティーナが搾り出すように言う。

その話は先程、天使に聞かされていた。自分の過去を覗かれるのは嬉しくないが、ある意味効果的ではあるため敢えて口出しはしなかった。魔王自ら語るよりも、当時の出来事を見た方が理解が早い。セシリーが傍にいたから真偽はすぐに確かめれる。

「何というか、うまく言えないけど……ごめん」

小さな子供が叱られたような顔でクリスティーナは魔王に謝罪した。

顔はしっかりとこちらに向けるも、視線は下に下がっている。声も弱々しく、唇は震えているのが見えた。旅を一緒にしてから、人間クルスの記憶からも、こんなクリスティーナを見るのは珍しい。

「謝って済む問題じゃないって解ってる。でもわたし、どうしたら良いのか分からなくて……」

「確かに謝って済む問題ではない」
「……っ」

「だが、クリスティーナが私に謝ることではない」
「え」

おそらく予想とは違う反応に驚いてクリスティーナが目を見開く。

「あれは戦争だ。クリスティーナ一人のせいではない」
「だけど……」

「もういい。お前は十分に苦しんでいる。それよりも――」
「何でよっ!」

魔王の言葉を遮ってクリスティーナは立ち上がる。その顔は怒りに染まり、目には涙が浮かんでいる。

「何でそんな冷静なのよっ! さっきのわたしのように――大戦の時みたいに怒鳴り散らせばいいじゃない! どうしてそんなに落ち着いてるのよ。わたしに気を使ってるの? それとも同情? そんなことされても嬉しくないわよっ!」

恋人の死を知った時と同じ真っ直ぐな怒気。
クリスティーナの思いが怒りと共にまくし立てられ、魔王に向け

られる。そのやり場の無い怒りを魔王は知っている。だから、教えてあげなければならない。

「同情に近いかもしれない」

「何よ、それ」

「お前が恋人の死を知って、怒り、悲しんだあの姿に私自身を重ねてしまったからだ」

「………!？」

クリスティーナが何とも言えない顔をする。驚いているようにも、悲しんでいるようにも見える。

魔王はそれでも続ける。

「だからといって、全てを感情移入するつもりはない。人間わたしたちと魔族はお互いにあの大战でやってはならないことをした。“戦争だから”というのは単なる逃げ口実だ。故に、私たちは王として何らかの責任を取らなければならない」

「王としての、責任………?」

王になるまでにはいくつかの通過点がある。それは礼儀作法だったり、世界情勢の把握だったり様々だ。国によって異なることもあるが、王族の後継者が成人、或いは現王の引退に合わせて準備を進めていくのが通例である。

しかし、例外も当然存在する。戴冠式たいかんを前に王が急死した場合だ。今回の場合は魔王のシフィア王城急襲によって王も王妃も亡くなっている。唯一の後継者であるクリスティーナは成人になる前に王にならざるおえなかった。更に王と共にそれを支えていた重役たちも魔王によって殺されているため、うまく引き継ぎが行われたとは思えない。

王としての覚悟も責任も、他の通例の儀式を行った者たちより足

りないだろう。一緒に旅をしていて、それがよく解った。個人としては悲しみに耐えていても、一国の王としては考えが足りてないと思える。大方、リブラークなら自分より民を幸せにしてくれると思いい込んでいるのかもしれない。民より魔王を優先したところから容易に想像ができる。セシリー曰くの「リブラークなら大丈夫」の心理はクリスティーナにも働いているのだろう。

だが、それも言い訳だ。望む望まないは関係ない。一度王となった以上、責任は最後まで全うしなければならない。

「私たちは守るべき国を失った。失った者のためにも、大戦の真実を暴かなければならない。二度と、同じことを繰り返させないために。それが私たちに出来る数少ない償いの一つだ」

「大戦の真実って……」

「あの戦争は明らかに誰かの策略だ。いくら各国の連合軍で固められていたとはいえ、僅か数日で魔族の軍隊を壊滅されるわけがない」

大戦は魔王が魔王国を離れた時に起こった。それもすぐには戻って来れない程離れたところだ。その間はフェルミアに魔王国を託していたが、これも戦争を仕掛けられる前に夜襲を受けている。魔王国でも信頼の厚いフェルミアの負傷は魔族たちの冷静さを失わせた。怒りや悲しみ、恐怖といった感情が溢れて指揮も乱れた。そのせいであつという間に制圧され、籠城を余儀なくされた。

「人間の軍の襲撃のタイミングがあまりにも良過ぎる。クリスティーナは当時どう聞かされていた？」

「分からない。当時は増援として魔王国へ向かつてる途中だったもの。作戦会議なんて参加できる立場じゃなかったし。少しでも腕の立つ兵士は前線へ送り込まれてから」

「何も聞かされていない、か……」

「・・・・・・うん」

クリスティーナを見る限り嘘を付いて様子はない。寧ろ混乱して
るようだ。

「ならば、知りたくはないか？　どうしてあの戦いが起こったのか」
「知りたい・・・・・・知りたい！」

「それならば、共に探そう。大戦の真実を――私たちの償いを」

魔王は立ち上がり、手を差し出す。

滅ぼすのではなく、共に歩み続ける。これが人間に国を、仲間を――
妻を奪われた魔王の答えだった。

「あ・・・・・・」

「大戦の真実を暴いたからといって全てが許されるわけではない。
だが、その後は今の私でも何をすれば良いのか分からない。だから、
共に見つけてほしい」

戸惑った顔でクリスティーナは差し出された手を見つめている。
急な申し出による困惑か、恋人の姿をした魔王と一緒に行動する
ことへの拒絶か、まだ自分の中で整理が終わっていないのか。自分
の手を胸元でギュッと寄せる。

やがて、決意した顔で口を開く。

「約束して」

「何をだ？」

「わたしはあなたを裏切らない。だから、あなたも絶対にわたしを
裏切らないで」

両親を殺し、国と恋人を奪われるきっかけを作った魔王。それと

共に歩む道は過酷でしかない。しかしクリスティーナは敢えてそれを選ぶ。その誓いの前提を提示する。

魔王もそれに応える。

「ああ。約束する。私たちは共に生き、共に罪を清算する同志だ。決して裏切らず、どちらかが死ぬことも許されない」

「解ってる。わたしも……王としての責任を果たすわ」

クリスティーナが力強く魔王の手を握る。魔王もその手を握り返す。

「王である以上、一度交わした盟約は死んでも守らなければならない」

「ええ、必ず」

お互い手を離す。まだ温もりの消えない、約束を誓った手を見る。魔族の王として、亡くなった者たちに報いたい。亡くなった者が生き返らない以上、これより犠牲と悲劇を出さないために魔王は立ち上がる。まずは大戦の裏を引いていた者を暴き出し、二度と繰り返させないようにするにはどうするべきか考えなければならない。いつまでも、悲しんでばかりいられない。復讐という現実逃避から魔王は改めて目を覚まし、新しい同志を見る。

クリスティーナも握っていた手を開いては閉じてを繰り返している。きっとクリスティーナも今後について何らかの決意をしているに違いない。だがその頬が少し赤く、やや落ち着きがないようだ。

「ねえ、もう一つ確認したいことがあるんだけど……いい？」

「何だ？」

どうしたんだ、と魔王が思っているとクリスティーナが訊ねてくる。

「十秒だけ目閉じて動かないでくれる？」

「構わないが………一体何をするんだ？」

「いいから！」

怪訝に思いながらも言われるがままに魔王は目を閉じる。すぐ近くでクリスティーナが息を呑む感じがする。吐息が掛かり、殆んど密着していると言っている距離まで詰められる。

——何をする気だ？

未だにクリスティーナの意図が見えない魔王。

すると、両頬を柔らかい何かが押さえた。それがクリスティーナの両手だと気づいた直後、彼女の方に引き寄せられ、頬に当てられたものとは別の柔らかい感触が唇に伝わる。驚いて目を開けると、眼前に目を閉じたクリスティーナの顔があった。キスされている、とそこで初めて気づく。唇同士が触れただけのキス。それがきっかり十秒続いた。

十秒後にクリスティーナが唇を離し、目を開ける。吐息が漏れる。キスする前と違って頬も元の色に戻り、落ち着いている様子だ。

「ちゃんと目閉じてて言ったでしょ」

「あ、ああ………いや、そうではない。何だ今のは!？」

魔王が取り乱すのに反してクリスティーナはこちらに笑いかける余裕がある。

「確認したいことがあるって言ったじゃない」

「だから、何だそれは」

「あなたはクルスじゃない」

クリスティーナの言ったことに魔王は思考が止まる。

「おへその下にグツと来るものがない。心が躍らない。胸が苦しくない」

「服のサイズは合っている筈だから胸は苦しくならないと思うが・
・・・・？」

「何でよ！」

的確な突っ込みにクリスティーナの非難を浴びる。わけがわからない、と魔王は首を傾げる。

「何がしたかったんだ」

「クルスは本当に死んだんだなあって思っただけよ」

「・・・・・どういふことだ？」

「好きな人とキスすると何かこう、幸せ！　って感じるじゃない。それが今なかった。それだけよ！」

——好きな人とキスすると幸せ、か。

これは魔王にも解る。確かに想い人以外としてもその感情は生まれない。

「いきなりしちゃったけど・・・・・もしかして、怒ってる？」

「いや、別に。ただいきなりあんなことをやられるとこちらとしては身が持たない。・・・・・色々と疎いんだ」

「確かに。わたしの胸チラッと見ただけで鼻血噴く程だもん。そういうところ子供よね」

「からかうな」

「こどもー」

「うるさい！　そっちの方が子供だろう！」

魔王とクリスティーナは笑う。

敵だった二人がこうして笑い合える。だからきつとこれから何とかなる。具体的な理屈はないが、魔王はそう思う。そう、信じられる。

「――奥様、見ましたか。あの二人もうデキちまってますぜ」

「ええ。予想を上回る展開にわたくしも喜びを隠し切れません」

不意に、二人の聞き覚えのある声が耳に入る。魔王とクリスティーナがほぼ同時に声の方へ振り向く。

そこにはニタニタ笑いのエストレイアと満面の笑みを浮かべたセシリーが茂みからこちらを窺っていた。更にその後ろには力天使一体と権天使数十体が詰め寄せている。力天使は相変わらずの無表情だが、権天使たちは何やらヒソヒソと話しながら盛り上がっているのが見えた。

「な、何故そんなところにお前たちが!？」

「い、一体いつから!？」

慌てふためく魔王とクリスティーナ。

エストレイアとセシリー、力天使の三人が茂みから出てくる。権天使たちは茂みからは出てこないものの、興味津々と見守っている。

「いつからと言われると……魔王くんがクリスマスちゃんに『今日は月が綺麗だな』ってロマンチックに囁いた時からだね」

「ロマンチックに囁いてなどいない!」

「魔王様。とても素敵でした。わたくしも思わず魅入ってしまいました」

「そんな感想も求めていない!」

「……………ていうか最初の方からじゃない。逆上せて寝てた筈なのにわたしと別れてから付けてたの？」

クリスティーナの問いにエストレイアは首を軽く横に振る。

「ううん。監視役の権天使の一人から『これから面白くなりそうです！ 絶対見所ですっ！』って言われてから、こりゃー寝てる場合じゃねえ！ って飛び起きて駆けつけたのさ」

「その権天使連れて来なさい。しばくわ！」

拳を握るクリスティーナにエストレイアは、まあまあ、と押さえる。

「それよりも二人が仲直りしてくれて良かったよ」

「仲直りも何も……………」

「仲直りだよ。二人は本当なら仲良しなんだからさ。……………」
それで、これからどうするの？」

話を盗み聞きしていた筈なのにエストレイアは敢えて確認する。
その答えを魔王とクリスティーナは迷わず口にする。

「これからも旅を続ける」

「二人……………いいえ、三人で」

クリスティーナがセシリーの方を見ると、微笑み返してくる。答えは、聞くまでもない。

それを聞いたエストレイアが、そっかそっか、と満足気に呟く。

「それならこれを上げよう」

エストレイアが何やら用紙を力天使から受け取り、魔王とクリスティーナに差し出す。

「何だこれは？」

「入国許可書。今のきみたちは国籍がない状態なんだよ？ それなのにどうやって入国するのさ。ルーニスとは違うんだよ」

呆れた声でエストレイアが魔王を見る。

エストレイアの言う通り、ルーニスのように大陸全土の国があったり国内を通過できるわけではない。国境沿いに入国チェックを行う国も当然存在する。その際に必要なのが、国籍などの個人情報を書かれた入国許可書だ。本来ならしっかりとした施設で申請して作成もらうものだ。

魔王が使っている身体の主やクリスティーナは国籍としてはシフィアだ。しかし現在シフィアはリブラークに奪われたため国籍がそのままでは通用しない恐れがある。占領後に残った民にはそれなりの措置をした筈だろうが、魔王たちにはそれが無い。

そういった場合は、有力者や名のある組織の紹介状があれば国籍が不明でも通用する。魔王たちのように戦争で国を追われた者や、大陸中を旅して回る商人たちなどに対する処置だ。

魔王が手渡された入国許可書には紹介者の欄にエストレイアの名前がある。

「これで通用するのか？」

「通じる通じる。ヴァナデイス専用だけどね」

「ヴァナデイスに知り合いがいるのか？」

「いるよー。一番偉い人に渡してって門番の人に伝えてね。きっと無視は出来ない筈だからさ」

「ああ。わかった」

入国許可書をリュックの中に大切にしまい、空を見上げる。
いつの間にか月明かりではなく、昇り始めた太陽で周囲が明る
くなっていた。朝日の光が眩しく見える。

「結局朝になっちゃったわね」

「ああ。今から出発すれば夕方にはヴァナデイスに着けるだろう」

「徹夜したのにハードだなあ」

「我慢しろ」

「分かってるわよ」

文句を言いながらもクリスティーナは旅の準備を始める。魔王もリュックを整理しようとする。そこで没収されていた筈の剣がリュックの横に置かれているのに気づく。エストレイアをチラリと見ると、惚けた顔をする。魔王は呆れながらも敢えて訊ねず、いつも通り腰に差す。

クリスティーナも剣を背中に背負い、旅の準備を終える。

「一旦お別れだね。色々迷惑かけて悪かったよ」

「そうだな。だが、一応世話になったと言っておこう」

「素直じゃないねー。まー今回はあてにも非があるから人のこと言えないんだけどね」

エストレイアは苦笑いで言う。

「一旦って言ったけど、次はいつ会えるの？」

「んーわかんない。一応仕事があるからね。なに？ 寂しくなっちゃった？」

「違うわよ！ また今回みたいな登場されると心臓に悪いからよ」

「なら次はもっと驚く登場にしないとねー。期待して構えてて」

「そこは“待ってて”でしょ！ 構えさせないでよ！」

朝から元気だな、と思いつつ魔王はエストレイアに背を向ける。

「いつまでもこうしているわけにはいかない。私たちは行くぞ」

「うん。呼び止めるつもりはないよ。また会えるしねー」

「ああ。またな」

「またね、エストレイア」

「失礼します。またお会いしましょう」

「うん。またねー」

そう言ってエストレイアと別れる。

魔王とクリスティーナは軽く手を振り、セシリーは一礼してヴァナデイスの方角へと歩き出す。エストレイアの方は腕を子供のように大きく振って魔王たちを見送った。

一柱の神と出会い、魔王とクリスティーナは解り合えた。仇敵同士が手を取り合ったことの意味。本来なら成し得ないこの行動は、始めにして大きな一歩になるだろう。魔王はそう信じる。

——いつか、きっと……

魔王は旅の一步を踏み出す。今になって最初の一步を。

目指すは、ヴァナデイス神殿国。

魔王たちが見えなくなるまでエストレイアは手を振っていた。

見えなくなり、腕を下ろす。それを待っていたかのように力天使が近づいてくる。

「いかがでしたか。今世こんせいの魔王は」

「うん。予想以上だよ」

エストレイアは満足気に頷く。

エストレイアは“魔王”について個人的に調べていた。

『ディオ・リナ』には誕生する生物が決まっている。存在する生物から変種に成る可能性を含め、『ウィルフレド・イマ』では全て把握している。『ディオ・リナ』の管理業務を行う神だからこそその知識だ。

しかし、その知識の中に“魔王”はない。

魔王を名乗る魔族や人間の存在は予測されてる。だが、“魔王”という存在は認知されていても把握はされていない。神でさえも全く正体不明の存在なのだ。

だから、エストレイアは知りたいと思った。会って、理解したいと思った。

そして得たのは、

「楽しいなー」

エストレイアは本当に楽しそうに呟く。それは子供が誕生日にプレゼントを貰った時に見せるような笑顔。

「『ディオ・リナ』の規格外の存在——魔王」

エストレイアは見えなくなった魔王の背中を見る。

「次は一体何を見せてくれるのかな。魔王くん」

『ウィルフレド・イマ』の神はいつまでもその背を見続けた。

第12話…入国

「剣の稽古をつけてほしい」

時は正午過ぎ。早めの昼食を取ってから、休憩しているクリステイーナに魔王は言った。

木にもたれながら水を飲んでいたクリステイーナが水筒から口を離す。

「突然ね。どうしたの？」

「今の私は魔術でも剣術でも中途半端だ。魔術は無理だが、剣術なら鍛えれば何とかなる。だから、稽古をつけてほしい」

これは以前から魔王が思っていたことだ。

魔王の剣術は素人そのもの。それに反して、魔王の今の身体の主である人間クルスは優れた二刀流剣術の持ち主だ。記憶越しだが、素人の魔王から見ても凄いの一言である。どれだけ素晴らしい剣の腕を持つ身体とその知識があらうとも、使いこなせなければ意味がない。

「ふーん。まあいいわよ。食後の運動ってやつね」

快くクリステイーナから了承を得る。

水筒を地面に置き、立ち上がりながら愛剣に手をかける。

「――それならば、わたくしにも稽古をつけてもらってもよろしいでしょうか」

魔王の影からセシリーが出てくる。セシリーはいつどこで人間に

遭遇するか分からないため、常に魔王の影で生活している。現在は見渡しの良い平原で、人どころか動物すら見えない。

「わたくしも大戦から暫く剣を握っていませんので感を取り戻させてください」

「いいけど、剣は？」

クリスティーナの一言でセシリーは、しまった、という顔をする。

「そういえば持っていませんでした。大戦時に紛失してしまいましたので」

「それならわたしの使っていいわよ」

そういつてクリスティーナは自分の剣をセシリーに手渡す。魔王はその行動に驚き、セシリーもクリスティーナと剣を交互に見ている。

「クリスティーナはどうするんだ？ まさか素手でやるつもりか？」「まさか。……こうするだけよ」

クリスティーナは両掌を広げると、そこにシフィアの魔法陣が浮かび上がる。太陽と月が白く発光し、同色の物体が魔法陣から出てくる。

空中で静止したそれをクリスティーナは掴む。

掴んだのは白い剣だった。光で作られたかのような白一色で出来た剣。片手に一つずつ握り、それらしい構えを取る。

初めて見るクリスティーナの二刀流の構えに魔王は感心する。

「そんなことも出来るのか」

「剣なら魔術でいくらでも作れるわよ。普段の剣よりは劣るけどね。」

「……それじゃ——」

始めましようか、というクリスティーナの言葉で稽古が始まった。

「はあはあ……」

魔王は膝に手を置き、息をつく。嫌な汗が流れ、袖で拭う。しかしすぐに新しい汗によって顔が濡れる。

短時間による激しい動きで魔王の体は疲労を訴える。対して、クリスティーナは汗一つ流れることなく平然としている。

「はあっ！」

セシリーがクリスティーナの背後から素早い動きで攻める。だが、クリスティーナはひょいと体を横に動かしただけでそれを避ける。セシリーはそれでも体勢を整えて正面から斬りかかる。それをクリスティーナは片方の剣で軽々と受け流した——かと思えば、セシリーの体が宙に投げ出される。もう一方の剣で吹き飛ばされたのだと判った時には、セシリーは地面を転がっていた。

「剣が基礎に忠実過ぎる。それで行きたいならもっと速く動きなさい。だから攻撃が簡単に読まれるのよ」

「は、はい！」

「次！」

呼ばれているのが自分のことだと判り、魔王は駆ける。

右から上段に斬りかかる。同時に左の剣で横に一閃する。クリスティーナは顔色を変えることなく両の剣であっさり受け止める。そ

して鏢迫り合いになる。剣を押ししてもびくりともしない。そんな魔王の腹をクリスティーナは蹴り上げた。

「がっ・・・・・・・・！」

予想外の攻撃に魔王はよろめく。完全に体勢が崩れた魔王にクリスティーナが斬りかかる。ほんの一瞬の内に魔王の剣を弾き、喉元に切先を突きつけられる。

視界に入らないところで手から離れた剣が落ちる音を聞く。

「・・・・・・・・参った」

「動きが単調で遅い。剣筋が正直すぎるし、何より集中力が足りてない。剣ばかりに意識を向けているから他の攻撃に反応できないのよ」

「く・・・・・・・・」

魔王は悔しさに歯噛みする。

クリスティーナの言うことは全てが的確だった。魔王には剣の戦いに必要なものがあらゆる面で足りていない。

剣の知識は基より魔王の持つ身体が憶えている。それを活かせるだけの術を持つ身体を魔王は使っている。

しかし、魔王はうまく扱えない。魔王自身今の戦い方が良かったとは思えない。それが解っている。解っているが、行動に繋がらない。どれだけ素晴らしい身体を使おうとも、それは人間クルスが磨いたものだ。完成されたものを受け継いだところで、今まで剣を握ったこともろくなかった魔王が、すぐに使いこなせるわけがない。

それに、魔王が身体を失う前の基本戦術は魔術を行使する前提のものだ。相手の気配、攻撃、防御・・・・・・・・全て魔術で察知し、対策を打ってきた。今に思えば依存に近かったのかもしれない。現に魔術を失った魔王は手加減して戦っているクリスティーナに手も

足も出ない。

「セシリーは見てるだけだとそこまで問題ないわね。後はスピードと、基礎剣術を意識し過ぎなのを無くすること。基礎も大切だけどそれ以上に応用を利かせないと意味がないから」

「はい。わかりました」

「クルスは問題ありません」

「返す言葉もないな」

クリスティーナの指摘に魔王は気まずさから項垂れる。

「あなた、攻撃する時に何考えてる？」

「？ 当然当てることだが……」

何を言っているのだろう、魔王が首を傾げていると、クリスティーナが溜息をつく。

「どこにどう当てるとか考えてないでしょ」

「考えている。今は上段から斬りかかりながらも一方の剣で攻撃

——」

「その後は？」

「え」

「その後どうするか。具体的に考えてる？」

問われてから魔王は思い出す。

魔王は確かに具体的な攻撃方法が後にあったとは言えないが——

「だが、相手がどう動くか分からないのだから具体的な攻撃が思い浮かぶわけがないだろう？」

「相手の動きを予想するのは勿論だけど、相手を自分の思うように

動かせるに誘導することを考えて攻撃しないと」

「そんなことができるのか？　どうやって……？」

「そうね……もし、上段から思い切り斬りかかれたらクルスはどうする？」

突然の例題に魔王は考える。

そして導き出した答えを口にする。

「避ける、な」

「どっちに？」

「どっち？　……右に避ける」

「ほら」

「何が、“ほら”なんだ？」

言っている意味が解らないという顔をする。

「まず、この攻撃の対処法としては避けるか受けるかね。これは誰でも分かることよ。だから避けるか受けるかの二択の行動に誘導することができる。そしてその後の行動が制限される。避けるなら右か左か後ろ——みたい。そうやって自分のペースに相手を持っていく。攻撃はそういったこと全てを考えてやらないと」

「……成程」

「当然、全てが予想通りとはいかないわ。でも考えなしの行き当たりばったりな攻撃より、思考しながら攻撃した方が良いに決まっている。今のクルスのように力が劣っているなら尚更。実力で勝てないなら、知恵で勝る戦いをしないと」

クリスティーナの解説で魔王は納得した。

魔王は強大な存在だ。今までの戦いでも敵の殆んどは一撃で葬ってきた。だから、そこまで具体的に攻撃方法について考えたことが

なかった。

「その通りだな。とても勉強になった」

「そう？　なら、もう一度いくわよ」

「やり方さえ分かればこちらのもの。次はさっきのようにはいかなぞ」

魔王の言葉にクリスティーナは不敵に微笑んだ。

クリスティーナから身体の動かし方や小手先のテクニックを軽く教わった。本当に、軽く。基よりそういった手法は人間クルスの記憶として魔王にも備わっている。それをどううまく引き出し、実戦で使用かは、今後の魔王次第だ。

教えられたのは、殆んど基本的な心構えや考え方が中心だった。それこそ剣術に限らず、生きていくことにまで応用できそうなことだ。……勿論、使えればの話だ。

「早く宿で休みたい」

『頑張ってください。魔王様』

「…………お前は楽でいいな」

結果的に魔王は負けた。満身創痍だ。フェルミアにあったばかりの頃の修行を思い出しかけて頭を振る。

——あれに比べれば…………。

「ほら、見えたわよ…………何て顔してるの？」

「いや、何でもない…………」

魔王は過去のトラウマに呑み込まれそうになっているところで、クリスティーナの指した方を見る。

魔王たちが立っている平原よりもずっと低い位置。その切れ目が境界線のように、自然に恵まれた平原から荒れた大地へと変わっている。そんな荒野の中心に聳え立つそれは、目的の“国”だった。

強固な壁に覆われ、その天辺は不規則にでこぼことしている。中には石造りの建造物が多く見られ、その中心には教会堂のような巨大な建造物が鎮座していた。更に、その教会堂から国の周りに囲まれた壁へ線となった石がいくつか繋がれていて、国自体がまるで一つの家のようだ。どれも歴史を感じさせるものばかりで、何から何まで儀式めいていると感じられた。

ヴァナデイス神殿国。

その名前を知っていれば、確かにこれは“それらしく”見える。しかし、魔王には目の前の国が城塞とは思えない。

「胡散臭い国だな」
うさんくさい

「わたしも初めて見るけど、何か近寄り難いわね」

魔王とクリスティーナが率直な感想を述べる。

見かけ通りヴァナデイス神殿国は歴史が長い。だが、その割りに発展らしい姿が皆無だ。国よりは古い遺跡と呼んだ方がまだしっくりくる。

魔王たちは荒野の中で数少ない舗装された道を見つけてヴァナデイスの門を目指す。

以前の魔王でも通れるくらい巨大な門と扉。国を囲む壁も大きければ、その入り口も強固だった。

門に辿り着くと門番の男が近づいてきた。兵というよりは修行僧といった感じの男があからさまに不審な目で魔王たちを睨むように見る。

「入国許可書はありますか？」

「ああ。これだ」

魔王たちはエストレイアに貰った入国許可書を門番に手渡した。

門番は一通り目を通した後「少しそこで待っていてください」と言
って門の奥へ消えた。不審な目は最後まで消えなかった。

——まあ、無理もないか。

このご時勢に若い男女がいきなり国に押しかけてくれば誰でも不
思議に思う。商人でもなさそうな国籍不明の男女が、有力者や名の
ある組織からしか貰えない紹介状を携えてくれば尚更だ。

「渡しただけで何も言わなかったけど、大丈夫かな？」

「何とかなるだろう」

暫く待つと、門番が現れる。動きはゆっくりだが、何故か困惑し
ているような顔をしている。

「入国の許可が下りました。お二人はすぐに中央にある教会を訪れ
てください」

「すぐに？ 何でまた」

「この国では外部の人間にガイドが一人ずつ付いてくるのか？」

魔王はほくそ笑む。

——その場合、監視という意味のガイドだろうか。

門番は困った様子で魔王たちの質問に答える。

「その、私にもよく分からないのです。お二人の名前を聞いて大司
祭がすぐ呼んでくるようにと……」

「大司祭？」

「この国一番の権力者ね」

クリスティーナの名前がヴァナデイスに知られていてもおかしくはない。寧ろ当然と言ってもいい。交流がなかったとはいえ、大戦で両親を失ったクリスティーナが王を引き継ぐのは誰でも解る。正式な発表がなくても。

それにしても、と魔王は思う。手回しがあまりにも良過ぎる。魔王たちが最初からここに來ることを、ヴァナデイスには分かっていたということになる。

——まあ、それならそれで………。

「都合が良いな」

「そうね。最初から会うつもりだったし」

「お二人は一体………」

門番が驚いた顔をする。この国の住人といえど、魔王を倒したクリスティーナの顔までは知らないらしい。

「さて、案内してもらおうか。その大司祭とやらのところに」

魔王たちは門を潜った。

第13話：神（2）

門を潜ると、外見通りの石造りの街が広がっていた。

路肩に商店が並び、それを通行人が眺めたり商品を手に取ったりしている。子供たちが走り回る。商人たちが慌ただしく道を行き来している。外から見れば遺跡のように閑静としていた城砦も、人がいるだけで全く印象が違う。

どこの国とも変わらない人の溢れた雰囲気。そんな街並みを眺めている内に目的地に着いた。

他の建物と同じ石造りの儀式場。しかし、床から屋根、壁や窓に至るまで手の込んだ造りが施された建物は、それそのものが一つの作品に思えた。壁や窓には芸術的な絵が描かれ、床と天井には見たことのない文字や記号が目立たないように刻まれている。

ヴァナデイス神殿国の中心部に建つ教会堂。

最初から開かれていた扉の奥に待ち人はいた。

「どうですか。街の様子は」

出迎えたのは初老の男だ。派手とも地味とも言えない装束を纏っているが、慈悲深いオーラを全身から流すような不思議な感覚を受ける。その格好から目的の人物であると容易に分かった。

教会堂の中へ入ると、まるで友人と話すかのような態度でその男は言った。

「賑やかで楽しそうです。わたしの国と変わりません」

「そうですね。平和な国ならどこでも見れる光景ですが、残念なことには全ての国が平和ではないのが現実です。何故でしょう？」

「みんなが平和を望んでもそれが叶わないから」

「その通りです。平和を望む者がいると同時に戦争を望む者もいま

す。……『ディオ・リナ』全員の信教が同じならどれだけ良いことか」

「それは難しいですね。誰もが同じ願^{しんきよう}いではいられない」

だから、戦いはなくならない。

『ディオ・リナ』を生きる者全てが平和を望んでも、その国、その人によって“平和”の形は違う。

自分と自分の周りの人間が幸せならそれで良いという者。自分の国が裕福であるためなら隣国が滅んでも良いという者。人間が無事に暮らせるならそれ以外の種族は絶滅しても良いという者。

先の大戦がそうであったように、必ずしも人々が口にする“平和”が共通しているとは限らない。それこそ、『ディオ・リナ』で暮らす者全てが同じ信教でもない限りは。

そうですね、と男は悲しそうに呟く。

「挨拶が遅れました。私はヴァナディス神殿国の大司祭ルクソースです。ようこそいらっしゃいました」

「シフィア——元シフィア王国の王クリスティーナです。突然の訪問をお許しください。こちらは——」

「魔王、ですね」

「!？」

魔王とクリスティーナは共に絶句する。それでもルクソースと名乗った大司祭を態度を崩さない。

「どうして……」

「エストレイア様から伺っております。敵意は全くないと」

「……それでも、こうしてあっさり入国させることに危険だと感じないのか？」

弱体化しているとはいえ、魔王は魔王国の王。どんな策略をめぐらせているか分かったものではない。エストレイアから話を聞いていたからといって、普通はあっさり入国させることはなってはならない。見えないところで何らかの対策を行っているだろうが、大司祭からは何かをしたという様子が見られない。

「神を信じるのがヴァナデイスの教えですから」

嘘を付いているようには見えない。だからこそ、魔王が目の前の大司祭を怪訝に思う。

「こちらへ」

魔王の気持ちに気づかず、ルクソースは教会の奥へと歩き出す。促され、魔王とクリスティーナはその背を追う。

何の変哲もない壁でルクソースは立ち止まり、ほんの少し出っ張った壁のタイルを押す。すると、ルクソースが押したタイルの下の方に逆三角形の光が浮かび上がり、壁が左右横に自動で開く。

現れたのは狭い部屋だ。二、三人くらい入れるのがやっとの空間。天井だけ少し高く、そこから太陽の光を直接浴びせているかのような光明が差している。

「入ってください」

ルクソースが道を空ける。

魔王がクリスティーナに目だけで「大丈夫か？」と訊ねる。クリスティーナはなるようになれと言わんばかりの呆れた反応を返してきた。クリスティーナが先に進み、次に魔王が入る。それに止まることなくルクソースが続いた。魔王の危惧は杞憂に終わったが、まだ油断は出来ない。

ルクソースが今度は部屋側からタイルを押すと扉が閉まる。閉じると同時に軽い浮遊感を味わう。落ちている、と気づいた時には浮遊感は自然と消えていた。

「着きました」

「どこへ連れて行く気だ」

「この奥へ行けば分かります。……今日は貴方方にとって記念になる日になるでしょう」

扉が開かれる。

扉を潜った先にあったのは広い空間だ。教会のように壁や天井、柱に至るまで細かな造りとなっている。

しかし、造りの種類が違う。教会が神に祈る場所だとすれば、ここは王を崇める場所だ。

広い空間の奥には玉座があった。そこへ続く壁には翼の生えた騎士たちが並んでいた。騎士に護られる王は魔王たちを見て微笑んだ。騎士は天使。

王は神。

神は玉座から立ち上がる。

「ようこそ、我がヴァナデイス神殿国へ。ワタクシの名はフレイアース。アナタ方の入国を歓迎します」

玉座の前で出迎えたのは二十代後半くらいの女性。身に纏っているのは、高価な布を使った衣装。同じ神でもエストレイアとは対照的に露出を許さない格好は、全身で潔癖症を表しているかのようだ。その衣装だけで軽く一般家庭の数ヶ月の生活分の費用がかかるだろう。

「神……ですか？」

クリスティーナがおそるおそる訊ねると、フレイアースが頷く。

「その通りです。ワタクシは『ウィルフレド・イマ』を統べる神の
一柱。エストレイアから話は聞いていませんか？」

「まったく……」

「もう、あの子にも困ったものです」

呆れた顔で溜息をつく姿はまるで母親のようだ。

エストレイアと違い銀色の長髪だが、容姿はどこどなく似ている。
同じ神だからか、雰囲気もエストレイアと同じ感じた。

「どうして神がこんなところにいる？」

「どうしてと言われても……。管理すべき世界に拠点を置
くことがそんなに不思議ですか？ 我々は『ウィルフレド・イマ』
から眺めるだけが仕事ではありません」

「はっ。自分のことをヴァナデイスの連中に崇めさせてよく言う」

ヴァナデイス神殿国は神を崇める宗教国家。目の前の実在する神
を崇める信仰だ。本当にエストレイアから聞いていたような仕事な
ら態々そんなことをする必要はない。

魔王の言葉にフレイアースが不快な顔をする。

「ちょっと、クルス！」

「魔王、貴様……。フレイアース様を愚弄するのか！」

クリスティーナとルクソースが慌てて止めに入ると、フレイア
ースが片手を挙げて制す。

「そんなに神のことが憎いのですか」
われわれ

「憎む？ 何の話をしているんだ。憎む必要がどこにある、傍観者。私はただ、神の力をもっと良い意味で『ディオ・リナ』の役に立てられないものかと嘆いていただけだ」

「まるで子供ですね」

「最近私も丸くなったらしい」

心底疲れた顔でフレイアースは魔王を見る。

「妻があればなら旦那も同じですか」

「なんだと？」

フレイアースの呟きに魔王は眉を顰める。

「フェルミアのことですよ。あの乱暴娘の」

「フェルミアに会ったことがあるのか!？」

魔王は驚きを隠せない。神に会ったことがあるなど、フェルミアの口から聞いたことがない。

「五十年程前でしようか。一度この国を単身で襲撃してきました。当時の司祭たちを薙ぎ倒し、教会を半壊させ、更にワタクシの護衛の天使たちも全滅させられるという被害を受けました。死人が出なかったのが不思議なくらいです」

「何をやっているんだあいつは……」

「それからワタクシに剣を突きつけて国を造るにあたり必要なことを訊いてきました。ワタクシがヴァナデイスの創設者であることを知っていたようですね」

「……」

魔王国の創設はフェルミアから始まった。フェルミアが建国する

発端を作り、その立役者に魔王を選んだ。“国”というもののすら口々に解っていなかった魔王を、影で支えたフェルミアは魔王国の裏の立役者だ。

その建国を一から始めるにあたり、フェルミアの行動は全てとまでいかなかったが、手際が良かった。それは過去に国を一から創設した人物から指導を受けたからだ。目の前の神によって。

——やりたいことのためなら神にさえ喧嘩を売る。……何ともフェルミアらしいな。

合点がいつて魔王は自然と綻^{ほころ}ぶ。

「よく素直に教えたな」

「純粹に平和な国を造りたいという想いに、偽りはなかったようですから。それに、損害分の費用も置いていつてくれたのでこちらとしては特別損はしていませんよ。寧ろ警備体制について改めて考えさせられたので良い勉強になりました」

「平和な国……」

クリスティーナが魔王の横で静かに呟く。魔王自身もそんな昔から行動していたのかと感心している。

「フェルミアのことは懐かしいですが、そろそろ本題に入りませんか？」

本題。

魔王とクリスティーナがヴァナデイスを訪れた理由。

魔王がクリスティーナの方を見ると、頷いて返してくる。そして魔王はフレイアースに言った。

「ヴァナデイス神殿国に頼みたいことがある。私の——魔王の身体を破壊してほしい」

ヴァナデイスに来る前に魔王とクリスティーナで考えたことだ。

魔王の身体は争乱の原因になる。封印された魔王の身体が存在する以上、今回のシフィアのような国がまた出てくる。魔王自身が身体を取り戻しても同じこと。再び魔王国のような悲劇を、魔王がいる場所で引き起こすだけだ。それならば、原因となる魔王の身体を破壊してしまえばいい。誰かが魔王の力を手に入れる前に。・・・

・・現在ここにいる魔王には何の価値もないのだから。
魔王の言葉にフレイアースは驚く顔を隠さない。周囲の天使たちからも息を呑む感じがする。

「意外です、ね。身体を取り戻すかと思っていたのですが」
「こちらの身体に慣れてしまったからな。あの図体では生活が難しい」

「ふふ。それがあなたの答えですか」

フレイアースが口元を手で隠す。魔王の答えが余程おかしかったのだろう。

「わかりました。あなた方の提案を受け入れます。――ヴァナデイス神殿国は魔王の身体を破壊することに全力を尽くします」

「あっさり了解してくれたのは嬉しいが・・・・・・・・本当に良いのか？」

「勿論です。神の言葉に、偽りはありません」

自信を持ってフレイアースは言い放つ。その態度に魔王は少しだけ安堵した。

「しかし、その提案は簡単ではありません。問題は山積みです。問題を解決するにはやらねばならないことが沢山あります」

「そうだな。それにはまず――」

「ですから、話の続きは明日からとします。本日のアナタ方には旅の疲れを癒してもらいます。疲れた頭では出る案も出なくなりませんからね。それに、ワタクシ自身にも考える時間をください。問題が問題だけに、慎重にならねばなりません」

魔王の言葉を遮り、フレイアースは言った。

フレイアースの言う通り、魔王たちは疲れていた。エストレイアとの出来事もあるてあまり寝ていない上に、ヴァナデイスに到着した足でここへ訪れている。大事な話だからこそ、万全の態勢で挑まなければならない。

「わかった。続きは明日にしよう」

「感謝します。宿に案内させましょう」

フレイアースがルクソースに指示を出す。この国の地名と宿名を告げていたようだが、ヴァナデイスを今日初めて訪れた魔王には全く分からなかった。

ルクソースが律儀過ぎるお辞儀をフレイアースにしてから退室しようとする。その後ろを魔王とクリスティーナは続いた。

「クリスティーナ姫」

「は、はい。何でしょうか？」

いきなり呼び止められてクリスティーナは慌てて振り向く。

「少しだけ、二人きりで話したいのだけど、よろしいでしょうか？」

チラッと魔王の方を向く。

「行ってこい。宿で待ってる」

「はい。わかりました」

クリスティーナは目だけで、わかったと告げてフレイアースに返事する。

魔王は先に宿に帰るために退室した。

第14話：酒場

魔王は酒場に訪れていた。

酒場は商店の並ぶ通りと変わらぬ喧騒に包まれているが、それだけで煩いと感じない。街通りとはまた違った賑やかさがある。

フレイアースとの会話を終えた魔王は案内された宿に荷物を置いて、クリステイナーの帰りを待っていた。しかしいつまで経っても帰って来ないので、書置きだけ残して先に一人で酒場で一杯やろうと思ったのだ。

「はい、お待ちどうさん！」

人当たりの良さそうな酒場の主人がジョッキ一杯に注がれた酒と摘みをテーブルに並べる。

「注文は以上かい？」

「いや、連れが来てからまた注文するつもりだ」

「ははん。だからそんな軽めのものしか飲まないのね」

酒場の主人が鼻で笑うように言う。だが自然と不快感はない。

酒場の主人が言うのも無理がないことで、魔王の注文したものはアルコールのかなり低いものだ。客層からのんびり飲むより、豪快に飲む連中が集まるような酒場なのでそう思ってしまうだけなのかもしれないが。

「連れが来る前に出来上がってしまうわけにはいかないからな。・・・それにしてもここは随分と賑やかだな。来る前はもっと静かなものだと思っていた」

「お客さんはヴァナデイスに今日着たばかりなのかい？ だったら

無理もないな。俺もここに来る前はもつと堅かたえーイメージがあったよ。でもこの国は入国チェックが厳しいだけで、実際は他国から色んな連中が来てるから。ヴァナデイス特有の店もあるけどよ、そればかりだとこの国に来た商人とか何とかは居づれーだろ？ だからそーいった連中のためにウチみたいなのが認められてるってわけ」

「そうなのか」

「まー、出店のようにはいかねーからウチみたいのは少なーけどな。とりあえず、連れが来たらまた呼んでくれ」

酒場の主人がそう言って他の注文を受けに行った。

魔王は摘みを口にしながらクリスティーナの到着を待つ。だが、ここでも中々現れない。待ち切れなくなった魔王はジョッキに手を伸ばす。

実はいうと魔王は教会堂を訪れる前からこの酒場に目をつけていた。以前の魔王は甘いカクテルでもすぐに酔い潰れる程酒が苦手だった。しかし現在の魔王の身体は以前と違う。そして人間クルスの記憶から、かなり酒が強いと魔王は知っている。だから早く酒が飲みたいと思っていた。この瞬間は、酒も飲めないことを恥じていた魔王にとって、とても喜ばしい時だった。

そんな魔王の頭に直接声が掛けられる。

『それにしても良かったのでしょうか』

セシリーが心話で話しかけてくる。ジョッキに伸ばした手をつい止めてしまう。

「（問題ないだろう。クリスティーナとて、この程度で怒ったりはしない）」

『そちらではなく……』

「（……お前はまだ、私の身体を破壊することに反対なの

か?」

セシリーはヴァナデイスに訪れる前、魔王とクリスティーナの二人で出した答えにギリギリまで反対していた。他に方法がある筈です、と教会堂に入る直前まで訴え続けた。

セシリーの言い分は魔王にも解らないわけではない。セシリーは大戦後も単独で魔王を復活させる機会を窺っていた。約一年もの間、孤独に魔王を助け出すことだけを考えて生きてきた。魔王の身体を破壊することは、そんなセシリーの行動を裏切る行為である。それでも、魔王の身体の破壊以外良い方法が見つからないのも事実だ。魔王とて、自身の身体を破壊することを好き好んでいるわけではない。

「（私がやろうとしていることは、お前がやってきたことを無駄にする行為だということは分かっている）」

『そんなこと——わたくしは魔王様の側にいらればそれだけで・
・・・・』

「（だったら・・・・・）」

『それでも、自分で自分を殺すようなことをしなくても良いではないですか』

「・・・・・」

自分で自分を殺す。それは自殺に等しい愚かな行為。セシリーに言われて初めて魔王は気づいた。

——セシリーの言う通りだな。

“破壊”と“殺害”は同じ意味である。魔王の身体を破壊するということとは、魔王自身を殺害するということなのだ。魂として他の肉体で生きていても、シフィア城の地下で封印されている身体もまた魔王だ。魂がないからといって別人にはなれない。魂のない身体でも、それはその者自身なのだ。

魔王は自身の身体をいつの間にか“物”として扱っていた。争乱の根源、といって取り除くことしか考えていなかった。それは魔王という存在そのものを否定することで、強いては自分自身で死ぬ宣言をしたも同然。

大戦で失った同胞たちと奪った人間たちのために生き残ると誓った魔王。そのために自身の本来の身体を破壊する道を選んだ。それがどれだけ矛盾した行動か、今更になって思い知る。それに気づいていたからこそ、セシリーは訴え続けた。

しかし魔王は思う。
それでも、と。

「(どれだけ自分を傷つけてでも、私にはやらねばならないことがある)」

自分が傷つけた者、今もそれで苦しんでいる者のために。

「(だから、傍で支えてほしい。我が使い魔よ……)」
『魔王様……』

自分勝手なことを言っていると魔王自身でも思う。こんなことを一方的に言っても、セシリーが納得できる筈がないということも解っている。だが、今の魔王にはこれ以上セシリーに伝えられる言葉が見つからない。

本来、使い魔の主従関係でならば、魔王がセシリーに命令して終わる。従者である使い魔が主に反論することは普通であれば有り得ないのだ。しかし魔王とセシリーは使い魔の契約を交わしているが、それには当てはまらない。理由としては、魔王自身がそういったことを嫌う性格であることと、魔王とセシリーは“普通”ではないからだ。

魔王とセシリーは運命共同体。使い魔、と一言で済ませられない

強い繋がりを持っている。故に魔王はセシリーを縛りたくはない。常に一緒にいるのであれば、常に同じ考えの下で行動したい。

『・・・・・・・・』

返ってきたのは沈黙だった。セシリーも言葉を選んでいるのかもしれないが、いつまで経っても声を発することはなかった。

嫌な空気が漂う。沈黙が辛い。

早くクリスティーナが来ないものかと、魔王が思っている――

「おにーさん！ 何一人でしんみりやってんのっ！」

「うおっ！？ 何だ貴様！」

いきなり魔王に体当たりするような形で酒瓶を持った女が抱きついてきた。一人用の椅子に無理矢理尻を押し込んで魔王の横に座る。密着したことにより強調された胸が腕に当たるが、気になったのは一瞬だけ。それ以上に嗅ぎ慣れない香水と濃い酒の臭いが、魔王の鼻を刺激した。

「何だ貴様って、ディーさんに決まってるじゃないの！ ディーさんのこと知らないのー？」

「知るか。離れる酔っ払い！」

「きゃっははははっ！ おにーさん照れてるー！」

ディーと名乗った女は豪快に笑う。

よく見ると酔っ払い女は意外にも若かった。年齢は二十代の中間程。栗色の長髪をポニーテールに纏め、耳には剣のような十字架を模倣した銀色のピアスをしている。容姿も整っていて、服装も派手でも地味でもないカジュアルな装いだ。しかし酒を直接嗅いでいると錯覚される口臭や酔って真っ赤になった顔が全てを台無しにし

ている。

一生懸命引き剥がそうとするが、デューの力はこれもまた意外に強くて離れられない。

「デューさんは名乗ったぞー？ おにーさんのお名前はなんてーの？」

「酔っ払いに名乗る名などない！」

「なんだとー！？ デューさんの言うことがきけねーっての！？」

笑ったかと思えば次は怒り出した。

酔っ払いの扱いは慣れるものではない。どうしたものかと魔王が考えていると、デューが片手で顎を掴んでくる。思いも寄らない行動に魔王はされるがままに口を開く。そしてデューはその口に持っていた酒を流し込んだ。

「うんんんんんんん！」

酒瓶の口を口内に押し込まれているため喉に直接酒が流される。喉が焼けるように熱い。息ができない。突然の出来事で魔王は抵抗すらままならない。

どれだけ飲んだのか、酒の流れが止まり酒瓶が口から離される。同時に息を吸い込む。しかし、いきなり大量に空気を吸い込んだせいで魔王は咽^むせる。そして次には視界が歪んだ。見えるものの全てがぼやけ、魔王自身も体のバランスを崩してテーブルに倒れ込む。

「な、何を飲ませ、たん、だ………？」

うまく舌が回らない。人間クルスは記憶の通りであれば酒に強い方である。いきなり倒れる筈がない。

「ウォッカのストレートだよ？」
「？」

何を言われているか解らない魔王の頭に悲鳴のような声上がる。

『アルコール度数九十パーセントを超えるお酒ですよ！ それもストレートだなんて………！』

やっと声を出してくれた喜びと、セシリーの慌てた様子から不安な気持ちと混ざり合う。酒の知識に疎い魔王には何が起きているのかさっぱりついていけない。

「（そんなにきついのか？ セシリーは飲めるか？）」
『最初の一杯からストレートなんてとても無理です』

セシリーは酒に強い方だ。樽一杯の酒を平気で飲み干すフェルミアに最後まで付き合える程に。そのセシリーが無理だと言った酒を魔王は瓶一杯飲み干した。そう思った途端、激しく嘔吐く。それなのに吐ける気がしない。とにかく悪い循環が魔王の身体に起こっている。

「何故こんな、ものを………？」

ディーに訊ねるとニタニタと魔王を見下ろして言った。

「んー？ なんかね、おにーさん喧嘩して拗ねたような顔してたのね」

「喧嘩………」

「だから、嫌なことがあったらね。飲んで忘れる！ それで落ち着いたら仲直り！」

セシリーとの心話が読まれたのか、と魔王は咄嗟に考える。しかしすぐに考え直す。この酔っ払いにそれほど魔力は感じない。つまりそんな力量の持ち主でないということだ。酔っ払いにまで心配される程魔王は暗い顔をしていたらしい。

「これ、お友達に分。仲直りしたら一緒に飲んでね！　デイーさんからのサービスサービス♪」

どこから持ち出したのか、再び別の酒瓶をテーブルの上に置く。

「それじゃあ、そろそろおにーさんのお名前教えてくれるー？」

今日会ったばかりの相手に何を拘っているのだろう、と魔王は心の中で苦笑しながら答える。

「クルスだ。とりあえず、感謝しておく」

「……………クルスくんね。憶えた憶えた。じゃあ、またねー！」

名乗るとデイーは席を離れて行く。来るのも突然なら出て行くのも突然である。

デイーは離れたといっても店内の端を陣取った集団の元へ行っただけだ。デイーが行くと集団は笑顔で出迎える。どうやらあれがデイーの仲間らしい。少しばかり羨ましいと感じてしまった。

「(……………宿に戻ってから一緒に飲もう)」
『仲直りのお酒ですか？』

からかうように笑った声のセシリーが言った。

「（そうだな。もう一度話し合おう。お互いが納得いくまで）」
『魔王様………』

いつの間にか吐き気は失せていた。安心したからだろうか、代わりにドツと眠気が押し寄せる。

魔王はそのまま睡魔に身を任せた。

クリスティーナはフレイアースと二人きりで部屋にいた。大勢いた天使たちも退室し、ただでさえ広大な部屋が更に広くなった感じがする。

神と二人きりになったこの状況に、緊張するクリスティーナにフレイアースは笑い掛ける。

「ごめんなさいね、呼び止めたりして」

「いえ、そんなことはありません」

態々人払いまでして何の話だろう、と思いつながらクリスティーナはフレイアースの言葉を待つ。

「アナタは今後どうするか決めていますか？」

「え？」

「魔王の身体を破壊した後のことですよ」

突然の質問にクリスティーナは戸惑う。

魔王の身体を破壊した後は具体的に何をするかは決まっていない。目の前のことで必死になり、先のことを全く考えていないからというわけではない。クリスティーナと魔王には目標がある。

大戦の真実。その償い。

それが魔王と交わした約束。だが、漠然とし過ぎて具体的な計画に移れないのが現実だ。一年前の出来事であり、その傷跡も見える速さで消えていく。どこから手をつければいいのか判らないのだ。

「何も決まっていらないのですか？」

「は、はい……」

曖昧なことは言えず、クリスティーナは答えられない。

「何も決まっていないことは恥ずかしいことではありません。将来のことですから、安易な答えだけは出さないようにしてください」

「はあ」

フレイアースの意図が解らず、クリスティーナ混乱する。

「ですが、何かを成すためには安定した足場が必要になります」

「確かにそうですか——」

「ヴァナデイス神殿国に籍を置く気はありませんか？」

「!？」

帰る国と家を失ったクリスティーナには、喉から手が出るほどの提案だった。

しかし嬉しいと同時に疑問が浮かび上がる。クリスティーナは国を追われた立場だ。公式発表をしているかどうかは別にして、リブラークは今もクリスティーナを追っているだろう。そんなクリスティーナを国として迎えるのは、下手をすれば戦争に繋がる。そのリスクを負ってまでクリスティーナにヴァナデイスの国籍を与えるのは危険だ。

「そんなことをしたら……」

「アナタが心配するようなことは何ありません。我々の国には領地を追い出された貴族や帰る国を失った農民など、様々な人を多く受け入れています。……勿論、条件付きですが」

「条件？」

「領地を追われた貴族には栄えて頃に活かした知識を、帰る国を失った農民にはその国独自の作物の作り方を。そしてアナタにはその剣と魔術の腕を――ヴァナデイスのために使ってもらいます」

「？ この国の兵士として働くということでしょうか？」

「いいえ。アナタにはヴァナデイスを拠点とした『ディオ・リナ』の“勇者”になってほしいのです」

勇者。

その単語を聞いてもピンとこない。魔王を封印した時にはそう呼ばれたこともあったが、あのような戦いが現在再び起こるとは思えないし、思いたくない。それもヴァナデイスではなく、『ディオ・リナ』という世界規模となれば想像がつかない。

「ワタクシはヴァナデイスの指導者であり、『ディオ・リナ』を管理する神でもあります。その手伝いをしてほしいのです」

「その……具体的にどのようなことを？」

「生態の乱れを正したり、危険区域の検査をしたり、大戦のような戦争を事前に回避するようにしたり――と、ようは『ディオ・リナ』にとって良くないものを防いだり、直したりすることですね」

「戦争を回避することが出来るんですか！？」

「なるべく起こさせないようにしています。戦争は『ディオ・リナ』にとって痛手ですからね。そして起こってしまうえばワタクシは手が出せません」

「どうしてですか？」

「それが神としてのルールだからです。しかし、アナタは違う」

フレイアースは真剣な顔でクリスティーナを見つめる。

「『ディオ・リナ』で生まれ、生活しているアナタは別です。戦争が起きても最小限に抑えることが出来ます」

「そんなことが・・・・・・本当に？」

「ええ。そういった気配のある国は監視していますから、いつでも分かります」

フレイアースの言うことが本当だとすれば、魔王との約束も叶うかもしれない。『ディオ・リナ』を管理しているフレイアースに大戦で知っていることを尋ね、今後同じようなことを繰り返さないために動くことが出来る。事前に戦争を止めることが出来るのなら、大戦のようなことを起こさないように出来るのなら、やるしかない。

「・・・・・・・・やります。やらせてください！」

「良い返事です。――では早速、仕事をお願いできますか」

「今からですか？」

「すぐに出来ることですから」

フレイアースがクリスティーナに微笑み掛ける。

「魔王を討伐してください」

「えっ・・・・・・・・」

クリスティーナは絶句する。

何を言われているのかすぐに解らなかった。

「・・・・・・・・何を、言って・・・・・・・・」

「魔王の身体を破壊することがアナタと、魔王自身のお願いですよ
ね」

「そ、そうです！　それがどうして……！！」

「身体とは何でしょう、クリスティーナ姫」

フレイアースが諭すように言う。

「身体はそれだけでは意味がありません。そこに魂がなければただの死体も同然です。現在の魔王は封印された状態とはいえ、まだ生きています。何故か？　それは魂がまだ、身体と繋がっているからです。つまり、魔王の身体だけ破壊しても何も変わりません」

「しかし！」

「それだけではありません。……例えば、魔王の身体を魔力ごと完全に消滅させたとしましょう。それでも、大戦時にシフィア王国を滅ぼしかけた魔王が魂だけでも生き残っていると人々が知れば、一体どうするでしょうか？」

「そ、それは……」

「魔王は莫大な魔力の持ち主で有名ですが、同時にあらゆる魔術を持つ者として畏怖されています。その知識を巡って魔王の魂は強者によって奪い合いになるでしょう。今の魔王は弱体化していて、一般の傭兵でも倒すことが出来るのですから」

フレイアースの言っていることに何一つ反論できない。何故なら、フレイアースは何も間違ったことを言っていないのだから。

「――以上のことから、魔王がどれだけ危険か、賢いアナタなら解っていますよね」

「わ、わたしは……」

震えた声で何か言おうとするが、言葉にならない。フレイアースを納得させる答えが見つからない。

「魔王も、あの大战の犠牲者です！　大战で彼も大切な人を失いました。それを二度と起こさないために、こうしてわたしと共にここに来ました！」

「それが魔王の意志であっても、世界の意味ではありません。その意志さえも魔王が自身の身体に戻るための計画と言い切れない保障はありますか？」

「・・・・・・っ」

クリスティーナは魔王と共にあることを誓った。

自分たちの罪の償いのために。

それなのに、フレイアースを説き伏せる方法がない。

クリスティーナと魔王に置かれた状況は最初から最悪だった。世界に訴えかけても、クリスティーナと魔王には世界中の人々を説得させる人望がない上に、それはとても現実的な案とは言えない。言葉で伝えられないのなら、行動で示すしかない。しかし、その行動の前に出された選択肢は、現実が残酷であると告げる。

「世界の敵を討ってください。我々の味方であるために、人類の敵にならないために――勇者よ」

第15話：銀色の刃

魔王は頭を押さえながら、夜のヴァナデイスの街を歩いていた。

同じ夜でも、宿を出た頃にはまだ露店などが並んでいたが、今は店どころか人通りも少ない。街の住民は皆、屋内で騒いでいるか寝ているかのどちらかだろう。魔王は酒場で大半を寝て過ごし、店主に迷惑がられたのでこうして外に出てきたのだ。

魔王は窓に映る自分を見る。火照った顔に、片手には酒瓶を持った姿は、酔っ払い以外の何者でもない。酒が飲めるようになって浮かれた結果がこれでは格好がつかない。魔王としては、クリスティーナとほんの少しでも酒を飲み交わせればそれで良かった。

元々、魔王には酔い潰れる程飲むつもりなど最初からない。ここは得体の知れないヴァナデイスの本拠地。“魔王の身体を破壊する”という約束から友好を築いたとはいえ、何もかも信用するわけにはいかないのだ。

しかしクリスティーナは現れなかった。

『クリスティーナ姫はもう宿で休まっているのでしょうか？』

「（・・・・・・・・かもしれんな。昨日は碌に眠っていないから疲れているのだろう）」

セシリーの疑問は有り得る話だった。魔王が酒場であっさり眠ってしまったのも、案外その影響なのかもしれない。

だが、と魔王は思う。

——疲れていたとはいえ、書き置きを無視するようなことはないと思うが・・・・・・・・気づかなかった可能性も否定できない。

考えてから魔王は、それこそ有り得ないと感じる。書き置きに気づかなくても、魔王がいないことはいくらなんでも疑問に思う筈だ。疲れていたから寝て待ってしよう、と安易に出来ない場所だという

ことは、クリスティーナも解っている。

先程あっさり酒場で寝てしまった自分を棚に上げて魔王は考える。未だにフレイアースと話している可能性やどこかですれ違いになったのかもしれないと、考えられる予想をしながらも、何故か納得出来ない。今更ながら妙な胸騒ぎを覚える。

道を曲がる。表通りからあまり目立たないところに出る。そこは人通りもなく、街灯も少ない。

魔王は宿へ向かって早足で進む。

すると、魔王のいる場所が変わった。それに気づいた魔王は足を止める。

日常から非日常へ。ありふれた街から戦場へ。

変わったのは、魔王の周囲の空気。

平穏な日常に似つかわしくない殺意が魔王を取り囲む。

『魔王様』

「(わかつている)」

不可視の殺意は複数の人の形となって魔王の前に現れた。通路を固められ、退路を断たれる。

それらは汚れない純白のコートを纏っていた。フードを深く被っているため性別も顔も判らないが、こんな薄暗いところにまで目立つ白を纏った潔白な襲撃者に心当たりは一つしかなかった。

「……ヴァナデイスの刺客か？」

襲撃者は答えなかった。代わりに短剣を構えて応える。

魔王も手にしていた酒瓶をコートのポケットに捻じ込み、両手に剣を握る。

『どうされますか？』

「（正面突破しかないだろう。下がるわけにはいかない）」

『表通りに行けば、関係のない住民に被害が蒙（こうむ）ることになるからです。それに……』

「（あそこは広くて目立つ。標的になりやすい）」

広い場所は今の魔王には不向きだ。万が一魔術で遠距離から攻撃されれば、障害物の少ない表通りでは対処が出来ない。それならば、狭い道で斬り合っていた方がまだ有利だ。

本来、この場合は真っ先に人通りの多い場所に出るのが一番である。現在魔王を囲っているような襲撃者は目立ちたくない理由から、人目を避けた場所を選ぶ。それならば、人目の多い場所へ移ればいい。

しかし、ここはヴァナデイス神殿国。フレイアースという実在する神を崇めた宗教国家だ。魔王を神の反逆者だと言えば、病的に信仰している国民は進んで協力するかもしれない。碌な戦い方も知らない住民を相手に、魔王は手を出すことは出来ない。そうなれば必然的に物量で押さえられる。戦いに巻き込みたくない気持ちと、そういった連中の出現する恐れから、敢えて表通りに出ない道を選んだ。

とはいえ、地理的にも不利な魔王は無垢な住民を盾にされなくても、追い込まれる可能性がある。襲撃者は、魔王を行き止まりの道へ誘導することも、仲間を先回りさせることも出来るのだ。ここは少しでも早くクリスティーナと合流するしかない。

それにしても、と魔王は思う。

——襲撃のタイミングがあまりにも早過ぎる。最初からこうするつもりだったのか……？

それならばクリスティーナを引き止め、魔王と離させたことにも納得がいく。それに最初から始末するつもりだったのならば、今夜襲うのが確かに一番だ。まだ魔王はヴァナデイスのことを完全に解ったわけでもない上に、長旅で疲労が蓄積している。本当は寝込み

を襲うべきだろうが、中々宿に戻らない魔王に痺れを切らしたのか
もしれない。

一応、襲撃者がヴァナデイスでない可能性も視野に入れて目的を
確認する。

「（まずはクリスティーナと合流する。難しいだろうが教会堂まで
サポートを頼む）」

『畏まりました』

先程まで酔っていた筈なのに、自然と頭は冴えていた。不本意と
はいえ、やはり魔王にとってこちらが日常らしい。

敵の数は五つ。正面に二人、背後に三人。

まず最初に、後ろの内の一人が動いた。無防備な背中を見せる魔
王を後ろから串刺しにするつもりなのだろう。それを魔王は振り向
くことなく横に体をずらすだけで躲す。^{かわ}逆に無防備な背中を見せた
襲撃者の後ろを、魔王は正面にいた二人目掛けて蹴り飛ばす。

今のはまさにヴァナデイスに来る前、魔王とセシリーがクリステ
イーナにやられた戦法だった。攻撃を予測し、尚且つそれを避けて
相手の隙を作る。実際に正面の襲撃者たちは、突然飛んできた仲間
の対処で隙が生まれた。やった方から見ると、やられた方はとても
間抜けに感じられる。こんな醜態を^{しゅったい}一度でも晒したのかと思うと、
頭痛がしてくる。

魔王は好機を逃す前に正面に駆ける。慌てて襲撃者たちは短剣を
横に振るうも、魔王はこれも容易く躲す。代わりにお互いの剣を真
横に振るったせいで、襲撃者たちは自分たちを斬りつける結果にな
った。

斬り合った襲撃者たちは苦しみ、動きが鈍る。その隙に魔王は襲
撃者たちの間をすり抜けた。すぐに残りの襲撃者が追い掛けてくる。
魔王は慣れない道を通りながら、教会堂の方へ向かって走る。知
らない道なので合っているのかさえ判らないが、背後数メートルの

距離から追い掛けてくる襲撃者たちがいるため、止まるわけにはいかない。途中で待ち伏せしていた襲撃者と何人かすれ違ったものの、軽く受け流して難なく逃げ切る。昼間のクリスティーナと比べれば、襲撃者たちは雑魚だ。このまま行けば、うまく教会堂に着けるかもしれない。

だが、そんな都合の良いことなど訪れる筈がなかった。

「――行き止まり!？」

魔王が逃げ切った先には巨大な壁が立ちはだかっていた。魔王の身長は何倍もある壁はとても昇れる高さではない。

戻ろうとしたところで、今度は遠くから足音が聞こえた。数は最初より明らかに多い。足音だけですぐ近くまで襲撃者たちが迫ってきているのが判る。

魔王は咄嗟に積まれた木箱の物陰に隠れる。長年放置し続けたのか、汚れが酷く、臭いも最悪だ。それでも魔王は構わず息を殺して潜む。

やがて、足音が近くで止まる。

「行き止まりだぞ!」

「魔王はどこだ!？」

「さっきの道と逆方向だったか……?」

「仕方がない。戻って仲間と合流しよう」

襲撃者たちが立ち去ろうとしている様子に、魔王は心から安堵する。

しかし、ここで足音も遠ざかって行く中、衝撃の音が響く。

それは、ビンが割れる音。

静寂とした場であるが故に、その音はより大きく響き渡る。

魔王はコートを見ると、戦闘中に解れたのかポケットが破れてい

た。そこに入れていた酒瓶が落ちて割れたのだ。ディーから貰った酒瓶は割れながらも地面を濡らしながら転がり、『ジン』というラベルが魔王を虚しく見つめる。

足音が戻ってくる。今度は先程と違い、余裕をもってゆっくりと歩いて。

待っていても、結果は良い方向へはいかない。それならば、と覚悟を決めて魔王は木箱の陰から飛び出た。

——追い詰められる前に斬る……！

それでも、襲撃者へ飛び掛かる前にあっさり剣が手から弾かれる。剣は二本とも魔王から離れた場所に転がっていった。

「くっ……」

「ここまでだ、魔王」

襲撃者たちの前には魔法陣が浮かんでいた。

黄色に輝く五芒星の魔法陣。煌々と発光したそれがヴァナデイスの魔法陣なのだろう。

ヴァナデイスの魔法陣を見ることがも悪くないが、問題はそこではない。今まで追い掛けてくるだけで、碌に攻撃魔術を使わなかった襲撃者の対応が急に変わったことに、魔王は背筋が寒くなるのを覚える。

「今まで散々逃げてくれたな。ここなら、街に被害が及ぶことはあるまい」

襲撃者があっさり答えを聞かせてくれた。

魔王は切羽詰る。剣戟けんげきのみならば、魔王は負ける気がしなかった。だが、魔術を使われれば話は別だ。現在の狭い場所で避けることは疎おろか、魔王には魔術を防ぐ術すらないのだ。

魔術が使えない身体に、セシリーの補助も肉体の部分強化と、盾

にするほど大きな魔力ではない。使っている剣も、クリスティーナのような魔術的に強化されたものでないため、弾くことも受け止めるも不可能だ。無理に受け止めれば、剣の方が折れる。そんな剣すらも、今は魔王から離れた地面に転がっている。

襲撃者の魔法陣の輝きが増す。

——ここまでなのか。ここで終わるのか……！？

魔王は歯噛みしながら、これから来るであろう攻撃に目を閉じる。せめて足掻けるだけ足掻こう、と心の中で誓う。

『……魔王様っ！』

セシリーが叫ぶ。

最後まで巻き込んで済まない、と思いながら魔王は攻撃の衝撃に構えた。

その直後、空気が攻撃魔術の衝撃で震える。目を閉じていても、刺すような閃光が魔王を襲う。しかし、いつまで経っても痛みを感じることはなかった。

どういうことだ、とおそるおそる目を開ける。

「……な、なんだ……？」

“それは”、いつの間にかそこにあった。

魔王と襲撃者の間に一本の剣が突き刺さっていた。剣、と表現するには不適切かもしれない。それには、掴む柄もなければ、鏢も付いていない。ただ銀色の刃がそこにあるだけだ。

クナイのような形状の傷一つない刃。人間一人分程の大きさの刃に、この場の全員が見惚れる。

その全身刃が魔王を守るように現れた。

魔王はわけが解らなかった。このようなものは、これまで見たことも聞いたこともない。襲撃者側も何が何だか解らず混乱している

ようだ。

——これは一体何で、何の目的で現れたのか。

おそらく、この場にいる全員が思っていることだろう。

こちらの心情に応えるように銀色の刃が浮く。その切先が襲撃者の一人に向けられる。

そして、貫いた。

「あ………」

心臓を貫かれた襲撃者は短い言葉を漏らして絶命した。

最初からそこに穴があったかのように開いた傷跡から血が流れる。

それは刃で貫いたとは思えない鮮やかな切傷だった。死体が倒れ、その血で地面を少しづつ汚す。全員がそれを静かに眺めていた。

あまりにもあっさりした殺人。何もかもいきなり過ぎて、誰もが思考が追いつかない。

やがて、襲撃者の一人がぼつりと震えるように呟く。

「……断罪の“銀”」

その言葉を聞いた瞬間、襲撃者たちから絶叫が上がる。

叫ぶ声を合図に銀色の刃は殺戮を開始する。

逃げる者の背中を、立ち向かう者の心臓を、許しを請う者の顔を——銀色の刃は容赦なく鮮やかに貫いた。一瞬で貫いた刃は返り血を浴びることなく、美しいままの銀色の光沢を放っている。大勢いた襲撃者は、たった一本の刃に誰も傷をつけることが出来ないまま死んでいった。

襲撃者が全滅すると、今度は魔王に切先が向けられる。今、目の前で起こった殺戮に魔王は足が竦む。

——ここで、死ぬのか……。

死んだ襲撃者の一人が残した銀色の刃の名前は——断罪の銀。

その名前を思い出して、ついに来るべき日がきたのかもしれない、と魔王は思い始める。いくら魔王が本気で償うために何かしようと奮闘しても、結局認められるとは限らないのだ。だから、裁かれる日が償う前であっても不思議ではない。魔王の都合などお構いなしだ。都合が考慮されない程、魔王は人々に恨みを買っている。鮮やか過ぎる殺戮を目の当たりにして、負の感情が渦巻く。

『魔王様っ！　しっかりしてください！』

そんな魔王を正気に戻してくれたのはセシリーだった。活を入れるように叫んだセシリーの声に、自分がどれだけバカなことを考えていたのかを自覚させる。

返事代わりに魔王は転がっていた剣に飛びつき、素早く構える。

——断罪だろうが贖罪だろうが、ここで死ぬわけにはいかない！

『銀』はいつまで経っても動かなかった。それでも、魔王はいつでも動けるように神経を尖らせる。

そこで魔王はおかしなことに気づく。『銀』にとって魔王が武器を拾うのを待つ必要はない筈だ。あったところで魔王が勝てる可能性の方が低い。況してや、殺すつもりならば、最初に襲撃者からの攻撃を防ぐ必要すらない。

やがて、『銀』は切先を少し上げ、魔王の背後の壁に突貫する。

先程までと違い、派手に激突した『銀』は壁を粉碎した。そして、舞い上がった砂埃から飛び抜け、『銀』は遥か上空へと消える。暫く消えた方角を眺め続けたが、戻ってくる様子はない。

——何だったのだ。

現れるのが突然ならば、消えるのも突然だった。

『銀』が砕いた壁を見ると、人影が映った。砂埃が晴れる。

そこにいたのは――

第16話：銀色の刃（2）

クリスティーナは決断した。

『ディオ・リナ』の“勇者”になってほしいという願いから、何の疑いなく手を差し伸べるフレイアースを見返す。その表情はこちらが提案を拒否しないと信じた顔だ。それもその筈で、クリスティーナにとっても、それは喉から手が出る程の条件だからだ。それでも、クリスティーナの返事は決まっていた。

「お断りします」

クリスティーナの言葉を聞いた途端、フレイアースは疲れたような顔をして手を引っ込める。心底期待外れと言いたげな目を向けながらフレイアースは言う。

「残念です。アナタはもっと賢い子とっていましたがのだけれど」「本当に賢ければ、国を乗っ取られるようなことにはなりませんよ」「……………どうして、そこまで魔王に拘るのかワタクシには分かりません。カレはアナタにとって仇に等しい存在でしょう？ 憎くはないのですか？」

フレイアースは然も当然の疑問を投げかけてくる。

クリスティーナ自身も、クルスの正体を知った時は憎くて仕方がなかった。殺そうともした。しかし、そこでエストレイアに止められ、魔王の大戦時の出来事を見せてもらった。

そして、全ての認識の違いに気づく。自分がどれだけ自己中心的な愚かしい人物だったかを――。

だから、今は自信を持って言える。

「そんなことはどうでもいいわ」・・・寧ろ、魔王だつて『ディオ・リナ』に生きてる住人の一人じゃない。それなのにどうして排除することに拘るのよ!？」

「あんな規格外の存在を許容できる程、現在の『ディオ・リナ』は安定していません」

フレイアースが片手を挙げる。

すると、壁際の床から五芒星の魔法陣が展開される。数え切れない程の魔法陣が黄色く輝くと、初めてこの場を訪れた時のように天使たちが現れる。更にそれ以外の場所からは、ルクソースとはまた違う司祭服を纏った人物が大勢沸いてきた。

現れた全員が殺意を向けてクリスティーナを捉えている。

「最後のチャンスを上げましょう。アナタの力を『ディオ・リナ』のために“使うか”“使われるか”、どちらか選びなさい」

「どっちもお断りっ!」

クリスティーナは右手に剣を握ると、左手に魔法陣を展開する。いつもと違い、出現させた魔法陣は巨大だった。

自分よりも二倍はある大きさの魔法陣。月と太陽を表した魔法陣が一つ、また一つと増え、徐々に小さなものとなっていく。最終的に五つまで出てきた魔法陣が、クリスティーナを包み込む程強く輝き、突き出した掌だけでなく足元にも陣が大きく浮かび上がる。

それを見たフレイアースが声を張り上げる。

「こんな場所で大規模魔術!? 止めなさいっ!」

フレイアースの声に反応して天使たちが慌ててクリスティーナに襲い掛かってくる。

大規模魔術はその名の通り、大規模な術式と魔力で発動させる魔

術のことだ。発動させれば、何が起こるか計り知れない。だが、決して良いことばかりではない。大規模魔術は、普段の魔術と比べて桁違いの威力を出せる代わりに、発動までに掛かる時間が極端に長い。そのため、準備が整うまで術者は無防備な状態となる。

本来ならば、単身で行うべきではない魔術。それを敢えて使った理由は――

「……魔術、解除――」

天使を出来るだけ多く近づけてから、クリスティーナは展開していた大規模魔術を解除した。

正確には、発動途中の魔術を切り離した。

大規模魔術を発動させるためには莫大な魔力が必要だ。その魔力を断つことなく術式を切り離した場合、途中まで作り上げていた魔術は決して無かつたことにされるわけではない。

空中に浮かんだ、莫大な魔力を制御する術式を組んだ魔法陣が崩れる。制御が利かなくなったため、発光した魔法陣の線から白い火花が散る。

「吹き飛べっ！」

五つの魔法陣が砕け散り、一斉に爆発した。

術式につき込んだ魔力分だけの威力が、魔法陣を中心に“クリスティーナ以外に”広がる。爆発とその余波に巻き込まれ、周囲にいた天使と司祭たちが吹き飛ばされる。爆発によって生まれた煙がフレイアースたちの視界からクリスティーナを覆い隠す。

その隙にクリスティーナは“本命”の魔術を発動させる。右手に握った剣から魔法陣が浮かび上がり、刀身を白くする。魔術によって強化された剣を構え、天井を睨む。

――憶測でしかないけれど、今いる場所は地下。出口は塞がれて

いる。

教会堂からルクソースの案内で入れられた狭い部屋。おそらくあそこで感じた浮遊感は、地下に部屋ごと降りたから生じた、とクリスティーナは予想する。その憶測通り地下ならば、壁を破壊したところで地面しか出てこない。元来たところから出ようとしても、あの狭い場所にそのまま閉じ込められる可能性がある。

——それなら、天井を破壊して出る！

そのために脱出の際に傷害となる天使と司祭を爆発で遠ざけ、発生した煙で自身を覆った。

クリスティーナは剣を天井に向けて下段から勢いよく振り上げた。白く発光した刀身が剣から離れ、“飛ぶ斬撃”^{さんげき}として天井にぶつかる。激しい衝撃音を響かせ、埃が舞って新たに視界が埋め尽くされる。そして、このまま穴の開いた天井から外に出る——というのが、クリスティーナの計画だった。

しかし、現実とは計画と違った。

「うそっ!？」

視界が晴れる。

そこに映ったのは、ほんの少し傷が付いた天井。元々あった汚れの一部と勘違いしてしまいそうな小さな傷跡だ。斬撃をぶつけた場所には、その程度しか攻撃を加えることが出来なかった。

予想外の展開にどうするか迷うクリスティーナに、今度はまだ晴れきっていない周囲の煙から攻撃が飛んでくる。

「……………っ！」

それは蔓^{つる}のように細い線だった。

クリスティーナをそれを剣で斬り、魔術で弾くも、視力が働かないせいですぐに捕まる。自分を隠すために発生させた煙を、良い様

に相手に使わせてしまったようだ。蔓は両腕に絡み付き、やがて地面からも現れて両足も束縛する。

煙が完全に晴れると、クリスティーナの周囲には少し離れた場所で司祭たちが屈み込んでいた。改めて見るとクリスティーナの立つ地面に黄色に輝く五芒星が浮かび上がっている。どうやらこの魔法陣を司祭たちが形成してクリスティーナを拘束しているようだ。更にその後ろには各々の武器を構えた天使が待機していた。拘束を破ろうものならば、すぐにでも襲ってきそうな雰囲気だ。

「――満足しましたか？」

縛られたクリスティーナを冷ややかな目でフレイアースは見る。最初と同様、余裕が感じられる。

「対策は講じてあります。……昔のフェルミアの襲撃には大変勉強させてもらいましたので」

「会ったこともないし亡くなっている人のことを悪く言いたくないけど――フェルミアさん、憎むわよ……」

最早負け惜しみでしかないクリスティーナの言葉をフレイアースは鼻で笑う。

「最後の最後まで運の無い方ですね。これも運命でしょうか」

「こんな運命――受け入れられるわけないでしょう！」

クリスティーナはもがくも、手足を束縛する蔓が切れることはない。魔術を展開しようとしても、うまく魔力を使えない。魔術を阻害する何かが蔓にされているのだろう。

何をしてでも無駄だと解ったクリスティーナはフレイアースを睨む。

「わたしをどうするの？ 殺すなら、さっさと殺しなさいよ」
「そんな現実逃避、アナタに許される筈がないでしょう？」

現実逃避。死ぬことは、まさにその通りであることをクリスティーナは解っている。だから頑張っ^ててここまで来たのだ。
フレイアースがクリスティーナに近づいてくる。

「それに、言いましたよね。アナタの“力”は『ディオ・リナ』のために使ってもらいます」

フレイアースがクリスティーナに触れ合えそうな場所まで近づいてくると、眼前に手を翳^{かざ}す。突き出された掌から淡い光が浮上し、虜にする。眼前にあるからというわけでなく、何故かその光源に目が惹きつけられる。

やがて、意識が恍惚となる。視界が歪み、思考が掻き乱される。脳の中を直接弄^もられている感覚に陥る。自然と不快感はなく、寧ろ脳内がクリアになっていく気さえする。

——わたし、何してたんだっけ……？

唐突に、何をしているのか、何をしていたのか分からなくなる。ここはどこで、何のために来たのか思い出せなくなる。どうして拘束されているのか理解が追いつかない。

——シフィア——大戦——リブラーク——神——天使——ヴァナ
デイス——

漠然と単語が思い浮かぶ。

しかし、意味を見出せない。

——クルス——魔王——

最後に出てきた二つの名前に意識が留まる。

だが、これも解らない。

——なんだろう。とても大切なことを忘れている気がする。
そう思ってから、急に思考が切り替わる。

視界が激しく揺れ、尻餅をつく。先程までフレイアースが立っていた場所に、人一人分の大きさの刃が突き刺さっていた。その衝撃で拘束が解けたのだ、と解った途端に思い出す。

「わたし、さっきまで何考えて………」

クリスティーナはついさっきまで考えていたことに寒気を覚える。大切なことを――決して忘れてはいけないことを思い出せないでいた。

その事実にした今、自分が何をされかけていたのかクリスティーナは理解する。

――記憶を消されかけていた………？

『ディオ・リナ』のために力を使うとは、記憶をフレイアースの都合の良いように書き換えて働かせるという意味だったようだ。普段なら違う、と否定も出来ただろうが、相手は神だ。クリスティーナの知らない術を使っても不思議ではない。

「――どうしてこの場所に『銀』が!？」

フレイアースの言葉で現実に戻る。未だにぼうっとする脳を奮い立たせ、慌てて立ち上がりながら眼前の刃を見る。

刃は、銀一色の光沢を放ち、汚れすらない。剣のように掴む場所がない刃は、投擲用の武器かと思っただが、いくらなんでも投げるには大き過ぎる。

しかし、見上げると、クリスティーナの攻撃にビクとしなかった天井に綺麗な穴が出来ていた。目の前の刃の大きさと一致する鮮やかな斬り口から、疑いようがなかった。

この銀色の刃は、何者かによって投擲されたのだ。

――それにしても、一体誰が？

フレイアースを狙った襲撃だとしても、あまりにもタイミングが

良過ぎる。どう見てもクリスティーナを助けたようにしか見えない。現に、銀色の刃が突き刺さった場所は、司祭たちによって施された魔法陣を正確に貫いている。

銀色の刃を投擲した者はどう動くのか、と天井の穴や周囲を見ても一向に行動する気配を見せない。代わりに、地面に突き刺さった刃がひとりでに浮上した。

「浮いた!？」

銀色の刃が重力を無視してクリスティーナのすぐ上に浮遊する。フレイアースとクリスティーナの間に浮かぶ刃は、やはりこちらを守っているように感じられる。

それを見たフレイアースが苦い顔をする。

「『ディオ・リナ』の伝説が何故我々の邪魔をするのですか。目的は一体何です!？」

銀色の刃はフレイアースの問いに答える前に、小さく旋回する。そして、

「えっ——」

クリスティーナを荷物ごと刃に引っ掛け、大きな切先を天井へと向ける。

「ちょ、ま——」

って、という言葉は最後まで続けられなかった。

クリスティーナの意味とは関係なく、銀色の刃は天井に向かって突貫する。クリスティーナが最初の突入時に開けられた穴に通るよ

う器用に進み、地上に飛び出す。

銀色の刃は地上から百メートル程離れた上空で高度を止め、そのままヴァナデイスの街の空を飛行する。

——わああ、綺麗……。

今まで体験したことのない高さで飛んでいるクリスティーナは、恐怖よりも先に感動を覚える。その理由は眼下にあった。

ヴァナデイスの夜の街は賑やかな昼間と違い、とても幻想的に見えた。街の道々を照らす街灯や家内から漏れる光が、所々散らばっている。光源は火を熾したり、魔術的に明るくしたりと様々だろう。そんな当たり前の光景も、上空から眺めているせいか、その景色はまるで地上に星が現れたかのようだ。

現在の状況を忘れてしまうくらいの景色も、次第に高度が下がることで消えていく。

地上に降ろすかと思いきや、銀色の刃は路地から少し上がった場所を暫く旋回する。最初程ではないが、それでもまだ高い。やがて行き止まりの壁に到着し、やっとのことで地上に降ろされる。

嬉しくも少々残念な気持ちを残し、助けてくれた刃を見上げる。

「助けてくれてありがとう。お陰で助かったわ」

お礼を言うも、銀色の刃は反応を示さない。

「……言葉、通じてるのかな？」

そんな疑問を抱いていると、銀色の刃は唐突に壁に向かって勢いよくぶつかった。教会堂から脱出した時とは違い、強引な破壊を行う。そして、土煙が起った場所から遙か上空へ飛んでいってしまう。最初と比べて何故か大きく見えた銀色の刃を、いつまで眺めても戻ってくる様子がない。

「一体何だったんだろう……」

呟くも、答えは出てこない。代わりに、破壊された壁の向こうから人の気配がした。

クリスティーナは剣を構える。先程のような後れ^{おく}を取らないよう、相手の動きを慎重に見やる。

そして、土埃が晴れた場所からは見知った人物が現れた。

「クルス!？」

「クリスティーナ!？」

同時に声を上げる。

この状況にクリスティーナは困惑する。クルスの方も同じ反応だった。

「ど、どうしてここに？」

「そちらこそ、どうしてこんな場所にいる。うまくフレイアースから逃げ切れたのか？」

その言葉からクルスにも何かあったようだ。

クルスの質問に答えたくはあったが、話が長くなる上にクリスティーナ自身整理がついていない。だから、今言えることは――

「……何が何だか」

そう言うのが精一杯だった。

第17話..墮天使

「――攻撃、来るわ!」

「ちいっ!」

クリスティーナの言葉で、魔王は反射的に横に飛んだ。

すると、魔王が立っていた場所に光球がいくつも通り過ぎ、そのまま直進にあった木々に直撃する。木々は根元ごと薙ぎ倒され、その場の環境を一瞬で変える。あれが魔王かクリスティーナに当たれば、痛いでは済まない。

「隠れるのはやっぱり無理ね」

「厳しいが、走り続けるしかあるまい」

光球から逃れ、魔王とクリスティーナは駆け出しながら攻撃が来た方角を見やる。

少し離れたところから、緑の鎧を着込んだ天使――権天使が大勢詰め掛けてくる。おそらく上空にも何体かいるだろうが、木々の葉によって上からこちらが直視できない。つまり、後ろの天使たちを振り切ればうまく逃げ切れる可能性があるというわけだ。

――都合良くいけば、だが。

魔王とクリスティーナは、ヴァナデイス神殿国内でフレイアースの手の者に襲撃を受けながらも、何とか国外へ脱出してきた。襲撃者たちからは逃げ^{おお}遂せたものの、国を出た途端天使たちがやって来て現在に至る。

権天使自体はそれ程脅威的な存在ではない。一体一体の実力は、飛べることを除いては人間の兵士一人と然程変わらず、魔王でも簡単に退けられた。

しかし、それが何十体となれば話は別だ。飛べることによって機

動力もあり、ヴァナデイス周辺の地理では明らかに天使側に分がある。倒しては逃げ、隠れては見つかり、と繰り返ししている内にそれだけで何時間も経ってしまった。時間が経った分だけヴァナデイスからも距離を取ることが出来たが、天使たちの追っ手は一向に減ることはない。

今はうまく森の中でやり過ごしているが、いつまでも続かないことは魔王だけでなくクリスティーナにも解っていた。魔王とクリスティーナは休むことなく逃げ続けているため疲労が激しい。力尽きて捕まるのは時間の問題だった。

「今度は上——数が多い!?!」

「……………っ!」

慌てて上空を見ると、魔王とクリスティーナを覆い隠してくれていた木々の葉の隙間という隙間から、強い光が差し込んでいた。魔王は眩しくて目を細める。

その間、クリスティーナは両手を掲げて魔法陣を展開する。展開が完了すると同時に、空から光球が雨のように降り注いだ。

「ぐっ……………!」

クリスティーナが光球の衝撃で苦悶の声を漏らす。

光球は何度も魔法陣に張った障壁に当たり、その衝撃の強さからクリスティーナの足場が陥没する。よく見ると、光球は魔王とクリスティーナだけでなく、全く関係ない場所まで降っている。どうやら、先程の権天使たちの攻撃を見て当てずっぽうに光球を乱発しているようだ。上空から乱発された光球は木々に直撃し、次々に地面に叩き付けられる。

やがて、豪雨のような光球の攻撃が止み、魔王とクリスティーナの周りには何もなくなっていた。そこいらにあった木々が碎かれ、

地面に生えていた草も抉られ、周囲一帯が荒地と化している。

そして、木々が消えた荒地に権天使たちが踏み込んでくる。魔王とクリスティーナを囲み、完全に逃げ道を塞がれる。更にその上空には――

「フレイアース！」

『ウィルフレド・イマ』の神が魔王とクリスティーナを見下ろしていた。その周りには五体の蒼い鎧を纏った天使――能天使がフレイアースを護るように控えている。

「やっと足を止めてくれましたか。待ちくたびれましたよ」

「神自ら戦場にお出ましとは――今日は厄日だな」

「命日、の間違いでしょう？ クリスティーナ姫をこちらに引き渡してくれのであれば、もう暫く延命させてあげても構いませんけれど」

フレイアースは余裕な態度で魔王を見下す。みくだフレイアース自ら出てきたことから、勝つことに確信があるのだろう。

そんな神を他所に横目でクリスティーナに声を掛ける。

「人気者なのだな、クリスティーナ」

「茶化さないで。・・・・あんなの趣味じゃないわ」

魔王とクリスティーナは剣を構える。示し合わせたわけでもないのに、お互いにやるべきことが解っていた。

フレイアースはそれを、まだやるのか、といった疲れた顔で見る。両者はすぐには動かない。動いた瞬間が勝負だからだ。

この場に緊迫した空気が漂う。

だが、暫く続いたそれも、唐突に終わりを告げる。

「……………っ!？」

「何!？」

魔王とフレイアースとの間に巨大な発光体が出現する。そして、光の中心から黄色の五芒星の魔法陣が展開し、徐々に扉の形へと変化していく。

「こんな場所に、転移門……………!？」

フレイアースが声を荒げ、僅かながら動揺を見せる。

突然の横槍に、同じヴァナデイスの魔法陣。それがいきなり現れれば、フレイアースでなくても動揺する。現に、魔王はこの状況を理解出来ずにいた。

フレイアースが言った通り、これは転移門特有の魔術だ。莫大な魔力から形成されたであろう扉は、魔王でも初めて見る大きさのものであった。一人二人通るといったものでなく、おそらく何十もの数が押し寄せてくるだろう。

——何故、このタイミングで——それも転移門などという魔術を……………? 一体誰だ?

魔王の疑問は魔術を使う者なら尤ものことだった。

転移門は、遠くから特定の場所に移動する魔術だ。だが、便利に見えるその魔術は、現代ではあまり使われていない。現在のように門を出現させるだけでもかなり目立つ上に、移動するだけで普通の魔術よりも多くの魔力と労力が必要とするからだ。更にそれに気づいた敵に門の前で待ち伏せられるリスクもある。前世紀の戦争では奇襲として用いられたことがあったが、戦う前から大半の魔力を失うことになってしまったため、本当に緊急時でもない限り使われなくなった。

戦時ではない時でも、国境付近で転移門が見つかれば、それだけ

で攻撃と判断されかねない。だから、使うには細心の注意を払う必要がある。

「転移門の入り口を固めなさい！」

フレイアースの指示で魔王とクリスティーナを囲っていた一部が門へと移動していく。

天使たちが少なくなったことで包囲が緩くなった。

——逃げるとすれば、今がチャンスだな。

チャンスを窺い、魔王は転移門の方へ注意を向けた。あそこから現れる何かによって状況が変わる。

しかし、状況は門が開かれる前に変わった。

全く誰もが意識していない方角から、大砲の弾を発射するような音が響いたと思えば、門に近づいた天使の内一体が爆発した。

「——っ！」

爆発した天使の身体は黒焦げとなり、地面に鈍い音を立てて落ちる。それをこの場の全員が呆然と眺めている。

再び砲撃音が響き、門付近の天使が次々に撃ち落されていく。見たところ、爆発する箇所が一定の方角からのものと解る。それでやっとなら、そこから砲撃されていることに気づく。

——だが、一体どうやって!?

大砲は城壁や城門などに設置され、外壁から来る敵を爆発によって殺傷するための兵器だ。また、強固な城壁を破壊するためにも用いられる。その威力は国によって違うが、魔術を必要としない兵器としては最大だ。

だが、大砲そのものが砲撃の衝撃に耐えられるよう頑丈に作られているため、必然的にかんりの重量となってくる。戦争でも、遠征となれば運ぶだけでも苦勞する。それに軍隊や城などと、標的が大

きいからこそ大砲の弾は当てられる。とはいえ、実際に弾に直撃して死ぬことはあまりない。弾の爆発があるからこそその殺傷力だからだ。

そのため、求められるのは爆発の威力と発射の更なる長距離化――そして、大砲の軽量化と照準の正確度だ。未だに簡単に持ち運びができ、正確に標的を撃ち抜く大砲を保持している国は存在していない。

だからこそ、一体一体天使が砲弾で正確に撃ち抜かれている光景が信じられない。魔王とは専門違いなだけに困惑が増す。

やがて、砲撃していると思われる方角から、高速でこちらに移動する影が映る。

それは、闇夜に溶け込むかのような黒い翼。穢れの無さを示す頭の輪は、一切の光を拒絶した漆黒。本来纏うべき神の僕と位を表す鎧の代わりに、白い修道服を模した格好をしている。

現れたのは、天使。

魔王の周りにいる同じ天使。しかし、全く正反対の存在。

突如として脅威を振り撒いたのは、神へ反逆する天使――墮天使だ。翼とは違い、綺麗な長い金髪が風で靡く。

「全員。動かないでくださる？」

そう言って、墮天使の女は両手で抱えた“それ”をクリスティーナへと向ける。

「……………へ？」

クリスティーナは突然向けられた脅威に素っ頓狂な声す とんきようを漏らす。

白い修道服の墮天使は糸目のような細い目で、冷やかにフレイアースを見上げる。位置は丁度、転移門と魔王たちの間で止まっている。本来、神に仕える筈の存在のありえない行動に興味を抱きつ

つも、墮天使の持つ“それ”に意識させられる。

墮天使が手にしていたのは、おそらく武器であろう鉄の細長い塊だった。塊の先端は大砲の砲口を縮めたような細い筒状になっており、天使の手元の方には魔王が見たこともない装備が沢山付いていた。正体不明の武器は、槍にしては先端に刃なく、殴る棍棒だとしても全体的に細過ぎる。その長さだけならば、使っている張本人の身長を軽く越している。

つまり、先程の砲撃の正体が墮天使の持つ武器だ。

天使を一撃で葬る武器をクリスティーナに向けながら、墮天使はフレイアースに声を掛ける。

「お久しぶりです、フレイアース。数百年ぶりですが、お元気でしたか？」

「ええ。アナタ方が大人しくしていたので元気に過ごせましたよ」

「それは残念です。それなら、元気な内に殺して差し上げましょうか？」

「結構です。それよりも、その銃口を彼女に向けるのはやめてもらえないかしら？」

フレイアースの頼みを聞き流して墮天使はクリスティーナを一瞥する。その一瞬見せた口元は釣り上がっていた。

「貴方の大切なものを壊せば、どれだけ気持ちがいいでしょうか。楽しいでしょうね、きっと最高です……。だから、いつその事ここでこの小娘の頭を潰れたトマトのようにグチャグチャにしてから腹を切り裂いて中の臓器をてめえの顔にぶちまけてやろうかあっ！ ああっ！？」

一瞬だけ残虐な笑みを浮かべてから、恐ろしい形相で墮天使はフレイアースに怒鳴り散らした。いきなりの豹変にクリスティーナを

始め、周囲にいる天使たちは全員引いている。

対して、言葉を向けられたフレイアース本人は飄々（ひょうひょう）としている。

「相変わらず、アナタのその口汚さは変わらないですね。元天使とは思えません」

「何も、貴方に認められなくて生きているわけではありませんから、どう評価しようと結構。つか、死ねよ」

爆発音が響く。

堕天使はクリスティーナに向けていた武器を、目に見えぬ速さで即座にフレイアースに向けて砲撃した。不意を突かれたフレイアースに弾が直撃し、周りにいた能天使たちは爆風に煽られて陣形を崩す。

「そんなに大切ならしっかり護ってるよ、能天使共！ んだからあつさり殺られちまうんだよっ！」

「――その意見にだけは大いに同感だ」

爆風が強くなり、煙が綺麗に排除される。

そこから、また新たな天使が現れた。

純白の鎧を纏った男の天使。全体的に白いせいか、夜に浮かぶその天使は存在感を強く見せた。

「ご無事か、主よ」

「……大丈夫です。少しばかり煙たかったですが」

「それは申し訳なかった」

あまり他の者たちと比べれば言葉に礼儀が足りない天使は、フレイアースを庇うように前に出る。

それから、堕天使へと向き直る。

「久しいな、リンナ。まだ“アレ”に仕えているようだな。同じ主リオテス天使として恥ずかしく思うぞ」

「久しぶりなのに私の主をバカにしないでくれる、レイン？」

まるで旧友にあったかのようなやり取り。実際、古い付き合いがあるのだろう。

最早、魔王とクリスティーナは蚊帳かやの外だ。

「あまり『ディオ・リナ』で『ウィルフレド・イマ』の兵器を扱わないでもらいたいのだな」

「一応、この製造元は『ディオ・リナ』ですよ？」

「――茶番はそれぐらいにして、そろそろ本題に入って貰えませんか。……。まあ、目的なんて聞くまでもないと思うけれど」
「分かってて付き合ってくれるなんて流石は神ですね。感動し過ぎて引き金を引きたくなりましたよ」

リンナと呼ばれた堕天使が武器を構える。

「――でも、時間切れです。その役目はあの方にお任せしましょう」

リンナの言葉を合図に、転移門が開く。

門よりも更に強い光が漏れ、そこからリンナと色違いの修道服を纏った堕天使たちが大勢飛び出してきた。その手には、剣や槍など魔王も見知った武器から、リンナが使っているような用途不明のものまである。

いくらか出てから、堕天使の流れが止まる。そして、最後に巨大な堕天使が降り立つ。

最後の堕天使は二メートルを軽く超え、屈強そうな身体には他の

者とは違い、紅い鎧を着込んでいる。しかし、その鎧は普通の天使の鎧とは異なり、両肩に筒状の装飾が成され、それ以外にも身体が大きいとはまた違う意味で全体的にゴツゴツとしていた。

だが、本当に注目すべきは、その手の中に抱かれた男だ。

紅い鎧の墮天使に抱かれているせいか、小さく見える。それでも、その存在感はこの場にいる墮天使の中でも群を抜いている。男には翼も無ければ、頭に天使の輪も無い。パツと見ただけではただの人間だ。けれども、ただの人に見えるそれから放たれる気配は、墮天使や人間よりも、寧ろフレイアースに似ているかもしれない。

紅い鎧の墮天使が魔王とクリスティーナの近くに飛んでくる。それから、神に近い気配を放つ男が、魔王とクリスティーナのすぐ前に背を向たまま着地する。

「お前は、何者だ？」

気づけば、魔王は訊ねていた。男は問いに答えるどころか、こちらに見向きもしない。その目はずっと、フレイアースへと向けられている。

答えは男からではなく、フレイアースから発せられる。

「相も変わらず、数百年経ってもその容姿は変わりませんね——」
「神殺し」

その名前に、魔王とクリスティーナは息を呑んだ。

第18話：銀色の刃（3）

『神殺し』と呼ばれた男は、無言でフレイアースと対峙する。フレイアースの皮肉も特に反応を示さず、ただ見上げている。

その背中へ、すぐにでも折れそうな程細く、けれど歴戦の戦士でも臆するくらいの威圧を放っている。一見無防備に見える背中だが、それはまるで、何者も寄せ付けない刃のようだ。手を出せば殺られる、と無意識に感じさせられる。

そんな『神殺し』の持つ武器は剣一本のみ。鞘に納まったままの黒い柄をした剣は、そのままただの鈍器のようだ。鞘と柄を同じ色にしているせいか、それぞれで一本に思えてしまう。

それを片手で持ち、抜く姿勢を見せない。
代わりに、言葉が投げ掛けられた。

「機会をくれたことを、心より感謝する」

男女どちらとも取れる中性的な声。それでいて感情の少ない淡々とした口調。

その言葉を最初、誰に向けられたのか魔王には判らなかった。しかし、すぐに自分たちのことだと気づく。

「オレたちがフレイアースを引き付けている内に逃げろ」

「何故私たちを助ける？」

魔王には『神殺し』などと呼ばれる大層な存在に氣遣われる理由が解らない。会ったことは疎か、『神殺し』の名前すら耳にするのは初めてなのだ。況してや、墮天使を率いているだけで有名になりそうなものだが、そういった噂も聞いたことがない。墮天使の集団であれば、ローレンツェルの名前が一番に上がるが、それ以外に勢

力が存在したのだろうか。クリスティーナの方も魔王と似た反応をしていることから、同じように知らないのだろう。

「助けられたのはこちらの方だ」

「何？」

意外な言葉が返ってくる。

「オレたちはフレイアースがヴァナデイス神殿国から離れる機会をずっと窺っていた。そして、今日お前たちを追ってフレイアースがヴァナデイス神殿国から離れた。——今からオレはフレイアースを討つ」

まさに、『神殺し』の名に恥じぬ発言。

「だから、これは礼だ」

「礼………」

「礼というのが気に食わないのなら言い方を変えよう。オレたちはフレイアースと天使たちをここで倒したい。お前たちはフレイアースと天使たちから逃げたい——お互い利害が一致する」

『神殺し』の言う通り、理に叶った提案だ。『神殺し』がフレイアースたちの相手をしている間に魔王たちは逃げる事が出来る。

魔王は隣のクリスティーナを見ると、行きましょ、と返ってくる。

「それでは、お言葉に甘えさせてもらう」

「お守りは必要か？」

「そんなもの、頼まれてもいらん」

「結構。では、行け」

その言葉を合図に、お互いに向かうべき方向へ駆け出す。
最後まで『神殺し』はこちらに顔を向けなかった。

魔王とクリスティーナは時々振り返りながらも、徐々にヴァナデイスから離れていった。天使の追っ手はない。

『神殺し』とフレイアースたちが戦っている方角からは、未だに砲撃音や閃光が距離を置いたこちらにまで届いてくる。あまりの音の大きさに、すぐ傍で攻撃を受けている錯覚に陥ってしまいそうだ。

「神殺しって人に助けられたのは良いけど、これからどうするつもりなの？」

クリスティーナが今更な質問を投げ掛けてくる。ヴァナデイスで合流してからというもの、襲撃者やら天使やらに追いかけて逃げることだけに精一杯だったため、仕方がないといえば仕方がない。

「とりあえず戻る」

「戻る？ ヴァナデイスに!？」

「違う!」

魔王は一息置いてから言う。

「シフィア王国だ」

クリスティーナの顔には、どうして、と言いたそうな表情が浮かんでいる。

魔王とクリスティーナの旅のきっかけの地。現在はリブラーク帝国によって占拠された国だ。今更帰ったところで何かが出来るわけ

ではない。だが――

「もう私たちには行くべき場所がない。ならば私たちの手で何とかするしかないだろう！」

魔王の身体はリブラークによって嚴重に包囲されている。しかしそれも、クリステイナーが施した封印で辛うじて手を出させないようにしているだけだ。クリステイナーの封印がどれだけ強固であろうとも、完璧ではない。国家という規模の組織が挑めばいつ封印が解かれてもおかしくない。だからこそ、急いでヴァナデイスに救援を求めたのだが、結果は言うまでもないことになった。

「時間もあまり残されていない。無謀だが、強行に出るしかない」

「強行って、具体的にどうするの？」

「封印を解いてほしい」

「………封印を解くって言ったってその後どうするのよ！」

クリステイナーの言いたいことは魔王も重々解っている。

元々破壊すると言って置きながら態々封印を解くことは、つまり再び魔王が身体を取り戻すと言うことだ。クリステイナーから聞いた話からすれば、魔王の身体は破壊してもしなくても、結局魔王自身が見逃される理由にはならない。寧ろ、倒すチャンスとして見られる。どちらも同じというのであれば、力はあった方が良い。

「それにねっ！ その魔王の身体に近づけないからこうしてヴァナデイスまで足を運んだんでしょ！？ どうやって行くのよ！」

「シフィアに着いてから状況を見て考える」

「無計画にも程があるわ………」

呆れた声が返ってくるが、否定はされない。とりあえずは納得し

てくれたらしい。

暫く走っている内に、既に砲撃音が聞こえなくなっていることに気づく。いつの間にかそれだけ遠くまで来たらしい。だからといって油断は出来ない。

やがて、魔王とクリスティーナの背後から突風が襲う。突然の突風に魔王とクリスティーナは思わず足を止めて振り返る。同時に、轟音が響いた。そして、自分たちの目に映った光景に唾然とする。

「な、何だあれは………」

「うそでしょ………」

地上に太陽があった。正確には、太陽のような輝きを放った光が、『神殺し』とフレイアースたちが戦っていた辺りから空へと伸びていた。

光は線のように細く、それでいて強い光を放っている。光の線はどこまでも遠い空へと伸び、雲を裂いてその奥へまで続いているためどこまであるのか解らない。しかしそれもあつという間に消え、妙な沈黙が訪れる。

「攻撃、なのかな？」

「おそろくな」

『神殺し』とフレイアースのどちらかが放った攻撃。どちらにしろ、恐ろしい力であることに変わりはない。今後関わりを避けたい思いが一層強くなった。

「どちらにしろ、私たちのやることに変わりはない」

「くたくたなのに安心できないなんて、もう最悪っ」

そういつて魔王とクリスティーナは体を元の方角へ向けた途端、

「!？」

上空からの急な殺気にお互い真横に跳ぶ。

殺気の主が魔王とクリスティーナの立っていた場所の丁度真ん中に、音もなく突き刺さる。

二人まとめて巻き込める距離からの攻撃。

攻撃してきた主はすぐに地面から浮き上がり、魔王たちを見下ろす。

「断罪の『銀』………!？」

それは、ヴァナデイス神殿国内で魔王とクリスティーナを危機から救ってくれた刃だった。

クリスティーナは浮かぶ『銀』を信じられない思いで見上げる。

『銀』は正体不明の物体だ。今日まで見たことも聞いたこともない菱形風の独特な刃。それでも、ヴァナデイスではクリスティーナと魔王を助けてくれた。

——それがどうしてわたしたちを殺そうとするのよ!？」

『銀』はそんなクリスティーナの心境を気にかけることなく、その切先を向け、突っ込んでくる。

クリスティーナは反射的に剣を抜いて、全身が刃で出来た『銀』を弾いた。

「いつ」

弾くと同時に、剣を握っていた両手に痺れるくらいの痛みが伝わ

ってくる。

——速い。

一体どれほどの速さで動いているのか、刃と刃を一度ぶつけたただけでかなりの衝撃だ。教会の分厚い地面に地上から地下まで簡単に穿つだけのことはある。

『銀』はクリスティーナに弾かれた反動を利用して上空で器用に旋回する。そして、狙いをクリスティーナから魔王へと移す。

「クルス！」

「わかつている！」

魔王はクリスティーナの様子を見ていたからか、ただ斬り合うこととはしなかった。高速の突きを辛うじて躲し、『銀』の刃に自分の剣の刃を乗せるようにして攻撃を受け流した。

うまい、とクリスティーナは心の中で、一瞬だけその剣技に見惚れる。それは生前のクルス動きそのものだった。昼間に見た素人丸出しの動きをして見せた者と同一人物とは思えない。急に見せた成長に、クリスティーナは弟子を見守る師匠のような嬉しさで今の状況を忘れてしまいそうになる。

『銀』は標的を失い、虚しく地面に突き刺さる。魔王はそこで攻撃を止めなかった。地面に刀身の半分が埋もれた『銀』の、刃でなく側面の胴体に向けて剣を振るう。それを見たクリスティーナは成程と思った。

——全身刃の『銀』に傷を付けるのは、相手の剣を折ることに等しい。

けれど、刃の鋭い箇所以外を狙えば、確かに可能性があるかもしれない。それが刀身の側面。普段受けたり斬ったりする刃とは違い、触れることのない部分だ。

しかし、ことはそう簡単にはいかなかった。

魔王の剣が空を裂く。見事な空振りに魔王も、それを見ていたク

リスティーナも啞然とする。

『銀』が二つになった。正確には、剣が『銀』の側面に触れる直前に分裂した。

綺麗に二等分された『銀』は方向転換することなく、地面に刺さった逆の方から魔王に襲い掛かる。魔王は一方で右肩を、もう一方には脇腹を斬られる。

「ぐっ！」

「クルス！」

クリスティーナは魔王に駆け寄る。

出血はしているものの、怪我自体は大したことはなかった。直前に距離を取ったお陰で“それだけ”の怪我で済んだのだろう。あと一歩動くのが遅ければ、怪我をした部分が抉られていたかもしれない。

クリスティーナは魔術で光の矢を複数生み出し、一斉に『銀』へと放つ。『銀』は高速でそれを躲しながら距離を取った。

矢のいくつかは『銀』に直撃するも、相変わらず刃には傷が付かない。それ以上に気になることは――

――やっぱり、弱くなってる。

『銀』に当たる矢は全て強固な刃で弾かれている。何度も光の矢を浴びても無事な『銀』はそれだけ頑丈ともいえるが、攻撃が効かないのはクリスティーナの放つ魔術にも原因がある。

光の矢は、『銀』に命中したもののから、外れて木や地面に刺さって消えるものまである。そして、その中にどれにも当たる前から消失する矢もいくつかあった。それはクリスティーナの魔術が不完全であることを意味する。

――ヴァナデイスの地下で無茶しすぎたかな。

単純な魔力切れを起こしかけている。

しかし、それだけではないことにクリスティーナは気づいている。

——また、弱くなった。

魔術を使う度に減る魔力の量が増えている。この傾向は魔王の封印後から起こっていた。

元々、クリスティーナには魔王を単身で倒せるような魔力の持ち主ではなかった。そんな戦士であったならば、大戦では単なる兵士の一人として数えられたりはしない。自ら戦いながらも一軍を任される程の立場であった筈だ。

一国の姫とて、連合軍の前では実力がなければただの兵士でしかない。身分など、所詮飾りだ。本気の戦いで碌に指揮も取れない輩に、姫だから王子だからと各国の我が儘を聞いて、兵を無駄死にさせたのでは勝てる戦も勝てなくなるからだ。シフィア領内でクリスティーナが魔王と戦ったのも、自国の危機に前線から戻ってきたからに過ぎない。

初めて魔王を目にした時に、クリスティーナは死を覚悟した。諦めたつもりではないが、死ぬ予感しかしなかった。それだけ魔王が脅威的であった。

だが、勝てた。

対峙し、剣を振るった直後に自分の中から莫大な魔力が溢れた。力が膨れ上がり、それを活かして魔王を追い込み、最後には封印まで行った。今まで出来なかったことが、大戦の時に魔王にだけ出来た。

そして、その後から魔力の消費が激しいことを知った。最初は魔王の封印の影響、もしくは突然増えた魔力が元に戻りかけているのではと考えていた。それでも、すぐに魔力がなくなることもなく、逆に増えることすらあった。大戦以前より多いことに変わりがなかったため、変動する魔力量を利用して個人で扱える大規模魔術や、今まで使えなかった魔術を習得していった。

それから一年経った現在、クリスティーナに残された魔力は大戦以前と変わらないまでに劣っていた。ヴァナデイスで大規模魔術もどきを作ってからすぐに魔力が底をついてしまった時点で明白だ。

大戦後に覚えた魔術は大量の魔力があることを前提としたものが多いため、シフィアが占領された時も役には立たなかった。

結局は無駄な一年だった。国を守るどころか、隣の戦友すら碌に助けられない。

傷つけたただけだ。魔王と、その国の魔族たちを。そして、シフィアの人々たちを――

そして、今度も傷つけることになる。己の無力さが故に。

クリスティーナは光の矢を放つのを止め、魔王の肩を貸す。

「不要だ。これくらい何ともない」

魔王はクリスティーナの手を払い除けて剣を構え直す。

光の矢がなくなったことにより、『銀』が再びこちらに突き進む。咄嗟に避けようと動くも、負傷した魔王は出遅れた。クリスティーナに迫った『銀』が魔王へと狙いを変え、その手に握った剣を二本とも弾き飛ばす。

「クルスっ！」

言葉は口に出来たか解らない。

クリスティーナは考えるより先に反射的に魔王の元へ飛び込む。一本が魔王の心臓へ切先を向けて真っ直ぐ降りてくる。クリスティーナは剣を出すも、いつの間にか接近したもう一方の『銀』に手を斬られる。その痛みで剣を離す。それでもクリスティーナは前進を止めなかった。

――これまでしぶとく生き残ったんだから、今回も生き残りなさいよ！

クリスティーナの頭に何故か様々な人の顔が浮かんた。

両親、友人、魔王国の魔族、シフィアの国民。そして、魔王の魂が宿る前の恋人クルス――

それらの人々の屍を越えて今日まで生きてきた。

明日も、明後日も、生き残れる。簡単に死ぬことなどあって良い筈がない。

――だから！

だから、と祈りを紡ぐ。

どうしてそんなことを今になって思うのか、クリスティーナには不思議だった。けれど、思考は止まらない。目の前で起こっていることがスローモーションに感じられ、そんなことを思ってしまう。

クリスティーナは魔王に勢いを任せて抱きつく。

突進で『銀』の軌道から逸らす。それだけを考えて。

二人で宙に浮く。

一瞬に近い時間の筈だが、途轍もなく長く感じられる。

どうなったのかクリスティーナには解らない。視線を向けると、

『銀』が降りてきた反対側の地面に刺さっているのが見えた。

そして、視界を真っ赤に染めた。

第19話：別れ

『銀』が自分目掛けて降下してくるのを魔王は眺めていた。

過失。先程受けた傷が疼き、避ける動作が一步遅れる。

――間に、合わ――

魔王が目を見開くと、身体に強い衝撃が伝わる。その衝撃と共に身体が宙に浮く。

衝撃の正体はクリスティーナだった。クリスティーナの顔が近くに魔王の眼前に広がる。

それは、安堵の含まれた顔。それがすぐに苦悶に歪んだ。

生暖かい感触が魔王に手に伝わり、視界の端に赤いものが映る。背中から地面に落ちる。痛みは自然と感じなかった。今の魔王にそんなことを気にする余裕はなかった。

「あ、ああ………」

手を見ると、血でべっとりだった。誰の血かは言うまでもない。

「クリスティーナっ！」

動かないクリスティーナを魔王は地面に横にした。驚愕で目を瞠る。

クリスティーナは呻き、口から血を零す。この短時間で服の殆んどは真っ赤に染まり、右脇腹からはその根源たる血が溢れていた。

特に驚いたのが、傷の深さだ。服の破れた部分から血だけでなく、はつきりと穴が空いているのが判る。そこにある筈の皮膚や、中の肉がごっそり無くなっていた。

クリスティーナは自分の両手で傷口を押さえているが、最早人の手だけで押さえられる大きさではなく、血の流れは当然止まらない。

更に血は腹の上以外に、横たわっている底からも急激に広がっている。やはり傷口が腹から背中まで貫通しているのだと気付かされる。目の前の光景は、現実で目の当たりにしながらも、とても刺し傷で出来たとは思えない。

『魔王様っ!』

そして、セシリーの声で、その傷を作った主のことを思い出す。慌てて視界を彷徨わせると、上空に二本の刃が浮かんでいた。魔王が視線を上げると同時に、二本あった刃がくっ付き、『銀』は元の一本に戻る。

——どうすればいい？

魔王は自分自身に問いかける。

クリスティーナを庇いながらの戦闘は不可能だ。二人でやっても傷一つ負わずことも出来ない『銀』に、魔王一人で立ち向かえるわけがない。逃げに徹するにしても、相手の方が速い。

「(セシリー。何か良い案はあるか!?)」

『どれをとっても最悪ならば、クリスティーナ姫を抱えながら近くの国に逃げるのが良いかと。このままここで止まっただけは……』

……』

セシリーの言っていることは尤もだった。クリスティーナの容態は一刻を争う。幸いと言っているいかどうかは分からないが、ヴァナデイスから走り続けたことによって、魔王はルーニスに大分近い位置にいた。

——人の集まる場所へ行けば或いは引く可能性もある。

方針が決まったところで、魔王は早速行動に移そうとすると、

「………何だ?」

暫く静観していた『銀』が切先を真上に向け、遙か上空へと飛翔する。そして、ヴァナデイスの時と同じようにどこかへ消えてしまふ。攻撃に備えて身構えたが、戻ってくる様子もなく、どうすればいいのか解らなくなる。執拗しつように狙ってきただけに、あっさりしすぎて魔王は腑に落ちなかった。

『……帰ったのでしょうか？』

「（わからない）」

『それでも、やることは同じです』

「（わかっている!）」

魔王はクリスティーナの傷口に柔らかい布などを押し当て、きつく締める。それでも見える速度で赤い染みが広がっていくのが解る。——こんなことを繰り返しても意味はない。すぐにでも移動しなければ、とクリスティーナを抱えようと手を伸ばした途端、その手を掴まれる。

「待つ、て……」

「何だ？ 辛いだろうが少し我慢してくれ。今からルーニスに向かって医者を見つければまだ何とか——」

「もう……間に合わ、ない」

クリスティーナの顔は蒼白となっていた。掴む手も、ゾツとする程冷たい。

「何を、言っているんだ……」

魔王は震える声で言った。

「諦めるなっ！ まだ、まだこれから走れば――」

「わたしはフェルミアさんじゃない！」

「！？」

急に叫んでクリスティーナは咳き込み、血を吐く。

「わたしは、人間。魔族じゃない。こんだけ、血を流して――長い間生きれないよ」

悲痛に顔を歪めながら、クリスティーナは言葉を漏らす。

「だから、今の内に言えることだけ、伝えようと思う」
「・・・・・・・・」

魔王は何も言えない。

クリスティーナの言っていたことが、事実だと悟ってしまったからだ。冷たい身体に、止まることのない血の流れ。その全てがフェルミアの時と同じ。

もう、助からない。助けることが出来ない――今回も、魔王は無力だ。

だから、その最後の言葉だけはしっかり耳に傾けた。

「ずっと、考えてた。どうやったら・・・・・・・・人間と魔族が、いがみ合わなくなる、のか」

クリスティーナの息が少しずつ荒くなる。

「お互いが、全く別の生き物だって、思い込んでるから・・・・・・・・敵対する。だったら、共存すればいい」

「共存・・・・・・・・」

クリスティーナの言葉を自ら口にしてみる。
共存。

確かに、人間と魔族の二つの種族をまとめて共存共栄できれば、武器を取り合わない方法でも争いを回避することが出来るかもしれない。しかし、それが出来ないからこそ、大戦は起きた。

それに、例え共存が現実となっても問題が浮上してくる。大陸中では人間の国がいくつも存在するが、決して全ての国が共存しているわけではない。ほんの一部の国を除けば建前の条約があるだけで、そこに共存の意思はない。お互いに武器の切先を向け、牽制し合うことで戦争の抑止力になっているに過ぎない。火種が一つ見つかるだけでいつでも戦いは始まる。

上辺だけの平和。それが、大陸の現状だった。

「人間同士、魔族同士でも、色んな勢力がある。なら——」

クリスティーナの瞳に力強い光るが宿る。

「大陸——いえ、『ディオ・リナ』そのものを一つの国に纏めればいい」

「何だと!?!」

クリスティーナのとてもない提案に魔王は驚きを隠せない。そんな魔王とは正反対に辛そうな顔をしながらも、クリスティーナは微笑もうとする。

「そして、その国の王は、あなたよ」

「私が……?」

「今は、人間でも魔族でもあるクルスだからよ。大丈夫、あなたならきつと——ごぶ、ごほっ」

「クリスティーナ！」

急に咳き込むクリスティーナ。顔色も見見るうちに悪くなっていく。

「もう……時間みたいね」

「……」

分かっていても、かける言葉が見つからない魔王。
代わりに、クリスティーナの方が声をかける。

「セシリー」

「はい」

突然呼ばれたセシリーが魔王の影から出てくる。クリスティーナは視線だけセシリーに向ける。

「わたしの剣、あなたにあげる。自分の武器、なくしちゃったんでしょ？」

「……ありがとうございます、クリスティーナ姫——いえ、クリスティーナ様」

「様付けなんて、何だか照れるなあ。ごめんね、こんなものしかあげられなくて」

「そんな……わたくしには勿体ないくらいです」

「そういつてもらえると助かるわ」

クリスティーナが魔王へと向き直る。

「さよなら、は……辛いから言わないね」
「ああ」

「この数日間——短かったけど、楽しかった。……クルス
は？」

「私も、とても充実した日々を送れた」

「そっか——」

なら、良かった。そう最後に言った気がした。

唇だけ動き、声にならなかったためうまく聞き取れなかった。眠
ったように閉じた目から一筋の涙が零れる。魔王はそれを指先で拭
き取ると、ポツポツとクリスティーナの顔に涙が落ちる。

「出来ることなら、もっと一緒にいたかった」

魔王は暫く顔を上げることが出来なかった。

『神殺し』は殆んど原型を留めていない森林地帯で静かに腰を下
ろした。

そこは先程まで戦闘が行われたとは思えない程静寂としている。
しかし、数分前まであった筈の木々や草などが、文字通り原型なく
消失していた。『神殺し』と神による戦闘の凄まじさが物語ってい
る。

『神殺し』の傍に一体の天使が降りてくる。

「こんなところにいましたの」

「リンナか」

見知った天使の登場に表情一つ変えず、『神殺し』はただ顔を上
げる。

「リンナか、ではありません。突然いなくなったら心配します」

「一人になりたかったからな」

「ふてくされるのは戻ってからにしてください」

「そういうわけではない」

『神殺し』は下ろしたばかりの腰を上げる。土を払い、堕天使の集まる場所へ足を向けようと動き出す。

「あら、戻るんですか？」

「リンナが戻れと言ったんじゃないか」

「素直過ぎるとちよつと面白くないなーと思ひまして」

リンナはそういつて苦笑する。

彼女らしい行動に『神殺し』はいつものように反応できない。今はそんな余裕はない。

「………逃げがしてしまいましたね」

「ああ」

『神殺し』の反応を見ても仕方ないと思ったのか、リンナは話題を急に変えてくる。『神殺し』も変に慰められるよりは、こちらの方が平常でいられた。

フレイアースには逃げられた。どういった手段を取られたのか不明だが、大きい一撃をお見舞いした一步手前のところで間に合わなかった。天使の死骸を残してフレイアースは今頃ヴァナデイスに戻っているところだろう。折角のチャンスを逃したことに、『神殺し』は顔には出さないまま苛立ちが募った。

「今回も、仇は取れなかったな」

「そう、ですね………」

今日こそは、と思っていざ出てみれば、傷一つ負わすことなく逃げられてしまった。

——いつになれば、仇が取れるんだ。

『神殺し』は自問する。敗北の度に思う、この疑問は数百年前から変わることはない。本当にいつまでこんなことが続くのだろうか。そんな落ち込む様子を読み取ったのか、リンナが口を開く。

「“彼女”の情報は確かでしたね」
「そうだな」

『神殺し』たちが拠点とするローレンツェルの大聖堂に突如現れた“彼女”のことを思い出す。

突然現れ、名前とこちらの欲する情報だけ一方的に伝えて消えた魔族の少女。その真意を確認している内に、転移門を使わなければならぬ事態になった。もっと早く信じていれば、と思わなくもないが、それを言っていてはきりが無い。

「彼女の目的はおそらく、フレイアースに追われていた二人組みの救出だろうな」

「でしょうね。だから、フレイアースに敵意のある我々に情報を流し、利用した……」

「そう考えるのが妥当だな。……なら、こちらも利用させてもらう。フレイアースが直々に現れてまで狙う人間となると、余程のことがあるに違いない」

嘗て利用された身として、『神殺し』に不安がよぎる。

フレイアースによって引き起こされる事態の大きさに、それに巻き込まれて逃れられない運命に翻弄されることに——よく知らぬ人物だとしても、自分と同じ目に合わせたくはなかった。

「あの二人組みに心当たりはあるか？」

「女性の方でしたら。先日から行方不明のシフィア王国のクリステイーナ王かと。男性の方は一緒に国を出てきた護衛かもしれません」

リンナはあっさりと答えてくれた。

クリステイーナ、という名には『神殺し』にも心当たりがあった。

「大戦で魔王を倒した女王だったか」

「そうですね」

「……………それが理由か」

魔王を倒すほどの力を持っているのであれば、いくらでも利用の仕方がある。

しかし――

「それ程強いとは思えなかったが」

「捏造……………ではないと思います。現に元シフィア王城地下にシフィアの魔術式で魔王が封印されていますから」

「まあいい。本人に聞いてみればいいだけの話だ。今からでも追跡は出来るか？」

「そういうと思ってフレイアースに逃げられた直後に追わせました」

無理を承知で頼んで意外な言葉が返ってくる。準備の良さに『神殺し』はリンナの優秀さを改めて知る。

「それで？」

「……………全滅です。全員胸に綺麗過ぎる大きな刺し傷がありました」

「この件に『銀』まで動いているのか。どうなってる……………」

神に、古き生きる伝説まで絡む事態に『神殺し』は唸る。
ただでさえフレイアースとの戦いの後で遅れているのに、今更追
つてを出しても目標に追いつくことは不可能に近い。

「彼女なら、何か知っているのだろうな」

「そうですね。こういった事態を想定して私たちをここに来るよう
に仕向けたんですから――」

リンナが嘆息する。

「一体どこにいたのでしょね、フェルミアさんは」

フレイアースは、もう息をしていないクリスティーナを見下ろし
ていた。

剣やリュックなどの荷物はなく、遺体にはコートが一枚上に掛け
られているだけだった。

掛けられたコートを剥がし、全身を隅々まで見る。顔だけ見れば、
寝ているだけの穏やかな姿。だが、首より下は右脇腹が痛々しく穿
かれ、そこから溢れた血によって服の殆んどが真っ赤な染みになっ
ている。

分かっている、実際に見るとまた違ったショックがそこにあっ
た。

「……………間に合いませんでしたか」

「いやいやいやギリギリでしたよこれがっ!」

フレイアースの零した言葉に、過剰に反応を示す者がいた。クリ

スティーナの横に大きな闇が広がり、そこから人ではない生き物が這い上がってくる。

サソリだ。しかし、普通のサソリの何倍も大きく、ハサミは人の胴体でも容易く切り落とすことが出来るくらい巨大だ。尾には見える程の針があり、刺されれば毒に拘らず死ぬに違いない。そして、その巨大な尾にはサソリには似つかない光の塊が抱えられていた。ただでさえ気味が悪いものが大きくなって現れたことに、フレイアースは不快な顔を隠すことなく向き合う。

「門を潜る直前でオレッチのハサミでキャッチ！ もうもうもうあれはヤバかったねっ！」

「ワタクシは生きた彼女がほしかったのです」

「問題ない！ ほらほらほら、これ頼まれたもの！」

サソリは尾に巻いた光の塊をフレイアースへと渡す。頼んだものを受け取るだけで、どうしてこんなに疲れないといけないのかフレイアースには不思議でならなかった。

「それじゃオレッチは帰るね！」

「ご苦労様でした」

やっと開放される、と思いきや、サソリが再び開いた闇へと戻ろうとしたところで足を止める。

「どうかしましたか？」

「そうそうそう！ 主からの伝言忘れてた！ フレイアース様の条件で取引は成立だってさ！」

「そうですか………門番によりしく言っておいてください」「了解さっ！」

サソリが消えたのを確認してからフレイアースは重い溜息をつく。このまま帰ってすぐにも寝てしまい衝動に駆られるが、フレイアースは作業を優先した。

光の塊を持たない方の手を、フレイアースはクリスティーナの前に翳す。^{かき}ヴァナデイスの魔法陣がクリスティーナの下に浮かび上がり、身体を黄色い光が包み込む。

「リスクの高い買い物をしてしまいました」

フレイアースは一人愚痴のように言葉を漏らす。

今回のことに、フレイアースは死者を司る門の番人と取引を交わした。先程来たサソリはその門番の眷属だ。『ウィルフレド・イマ』の神といえど、冥界『ハルロード・ヘルネ』に関しては口出し出来ない。全ての決定権は門番によって定められている。そのため、死者の魂を再び取り戻すには、門番を通じてそれ相応のリスクを支払わなければならないかった。

「それでも、これは成し遂げねばならないのです」

強い意志を込め、フレイアースはクリスティーナに光の塊を落とす。

光は増し、フレイアースは思わず目を閉じる。その時、クリスティーナの指先がピクリと動いた。

第20話：発端

魔王は元シフィア王国——現リブラーク帝国の国境圏内にある村に潜伏していた。シフィアを出る前にクリスティーナと身を隠していた村だ。その人気のない小汚い小屋で、魔王は潜んで機会を窺っている。

同じ村の、同じ場所で魔王は身体を休めていた。肉体的な疲労は既に癒えているが、精神的な面ではまだまだ不調だ。故に、動ける筈の身体が言うことを聞かない。

つい最近まで隣にいた少女が今いない事実。それが必要以上に魔王を苦しめていた。

ここは、数少ないクリスティーナと過ごした場所の一つだ。たった数日前に訪れた小屋が、今では久しく思える程、クリスティーナとの出来事が昔に感じられる。

ここで、どこにでもいる少女のように笑っていたクリスティーナが殺された。一方的に、理由すら聞かされることなく。無残にも、魔王を庇って短い人生の幕を閉じた。

何故か。

——何故、だろうな……………。

魔王はふと、そう考える。

殺す者。殺される者。

両者はこの世界にありふれている。理由は、一つ一つ聞いていくはきりがないくらい沢山ある。今回はクリスティーナが殺される者の中の一人になったに過ぎない。

それだけだ。本当に、たったそれだけだ……………。

「ははっ、他人の命は何て安いんだろうな」

『魔王様……………』

魔王の自嘲に等しい弱音に、セシリーが躊躇いを含めながら告げる。

『クリスティーナ様のことは、本当に残念だと思いますが……・
・せめて約束だけは忘れないであげてください』

約束。

それは王として交わした誓いと、理想の実現。可能不可能は置いておいて、試すことなく放り投げることは魔王には有り得ない。それを解っていないながら口にするということは、それだけ魔王がセシリーを不安にさせていることだ。

——情けないにも程があるな。

使い魔に心配させているようでは、主失格である。そう魔王は自分に鞭打つ。いつまでも落ち込んでばかりいられる立場ですらないのだ。

「わかっている。心配をかけた」

『いえ、こちらこそ』

「時間もあまりない。急ぐぞ」

『はい』

魔王は日が落ち始めたのを確認して小屋の外へ出た。

辺りは暗くなり、街灯が魔術によって点灯される。

時間としてはまだ遅くもないため、人通りはまだ多い。寧ろ、この時間だからこそ盛り上がる場もある。しかし、そういった場でもないところで人々が群がっていた。

場所は王城付近の街。その広場で何やら騒ぎが起きていた。とい

っても、大きなものでなく、いくらかの人々が言い合いになっている程度だ。喧嘩に発展する様子でもない。

「何かあったのか？」

たまたま近くにいた男に訊ねる。

「あん？　・・・・・・・・ああ、あれね。この街に配備されてた兵士たちが全員慌てて城に向かったから、何かあったって騒いでるんだよ。誰かがクリスティーナ様が亡くなったって噂を兵士が話してたのを聞いてたらしくてな。魔王が復活するって不安になってんのさ」
「なるほどな」

男はフードを深く被って顔を隠している魔王を訝しみながらも、質問に答えてくれた。

「そのわりにはお前は平気なのだな」

「俺？　俺は全然気にしてねえもん。国はこんな風になっちゃったけどさ、クリスティーナ様は魔王をたった一人で倒したお方だ。そう簡単に死ぬわけねえよ。だから噂とか信じてねえ。あんたもそう思うだろ？」

「そうだな。・・・・・・・・そんな馬鹿げた話、あって良い筈がない」

クリスティーナがどうなったのかよく知る魔王としては複雑な気持ちだった。男の言うことは尤もだった。クリスティーナは魔王を庇って死んだのだから。あの時、クリスティーナが一人であれば、いくらでも対処の仕方があったに違いない。

魔王は男にお礼を言ってから王城へと向かう。

『封印が解けたのでしょうか？』

男と離れたタイミングでセシリーが話しかけてくる。

「いや、それなら感知できる筈だ」

『ならどうして……』

「“解けかけて” いるからだ。解けた時の対応を取らせるために兵士を収集しているのだろう」

封印が解けた場合、王城近くにいる魔王には即座に感知できる。それがないということは、封印はまだ解けていない。おそらくは、クリスティーナが死亡したことによって弱まった封印を、リブラークの魔術師たちが解除しているのだろう。

魔王の狙いも正にそれと同じだった。ヴァナデイスの天使に追われていた時に言った曖昧なこととは違い、明確にシフィアを訪れる理由があった。

クリスティーナが死んだからだ。クリスティーナが死亡したことで封印が消えることは誰もが知っていること。だから、リブラークは必死になって行方を追っていた。魔王も最初は命を狙う側だった。封印は持つて数日。その数日間の内に動かなければ、みすみす魔王の身体をリブラークに渡すことになる。それだけは避けねばならない。

「……何かおかしいな」

『どうかしましたか？』

「警備が手薄だ」

魔王は王城の門近くに移動してから、ふと気付いた。

魔王はなるべく人目を避けて、隠れるところの多い木々の間を縫うように王城へ進んでいる。王城内へ入るための道とは別に見栄えのために植えられた自然の部分だ。当然、そこからの侵入に備えて

罾などの仕掛けが施されている。だが、元シフィアの騎士の記憶を持つ魔王には手に取るように罾の場所が分かる。そこをうまく躲し、門へと向かって行く。

王城内へ入る道に、見張りや見回りの兵士が警備のために通るのは、支配する国が変わっても一緒だ。今はそれがない。見つからないように何度も確認しているため、偶然とは考えられない。

『封印を解くための準備で人員を削減しているのでは？』

「私を恐れるのは大いに結構だが、警備を手薄にして外部からの侵入を許しては意味がないだろう」

『それもそうですよね……』

そんなミスを起こすような国ならば、シフィアはなくなったりしない。だから、これには理由がある筈だ。

魔王はどうやって門を抜けるか考えながら、城門付近まで近づいて、その理由を知った。

「これは……」

魔王は城門を見て咄然とする。

鋼鉄で出来た巨大な城門の扉がぼっそり切り裂かれていた。無駄のない切り口。切り裂かれた門の扉は外側に倒れており、中の様子を簡単に窺わせた。

見えたのは惨劇の現場。胴体、四肢、頭部——とバラバラに刻まれた人間が城内の灯りに照らされながら、門の奥で散らばっていた。魔王は思わず、そこへ飛び込む。見える光景は、記憶にある敷地と全て同じ死因の人間だけだった。

この光景を魔王は知っている。忘れてくても忘れられない記憶だ。

「あの時と、同じ……」

魔王国で起きた惨劇と同一。そう思った途端、ある男の顔が思い浮かぶ。

——ここにいる。フェルミアの命を奪ったあの黒衣の男が……

……！
魔王は駆けた。

黒衣の男を捜したい気持ちがあったが、今は自身の身体が封印された地下へ向かうことを優先する。憎悪というくだらないことで、クリスティーナとの約束を蔑ろに^{ないがし}して良い理由にはならない。それを除いても、現在の魔王ではあっさり殺されてしまうため、やはり今は自身の身体を取り戻すしかない。

城内に入っても、あるのは死体ばかりで、生きた兵士の姿が見えない。

途中から死体の道も途切れ、封印の地には静寂だけがあった。魔術が施されているのか、部屋全体が昼間のように明るい。

「久しいな、我が身よ」

思わず足を止め、魔王は呟いた。それだけの感動がそこにはあった。

魔王の身体は全身が石化される形で封印されていた。今は所々に亀裂が走り、一部では中を覗かせている。その姿は、魔王には魂を求めて、自分から殻を破ろうとしているように見えた。

魔王は止めていた足を進め、身体へと近づいていく。

「——待ってたよ」

静寂したこの場には、その声がよく響いた。突然の出来事に魔王は剣を抜いて構える。

「誰だ!？」

「誰かなんてどうだっていいじゃない」

声の主は、封印された魔王の身体の後ろからひょつこりと現れた。しかし、魔王の身体の影響に隠れて顔が見えない。分かるのは声と見える体形から女性ということだけだ。

「これを取り戻して、どうするつもりなの？」

こちらのことなどお構いなしの質問。

女は魔王の身体を軽く叩く。

「存在するだけで人々を不幸にし、想っても疎まれる——これにはそれだけの力がある。今の身体の方が幸せな人生を送れるんじゃない?」

「自分の身体だ。どうしようが私の自由だろう」

「今言ったことは真実よ。運命と言い変えてもいい」

「運命だと言うのなら、変えてしまえばいい。そんな小さなことで交わした約束をなかったことにするわけにはいかない」

「……………やっぱり、今世の魔王は面白い。生かしておいて正解。待ってた甲斐があったわ」

「?」

女の言っている意味が解らず、魔王は眉を顰める。どういうことか訊こうとすると、その答えが女の背後から浮かび上がった。

特異な形の銀色の刃。クリスティーナを殺した凶器——断罪の『銀』が、女を護るように浮遊する。

そして、今になって気付く。魔王の身体ばかりに気を取られていたが、よく見ると女の後ろにはリブランクの兵らしき人間たちが積み上げられていた。

「まさかお前が……！」

「どう捉えるかはあなた次第。……目的は果たしたからお暇させてもらおうわ。これ以上は面倒になりそうだから」

女が言ったタイミングに合わせたかのように、背後の通路から複数の足音が聞こえる。リブラーク兵が駆け付けてきたのだろう。

「それじゃあ、さようなら。わざわざ逢いに来ただけのことはあったわ。次に逢う時にはもっと面白いものを見せてね。……今回ののはサービスよ」

「なっ、待て！」

魔王の静止を無視して女は『銀』に掴まりながら天井へ飛ぶ。そして、施された封印の一部をその強固な刃で天井ごと簡単に貫く。描かれた魔法陣は光を失い、ただの紋章と化す。女の方は帰ってくる様子もなく、本当に出て行ったようだ。逃がしたくない気持ちがあったが、今の魔王には女を追い掛けることが出来なかった。

魔法陣の欠損により、封印が目に見える形で解けかけていた。元々弱まっていたこともあったせいか、石化した部分がボロボロと零れる。後数分で封印は手を加えることなく完全に解ける。

その前に――

「ふ、封印が……！」

「何だ、貴様っ！」

「ここで何をしている！？」

数はざっと五十人程度。

現れたリブラークの兵士が、解けかけている封印の前で佇む魔王へ、思い思いの言葉を投げ掛ける。

その光景を魔王は黙って見つめる。魔術を使えない魔王には絶望的な数だが、自然と恐怖はなかった。人間となつてから出逢つた敵と比べれば、数だけの兵士など、臆するに値しない。

「封印が解けるまでの間――いけるな？」

『ええ。今の我々に敵などありません！』

魔王は剣を構える。その姿を見た兵士たちも各々の武器を構えだす。

ここが正念場であることは明白だった。魔王は先手を打つため、足を踏み込もうとする。

そこで、見えた。見える筈のないものが。正確には、そこに居てはいけない存在が、リブラーク兵士たちの中に紛れていた。

全身を黒に染めた存在。両手には六本の爪がある奇妙な短剣を構えている。魔王国で虐殺の限りを尽くした黒衣の男が、いつの間にかそこに佇んでいた。

魔王だけでなく、リブラーク兵たちもそれに気付く。突然の出現に兵士たちは戸惑う。そして、その行動を後悔することになる。

黒衣の男を中心に魔法陣が広がった。途端に、リブラーク兵全員の身体が上空に高々と吹き飛ぶ。そのまま、上空で紙切れのように千切れ、肉片として地面に落下する。

黒衣の男は血の雨が降る中、それに濡れることなく、魔王にゆっくりと近づいてくる。

魔王は動けない。決して目の前で起きた殺戮に怯えているわけではない。

――何故、あいつが私と同じ魔法陣を使用している！？

魔王は黒衣の男が使った魔法陣に目を疑った。

闇色の歪んだ六芒星の魔法陣。それは魔王だけが使える、魔王だけの魔法陣だ。

魔法陣とは、魔術を発動させるための方式が文字や紋様で描かれ

たものだ。国や魔術師の使う魔術の属性によって使われる魔法陣の方式は大きく変わってくる。そのため、各国ではそれぞれ独自の方式を開発して組織に組み込んでいる。

理由は、それが効率的であると、歴代の魔術師が証明していること。そして、他国に魔法陣を解析させないためだ。誰でも解析できる魔法陣はあっさり破壊される。どんなに複雑で複製不可の魔術を使用しても、その基盤となる魔法陣が解析されれば、どんなに強固の魔術式も簡単に打ち消されるのだ。だから、魔術師は自分の魔法陣を解析させないように、何重にもコピー防止の手段を複数の方式で一緒に組み込む。故に、見ただけでは解らない。見た目だけ真似ても、本物のような効果は決して発揮されない。

以上のことから、魔王の魔法陣が他の者に扱える筈がないのだ。疑問の答えが出る前に、黒衣の男は一步踏み込み、五メートル以上あった距離を一瞬で魔王のすぐ手前まで詰めてくる。魔王は咄嗟に剣を振るい、黒衣の男の六爪剣を受け止める。

間近で見ても、やはり魔法陣は魔王のものと瓜二つだ。見た目だけが同じ、という真似た魔法陣でないことは魔王には解った。知っているからこそ、全く同じものであると理解してしまう。

「何故、お前がその魔法陣を使える！ どうやって知った！？」

問いかけるが、黒衣の男は何も言わない。代わりに、魔法陣が魔王の剣を包み、拘束する。

「セシリー！」

『は、はい！』

包まれた魔法陣の打ち消すために数少ない魔力を注ぎ込む。魔力が少量の魔王であっても、構成をよく知る魔法陣ならば、破壊は可能だ。

元々強固な方式で組まれた魔法陣だけあって、小さな魔力ですぐに反発されそうになりつつも、魔王は押し返そうと踏ん張った。

「うおおおおおおおっ！」

踏ん張った成果か、右手の剣を包んでいた魔法陣に亀裂が入る。そこを重点的に攻める。そして、ついに魔法陣はガラスが割れるように砕け散った。魔王はすぐさま剣を振り上げて黒衣の男に斬り掛かろうとする。

しかし、敵はそれを許さない。魔法陣が解除されたと同時に短剣の爪が魔王の剣を掴み、その握力で刀身がいとも簡単にバラバラに破壊される。片方の剣は黒衣の男の方があっさり解き、代わりに魔王の顔面を短剣で強打した。

「が、あっ！」

ハエを払うかのように振るわれた短剣で、魔王は軽く五、六メートルは吹き飛ばされた。峰打ちだったらしく、強打された部分が傷むも、大した怪我ではない。お陰で脳が揺れ、クラクラとする。

それでも、折れていない方の剣で身体を支え、立ち上がる。

魔王は自身の本来の身体の付近にまで吹き飛ばされていた。ちらりと見れば、封印は後数分としない内に解ける具合にまで進行している。まだかまだか、と内心で焦る一方、相手はこちらのことなど待ってはくれない。

黒衣の男が、魔王——その奥の魔王の身体——に向けて片手を掲げる。魔法陣が展開され、闇色の輝きが濃くなる。碌でもない魔術を放とうとしているのは明白だ。

「ぐ、う……………」

すぐに止めようと動くも、先程脳を揺さぶられた影響で身体が言うことをきかない。酔っ払ったようにグクシヤクした動きで、止めることは疎か、逃げることも難しかった。

黒衣の男から魔術が放たれる。放たれた闇色の閃光を魔王は呆けて眺めていた。そこへ魔王の身体が何者かに抱えられ、その場から跳ぶ。閃光は魔王が先程まで立っていた場所を通過し、封印されていた身体を貫いた。

闇色の閃光はシフィアの魔術を打ち碎き、それによって束縛されていた魔王の身体が、黒衣の男の魔術に吞まれて浮き始める。魔王の身体から闇色の光が出たり入ったりし、やがて魔法陣がそれを包み込む。それが封印されていた部屋の天井に構わず飛び出した。大戦の時と同じような穴が天井に開き、魔王の身体を包んだそれは自然の闇へと放り出される。闇夜よりも濃い黒がグニヤリと歪み、内側から爆発するように吹き飛んだ。

「・・・・・・・・な、な・・・・・・・・」

目の前の光景が信じられず、魔王はうまく言葉に出来ない。

「こんなことって・・・・・・・・」

隣の声で、先程魔王を抱えて助けてくれたのがセシリーだと気付かされる。影から咄嗟に飛び出して助けてくれたのだろう。

だが、今の魔王には礼を言っている余裕はない。

魔王は、自身の身体が分裂して遥か彼方へ飛び散る姿を、ただ見ていることしか出来なかった。

その後も、身体が散った空を魔王はただ呆然と眺めていた。

シフィア王城上空で散った魔王の身体は多くの者に目撃されていた。

その光景は花火のようであり、人々には少なくともそれが魔王である“一部”を除いて分かる者はいなかった。

散った魔王の身体は流星のように綺麗で、その輝きは見る者を魅了した。流星となった魔王の身体はシフィア付近に留まらず、大陸中で目撃された。

それを見た者は、何を思い、何を考えるだろうか。

それを得た者は、何を思い、何を行うだろうか。

それを知る者は、何を思い、何を動かすだろうか。

今まで平穏に暮らしていた者、力を求めて自らの腕を磨いていた者、救済を祈り駆け回っていた者——様々な者たちの運命は今日から大きく変わる。

魔王の身体が大陸中に散った事実。それは後に大陸全土を震撼しんかんさせる発端となる。

それが現実となるのは、まだ先の話。

エピローグ

魔王はシフィア王城より少し人里離れた場所にいた。

誰の手も加えられてない自然の森で、当然人気はない。夜の闇のせいか、猛獣がいても不思議ではない場所に思える。

「はは、あははっ」

魔王は乾いた声を漏らす。

どうやって王城から脱出したのか、魔王は全く覚えていなかった。気付けば人気のない場所で突っ立っていた。

背後には人の気配がする。それがセシリーなのだと見なくても解るが、そちらに目を向ける余裕すらない。

「………何だ、これは」

魔王は激しい自己嫌悪に陥る。

自分自身の身体が、バラバラに遥か彼方に飛び散る姿を見て、恐怖で震え上がる。この感情は、過去に一度自身で破壊する計画を立てていた時には想像も出来なかったことだ。こんな恐ろしいことを自分の手でやろうとしていたのか、と思うと、魔王は過去の自分を殴りたくなってきた。セシリーの忠告は最初から正しかったのだ。

しかし、それ以上に魔王は自分自身に憤りを感じていた。

——何も、出来なかった………。

魔王は魂だけ封印から逃れ、人間クルスと成り済ました日々を振り返る。

神、天使と逢うことすらないと思われた存在や、『銀』に『神殺し』と人間になって初めて知った存在まで、たった数日間の間で多くの大物と出逢った。

その多くに助けられ、狙われた。魔王はといえば、ただそれらに振り回されただけだ。

この数日間、魔王は何もしていない。得た戦友を失い、自身の本来の身体さえも遠く手の届かないところまで行ってしまった。

「私は一体何なんだ」

「魔王様……」

「私はフレイアースの言う通り消えるべき存在なのか」

「そんなことはありませんっ！」

魔王の自嘲にセシリーは真っ向から反論する。

「魔王様は立派なお方です。それをわたくしはよく知っています。お身体の方は散らばってしまいましたが、これから探せば――」

「探す？ あれを、どうやって？」

「現在は地道に歩いてしか方法はありませんが……ここでくよくよ立ち止まるよりはずっと良い筈です。魔王様のお身体はほんの一部でも強大な力があるので、今からでも動かなければっ！」

「見つけてどうする。どうせ、また狙われ奪われるだけではないか」

魔王国。フェルミア。クリスティーナ。

全部魔王が求め、失ったものだ。魔王が未熟だったが故に。魔王が求めたからそれらは奪われた。

「私が何かを求めることで誰かを失うのなら、私はもう何もいら
ないっ！」

切実な願いだった。

魔王は自身が求めることで、何かを失うことがとても恐ろしかっ

た。本当は傍に居てほしい。だが、魔王の側にいることで狙われるというのなら、決断しなければならない。

「だから、セシリー――」

自分自身でも弱々しいと分かる声で、

「契約を解除してくれ」

「っ！」

セシリーに使い魔の契約を切るよう頼んだ。これ以上巻き込みたくはなかった。いつも側で支えてくれていたセシリーだからこそ、魔王は生きていてほしいと思う。

セシリーは、驚いたかと思えば、みるみる顔を真っ赤に染めていく。今まで主である魔王には一度も見せたことのない表情だった。

「魔王様、失礼します」

言いながら、セシリーは魔王に飛び掛った。そして、握り締めた拳を魔王の横顔に叩き込んだ。

魔王はその衝撃で木に背中を思い切り打ちつける。だが、魔王には痛みよりも驚愕の方が勝った。

セシリーと出逢ってから、現在まで殴られたことはなかった。主と使い魔の関係を抜きにしても、セシリーがそういった行動を魔王にはしないだろう、と勝手に思い込んでいたことから、衝撃はより強かった。

「バカなこと言わないでくださいっ！」

「……………セ、セシリー？」

「少しの失敗が何だって言うんです？ 諦めないでください！ 先

程『銀』に言っことをもう忘れたのですか。これが運命なら変えてしまえばいいんです。良い方向へ。魔王様が、フェルミア様が、クリスティーナ様が——死んでいった仲間たちが納得できる未来を魔王様が創ればいいんです！」

肩を強く掴み、セシリーは魔王を押し倒すような形で訴える。

「王ならば、交わした約束は死んでも守るのではなかったのですか？ 失うのが怖いのなら——何も失わない強さを得てください。わたくしも魔王様と共に腕を磨きます。だから、フェルミア様の理想を、クリスティーナ様との約束を、わたくしとの契約を——忘れなidekudaisai」

そう言っセシリーは魔王の身体に倒れ込んだ。肩に顔を埋め、嗚咽を漏らす。それを魔王は抱き返す。

その姿を見て、魔王は自身がどれだけ自分勝手なことばかり言っていたのかを思い知る。

「世界が魔王様を否定しても、わたくしは魔王様の使い魔で在り続けます。……ですから、これからもお側に仕えさせてください」

そして、魔王は思い出す。セシリーと最初に逢ったことを。

魔王とセシリーの交わした使い魔の契約は、正に今の言葉通りであつた。

自分にあるかどうか分からない運命に怯え、そんなことも忘れていた。

「心配をかけてすまなかった。私はこの数日で臆病になっていたよ
うだ」

「そんなことは――」

「人間の身に堕ちたせいで随分と弱くなったものだ」

魔王は人間の身体となって弱くなった。

しかし、それは今の魔王にとって苦には感じられない。寧ろ、清々しい程だ。

力を失った代わりに、以前にはなかった掛け替えのないものを得た。それが今の魔王をそんな気持ちにさせてくれる。

「魔族である魔王の魂を宿した人間――魔族にも人間にも成れる私だからこそ出来ることを探して行こうと思う」

「わたくしはそれを全力でサポート致します」

「ああ、頼む。……まずは、私の本来の身体を取り戻そう」
「畏まりました」

魔王は決意する。

過酷な道へ自ら進むことを。死んでいった仲間たちとの約束と、その実現のために。

――せめて、今はこの使い魔を泣かせないくらいには強くなければな。

魔王は心にそう誓うと共に、セシリーを抱く手に力を入れた。

魔王の身体が大陸中に散った夜。ヴァナデイス神殿国からそれを眺める者がいた。

「始まりましたわね」

教会堂の窓から見える複数の流星に、フレイアースは呟く。

「これが災厄の前兆、ですか……止めることは本当に出来なかったのでしょうか」

フレイアースよりやや後ろに隣に立つルクソースは困惑した顔で尋ねる。声色から、このことを事前に知っていて行動に移さなかったフレイアースを責めている様子はない。

「これは運命なのです」

「運命、ですか……」

「避けることも止めることも、ワタクシですら不可能です。運命によって結果は決められているのですから。……止めようとしても、過程が変わるだけです」

「では、今後我々はどうすれば良いのですか!？」

「そのための、彼女です」

フレイアースが微笑むと、ドアが控えめにノックされる。

どうぞ、と答えると、真新しい司祭服を纏う青年が入室してくる。

「ほ、報告します。保護していた少女がお目覚めになりました」

「そうですか。ありがとうございます」

待ちに待った報告にフレイアースは喜びを隠し切れない。つい自然に綻ほころんでしまうと、目の前の青年司祭が動揺しているのに気付く。

「そういえば、見かけない顔ですね」

「はいっ!　じ、自分はいっ先日司祭に昇格したローズであります

!　フレイアース様にお逢い出来て光栄です!」

「そ、そうですか」

興奮しているローズの勢いに圧倒され、フレイアースは少々たじろぐ。

司祭は大司祭の下に当たる階級の一つだ。それだけだと、明らかに二十歳前半のローズには不釣合と思われるかもしれない。

だが、ヴァナデイス内の階級は他国の宗教国家と比べてかなり特殊だ。枢機卿すいきけいの階級を廃止し、大雑把に大きく司教、司祭、助祭と三つに分けられている。

司教は、ヴァナデイス内では軍部に当たる。他国と違い『軍隊』を持たないヴァナデイスでは、代わりに精鋭の戦士が存在する。万が一ヴァナデイスが他勢力に攻撃されることがあった場合、それを防ぎ、国を守る役割を持つ階級が司教だ。表に出てこないため、この階級の存在を知らない国もあるだろう。

司祭は、一般的によく知られている階級で、人々を導く政治的な部分を勤める。他国と武力以外の方法で交流を行い、国内でもヴァナデイスと国民のために日々活動している。そして、その中で一人司祭を選別し、大司祭として国の代表を選ぶ。

そして、それら二つの階級を支えるのが助祭だ。助祭として活動後に、一定の条件を満たした者は、その特徴に合わせて司教か司祭に選ばれる。

こう聞くと、司教と司祭に関しては階級というよりは、部署に近い意味合いになる。実際には間違っていない。ヴァナデイスでは年齢に関係なく、優秀な者をそれに合った部門で活躍されるために、こういった方法をとっている。

そのため、ローズのような青年でも司祭となることが出来る。何十年も司祭をしている者より得る権力はまだ劣る部分はあるだろうが、同じ発言力はある。望めば、フレイアースに直接何か提案することも出来るのだ。

しかし、フレイアースは国民が崇める神だ。司祭になったとはいえ、青年のローズに落ち着けというのは酷な話なのかもしれない。

「こら、ローズ。あまりフレイアース様に時間を取らせるでない」

「はっ！ も、申し訳ありませんでした」

「構いませんよ」

「では、お部屋に案内致します」

ローズを先頭に廊下に出る。

点々と灯りがある廊下に、同じ模様の扉が複数並んでいる。昼間では綺麗に見える廊下も、暗くなっただけで雰囲気は全く違ってくる。そして、暫く歩いた先に少女が休んでいる部屋の前に着く。

「こちらです」

「ありがとうございます。ワタクシが良いと言うまで下がっていてください。二人きりで話したいので」

「わかりました」

フレイアースは扉をノックする。

返事がない。怪訝に思いながらも、失礼します、と言って入室する。

部屋は寂しい内装だった。即席で用意したようなベットと、机や椅子があるだけで他には何もない。少女はベットで横になっているわけでも、椅子に腰掛けているわけでもなかった。

少女は窓側に立ち、外を眺めている。つい数分前まで、魔王の身体が流星となって散った空を、今も見つめていた。

「体の具合はいかがですか？」

フレイアースが尋ねると、少女がこちらに振り向いた。肩までかかる綺麗な赤毛を揺らし、不思議そうにフレイアースへ目を向ける。しかし、見ながら何か全く別のことを考えているようだ。

「何とも。．．．．．あなたがわたしを助けてくれたの？」

「そうですよ」

「どうして？」

「困った人々を助けるのが、ワタクシたちの務めですから」

「困った人々を、助ける．．．．．」

少女――クリスティーナが、フレイアースの言葉を繰り返す。

「まずは自己紹介から、ワタクシの名はフレイアース。．．．．．
あなたは？」

「わたしは．．．．．」

クリスティーナは悩むように落ち着きがなく目を彷徨わせる。その様子から、フレイアースはクリスティーナに起こっている事態を理解した。

「何も憶えていないのですか？」

「断片的しか。わたしが誰なのかも．．．．．どこに住んでいたのかも、何も思い出せない。フレイアースはわたしの何か知ってる？」

「詳しいことは何も。自分の名前も、本当に思い出せませんか？」

本当は嘘だが、全く知らないふりをする。この事態はフレイアースには予測済みだった。

一度死んだクリスティーナを蘇らせ、フレイアースは記憶を消した。今日からあるべき姿へと成長させるため、余分な記憶をなかったことにしたのだ。だから、クリスティーナはフレイアースを目の前にしても、以前のような行動はしない。

クリスティーナは頭を手で押さえる。必死に思い出そうしているのが解り、手を貸したくなるがフレイアースは黙って見守った。

やがて、口をゆっくりと開く。

「……クリス。そう、呼ばれていた気がする」

「そうですか。では残りの記憶はここでゆっくりと思い出していきます」

「ここで?」

「ええ。焦ることなど全くありません。何か不都合でもありますか?」

フレイアースの言葉に、クリスティーナが戸惑いを見せる。

「だって、わたし……自分ことすらよく解ってないし。もしかしたら何か悪いこととしてこうなったのかもって——だから、迷惑かけたくないっていうか」

「そんなことはありませんよ。それに言ったでしょう?」
「え」

クリスティーナ、元い^{もと}クリスは呆氣にとられた顔をする。

「困った人々を助けるのが、ヴァナデイスの務めなのです。一緒に記憶を思い出していきましょう」

フレイアースは手を差し出す。クリスも、躊躇いながらも最後にはフレイアースの手を取った。

「よ、よろしく……」

「こちらこそ。——ようこそ、ヴァナデイス神殿国へ」

「ついに、この日が来てしまったのね」

二十歳前後の女性が、空に流れる魔王の身体を見て呟く。

女性は腰の中程まで届くさりとした薄い青色の髪に、丸みを帯びつつもほっそりとした小顔。腰は括れ、四肢はすらりと伸びている。街中を歩けば、一目を惹く整った顔立ちの女性は、そんな彼女には不釣り合いのところまでそれを眺めていた。

場所は森林地帯から伸びた丘。その森林地帯は危険な猛獣が住むといわれ、商人などでは絶対に避けねばならない場所として知られていた。それでも女性は、背中に剣を携えるだけの装備でそこにいた。

「これからどうすんの？」

女性からやや離れた場所でエストレイアは尋ねた。

突然の来訪に、女性は動揺すら見せない。

「魔王の身体は大陸中に散った。あたしは計画通り動くだけよ。それ以上のことをするつもりはないわ」

「魔王くんには逢わないの？」

「そんな計画はない」

冷たく言う女性に、エストレイアはつまらない顔をする。

エストレイアの集めた情報と、目の前の女性が一致しない。外見上の特徴のみが合っていて、それ以外は全くの別人のように感じられる。他人の空似と決め付けるには、女性の言葉はエストレイアの情報に正しいことを証明していた。

「でも、心配なんだよね？ ヴァナデイスでちょっかい出したこと、あては知ってるよ？」

「あの人のために、あたしは今ここにいる」

からかいたくても女性は態度を変えることはない。表情一つ変えず、淡々と言葉を紡ぐ。

「いつまでもあいつに好き勝手やらせるつもりはない。だから、こんな運命シナリオはあたしで潰す」

「魔王くんは愛されてるねー。心配なら隣で護ってあげれば？」

「それはセシリーがやってくれるわ。あたしである必要はない」

「それでも魔王くんはきみのことを知ったら逢いたがると思うよ？」

「そんな計画はない。二度とあたしに近づくな」

女性はそういつてその場を立ち去った。

最後の最後まで“本音”しか言わなかった女性にエストレイアは訝しむ。何かがおかしいと分かっているけど、その何かが解らない。女性の口にした『運命』も、重要なことは伝わったが知らないことだった。

エストレイアは『ディオ・リナ』を管理する神だ。大体のことは解るし、調べられる。それでも例外はやはりある。今話をしていた女性はその数少ない例外だった。

ほんの数日前まで存在すら観測されず、知ってからでは会おうと試みても痕跡すら残さずに逃げられた。そして今日会うことに成功したが、向こうの方が待っていてくれたようだった。

追いついた、のではなく、追いつくのを待ってもらっていたのだ。おそらく、しつこく追い回すエストレイアに苛立ち、最後の一言を伝えるために、敢えて追いつかせたのだろう。

本当に素性通りなのかも疑わしい。

「考えても仕方ないか」

エストレイアは女性が立っていた場所を見て大きく息を吐く。

「あてはあてで動くとしますか」

そういつてエストレイアもその場を立ち去った。

プロローグ(2)

大陸の西に位置するアスカンディナ地方には有名な古代湖こくたいこが存在する。

バルデルト湖という名の湖で、俗説にはアスカンディナ地方全域にまで水が地下で繋がっているとされている。そういった俗説が、人間の間で広まる程の広大さを誇ることで有名だが、それ以上に水質の良さから評判が高い。ろ過を必要としない水であるため、周囲に住む人々はバルデルト湖から直接飲み水として取り入れている。

水が良質なのは、より良い自然に恵まれ、尚且つ陸上の生物によって荒らされなかったこと。そして――

「んゝ♪」

水辺に足を投げ出し、陸地に腰を下ろす生物が鼻歌を鳴らしながら夜空を眺めている。

全身が薄水色の人の形をした、人間とは全く別の種族――水精霊ウンディーンだ。

水精霊の生息する場所には良い水があるとされている。それは水精霊が、清らかな水のある場所でしか生きていけないことや、水精霊そのものの存在が水場に大きく影響を与えるからだ。

水精霊の身体は名前の通り、水で出来ている。身体を構成する水は当然、清らかなものだ。

しかし、清らかであるからといっても、ずっと同じ水では身体に大きな影響を及ぼす。そのため、水精霊は定期的に体内の水を抜き、外の水を取り入れることで交換を行う。それ故に、水精霊は綺麗な水場でないと生きていけない。取り込んだ水の質が悪ければ、水精霊の身体に与える影響も悪いものになる。人間で例えるならば、空腹だからと言って毒キノコを態々口にする行為と同等だ。

そして、水精霊から排水された水は、自然や人間にとって良質のものだ。つまり、水精霊の存在が、ろ過装置の役割を果たしているということになる。

「わあー、きれいですー」

水精霊は空に見える流星に心奪われる。

水精霊は基本的に水中で生活するが、この水精霊は空を眺めることが大好きなため、こうして陸上に時々上がってくる。夜空に流れる星を見て、いつもよりも得した気分になる。

「っ!？」

そこで異変に気付く。そちらにばかり意識が行っていたせいで、気付くのが少し遅れた。

水精霊は慌てて水から足を引き上げる。それから、おそろおそろ水面に顔を覗かせた。

「こんなことって……」

中の状況を知り、水精霊は怯えながら、その場に佇んだ。

第2－1話：汚染水

魔王はブリュートという町に訪れていた。

酒の製造がアスカンディナ地方で一番盛んな所で、美酒の町とも呼ばれている。その中でも、酒類の多さは大陸の中でもトップクラスを誇り、この町でしか手に入らない新種もある。酒類の数もそうだが、原料となる水の品質の良さに信頼があり、大陸中へ大量に輸出されている。

大陸中で重宝されているのは、町の近くにあるバルデルト湖が主な理由だ。水精霊が多く生息する水から造る酒は、酒飲みには格別の味とされている。そのため、国外であっても多くの発注が寄せられる。

そんな酒が有名な街で、魔王は飲食店とは掛け離れた寂びれた店にいた。

「――店主、この剣の値段は間違いではないのか？」

「いんや、あつてるよ」

「ばかなっ！」

魔王は武器屋の店主の言葉を信じられない思いで聞く。

ブリュートに来るなり、魔王は真っ先に武器屋を訪ねた。シフィア王城で折れた剣に代わる新しいものを手に入れようと思ったからだ。

剣はもう一本あるが、折角馴染んできた剣術を今になって変えることへの抵抗から、購入に踏み切ることにした。魔王は贅沢が言える立場ではなく、本来ならば我慢できるところはするべきだ。だが、過去の経験から武器に金を出し惜しむようでは、戦いでいざという時に何も役に立たないということを解っている。だから、多少の出費は止む無しと判断したのだ。

それなのに、武器屋に並ぶ剣はどれも高価。一番安い剣ですら、今の魔王には手が出せない金額だった。

『まあ、剣が高価なのは当たり前ですから……それでも、この店の武器は比較的安い方ですね』

「店主、もう少し安くはないか？」

セシリーの独り言を無視し、魔王は店主に交渉する。

「無理言わんでくれよ。これでも安くした方なんだ。色んな町旅して来たんなら分かんדר？」

「どうしてそんなことが分かる？」

「長年この仕事をしてるとそういうのは分かってちまうんだよ。基本的にここに来る客は軍備用に注文する国のお偉いさんと、冒険者ばかりだからね。見た目も、いかにもさっき長旅から帰ってきまして格好だから」

「ああ、成程」

魔王は自分の身体を見下ろす。その格好は確かに店主の言う通り長旅から帰還したような姿だった。

人間の身体になった時はまだ綺麗だった服は色褪せ^{いうあ}、羽織っているコートも汚れがはつきりと目立つ。旅の途中で軽い水洗い程度しかしていなかったことから、そうなることは必然だった。服を新調、もしくははっきりとした洗濯をするべきなのだが、魔王には金がありません。先程も言ったが、省けるものから省かなければすぐに金が底を突く。

「金が足りないのなら、その腰の剣買い取ろうか？」
「そんなことが出来るのか？」

突然の申し出に、魔王は思わず尋ね返してしまう。

魔王の両腰には鞘入りの剣が差してある。二本共あるように見えるが、一本は折れた剣が差してあるだけだ。シフィア王城から脱出する際にセシリーが回収してくれたのだ。お陰で格好だけは剣がそこにあるように見える。

「多少傷が付いても良い剣は高値になるもんさ。まあ、傷がないもんと比べたら安くはなるだろうがね」

「傷が少しある、といったレベルではないのだが………それに、内一本は折れている」

魔王は鞘から折れた剣を見せると、店主は目を丸くした。

「あちゃー。それじゃあ、無理だね。てっきり買い換えるとばかり思ってたから」

「もう一本の方はどうだ？」

「んー」

今度は折れていない方の剣を見せる。

店主は真剣な目付きで、剣を刀身から柄まで顔に近づけて見る。剣の区別がつかない魔王には、今使っているものと店頭に並ぶものがどれも同じものに感じられる。せめて、これで二本揃えられる程の足しになるのであれば、売ってしまう気だった。

「………お客さんは剣を二本揃えたいわけだね？」

「ああ、そうだが」

「無理だね。この剣は良い業物だが、売り物にはならない——使い込まれ過ぎだ」

「そうか」

魔王は残念な気持ちを抑えられないまま剣を受け取る。

「売り物にはならんが、使う分ではまだまだ問題ないよ。大切に使えば数年は持つ」

「こんなにボロボロでもか？」

魔王の剣は刃はこぼ毀れこそしていないが、店に並ぶもののような輝きはない。柄も掴み易いものの、黒ずんだそれはもう何年も使い古されたものだと解る。

「それはボロボロの内には入らないよ。まあ、剣の寿命は使ってるお客さんの腕次第で変わってくるものさ」

「そうなのか・・・」

「私としては寧ろ、折れた方が気になるね。何をやってらそうなるんだい？」

「刀身ごと掴まれて・・・そのまま折られたというか・・・」

黒衣の男の奇妙な爪の剣で握り潰された、とは言えず、曖昧な回答をしてしまう。怪訝に思っても仕方がない魔王の言葉に、店主は先程とはまた違う驚き方をする。

「掴まれて折られたって・・・まさか、魔族にでも襲われたのかい？」

「まあ・・・似たようなものに、な」

「剣が折られただけで済んだなら運が良いじゃないか。・・・全く、化け物は一体いつになったらいなくなるのやら」

「・・・」

あからさまに吐かれる悪態に、魔王は何も答えることが出来なか

った。

これが、現実。人間による魔族への認識だ。魔族は畏怖の対象であり、人間からすれば化け物でしかない。

「話は変わるが、お客さんは剣の腕には自信あるかい？」

「無論だ」

魔王はさっき黙った分、ここぞとばかりに肯定をはっきりと主張する。それを聞いた店主が満面の笑みを浮かべる。

「それなら、役所へ行けば仕事を募集してると思うよ。この街は平和だから、危険な仕事を進んでやる人がいなくてね」

「剣を买える程の金が集まるのか？」

「すぐに、とはいかないが……今ならあの問題があるからね」

「？」

店主の言っていることが解らず、魔王は首を傾げた。

店を出てから、店主の言っていた意味が何となく判った。

「（店主の言っていたのはこのことか）」

『おそらくは……』

場所はブリュートの中央広場。人々が行き交い、多くの店で賑わっている。

だが、人や店の数は多くとも、それほど繁盛しているようには見えない。まだここよりもずっと小さなヴァナデイスの路地に並んだ

商店の方が活気があった。そこに集まる客は店に訪れるも、殆んどが不安な顔で商品を眺めている。特に食料品や飲料水などに関しては極端で、自然と避けられているように思える。売る側にも覇気が感じられない。

それらの原因は広場の中心の噴水にあった。

町のシンボルでも兼ねているのか、広大な広場でも存在感が強い噴水は目立っていた。独特の形をした五メートル程の高さの噴水は、様々な角度から水を噴き出し、時間によって出る量が変わるなどとても幻想的だ。長時間眺めていれば、更にいくらかのパターンも見られるかもしれない。

しかし、それを今から見るには耐えられなかった。それは、噴水から噴き出す水の色が紫色をしていたからだ。

ただ水が紫色に変色したというより、元々その色だったかのような液体が噴水から流れている。本来は足を入れても良いように設けられた浅瀬も、現在では紫色のヘドロが溜まっていた。よく周りを見ると、広場の周囲を円状に囲むような水が吹き出ているのが見える。おそらくは広場の外周にも噴水が設置してあるのだろう。こんなものに囲まれては気分が悪くなるのも無理はないと魔王は思った。

「（これは危険云々の問題ではないだろう）」

『そうですね。どう見ても、自然に起こった現象ではありません』

「（バルデルト湖の水精霊に何かあったか）」

ブリュートの町はバルデルト湖から近い位置にあることから、水道には湖の水が流れる。噴水など、水を大量に使う装置は特にそうだろう。ならば、必然的にバルデルト湖——即ち、バルデルト湖に住む水精霊たちに何かがあったということだ。水精霊の恩恵を強く受けているバルデルト湖だから間違いないだろう。

『まずは役所で現状を把握するべきですね』

「(そうだな)」

魔王は広場を離れてブリュートの役所へと向かった。

役所は広場のすぐ近くにあり、初めてここを訪れる魔王でもすぐに判る建物だった。町の雰囲気の中でも堅く、如何にも“役人が集まる場所”といった場所だ。

近づくと思った通り、役所の文字が見えた。魔王はその足で中へ入る。

中へ入ると、受付などを行う広間は人で溢れていた。おそらくは住民による水の苦情だろう。職員が何度も謝りながら対応する姿が見える。

受付の中では、机に積み上げられた書類と睨めっこする者や、一部の職員同士で集まって深刻な顔をしながら話し合っている者が確認できる。あんな姿を見せれば、住民の不安はますます増すだろう。

「(どう見ても話を聞ける状況ではないな)」

『待ってもあまり変わらなさそうですね』

「(出直すという手もあるが……どうするか)」

『困りましたね……。あら。魔王様、奥の職員がこちらを見ていませんか?』

「ん?」

言われて奥を見ると、職員の一人与目が合った。それを合図に、職員は他の同僚へ声を掛けてから、魔王の元へ若干慌てた様子で駆け寄ってくる。

「あの……失礼ですが、冒険者様でしょうか?」

「ああ、そうだが」

少し髪の寂しい職員は魔王に駆け寄るなり、控えめに尋ねてきた。

「やはりそうですか！ 是非お願いしたいことがあるのですが宜しいでしょうか！？」

「問題ない。丁度仕事を探しにきたところだ」

「ありがとうございます！ どうぞ、こちらへ」

職員のお願いとやらを聞くために、その内容を知らないまま魔王は中へ案内される。

職員同士集まっている場へ連れて行かれると思いきや、受付の奥の更に奥にある部屋へと通された。そこも受付の場と同じように机が並べられ、職員が書類を忙しなく書き込んでいる。

その中でも一番忙しそうなのは、一番奥の机の場所だ。そこでは五十代前後の女性を中心に、職員がいくつか指示を受け対応を取っている。

魔王を連れた職員は中心の女性に寄り、声を掛ける。少し言葉を交わした後、魔王へと目を向けて椅子から立ち上がった。周囲にいた職員を下がらせ、女性は当たり障りのない笑顔で魔王に近づいてくる。

「ようこそいらっしゃいました。どうぞ、こちらへ」

「あ、ああ……」

今度は間仕切りをした小室へと案内される。椅子を勧められて魔王は座り、女性も対面へ腰掛ける。そこで改めて女性を見た。

女性の顔はよく見ると皺が目立ち、短く纏めた金髪には白髪が混じっている。最初抱いた年齢よりもずっと上なのかもしれない。もしくは、心労が耐えない日々を送っているせいで老けて見えているだけなのか。

「改めまして、本日は我々の要求は受け入れてくださりありがとうございます」

「ございます。私は町長のマーシャと申します」

「ま・・・・・・・・クルスだ。まだその要求とやらを聞いていないのだが・・・・・・・・」

魔王、と言い掛けて慌てて直す。正直、この名前をあまり名乗りたくない魔王だったが、本名をここで言うわけにもいかない。身体を完全に取り戻すまで、我慢するか慣れるしかないだろう。

魔王が要求を知らないと答えると、マーシャは怪訝な顔をする。

「案内した職員は何も説明しませんでしたか？」

「いや。冒険者か否かを訊かれたただだが」

「まったくもう・・・・・・・・」

マーシャはこの場にいない職員に呆れた顔を見ると、魔王に説明を開始する。

「今ブリュートに流れる水が汚染されていることはご存知ですか？」

「広場の噴水を見させてもらった。ブリュートというよりはバルデルト湖が汚染されていると言った方が正確だろう」

「その通りです。汚染の原因はバルデルト湖——そこに住む水精霊である可能性が強いと我々も考えています」

「“考えて” いるということは、確定情報ではないのだな。調査がうまく進展しないのか？ 国は何をやっている？」

「それが・・・・・・・・」

マーシャは言葉を濁す。おそらくは国外の冒険者である魔王へ国内の情報を話すかどうか判断しているのだろう。

やがて、マーシャは口を開く。

「国には報告をしました、どうもうまくいっていないらしくて」

「そんなに今のバルデルト湖は危険なのか？」

「はい。現在のバルデルト湖の周囲には何やら瘴気が漂っているらしく、そのせいで調査が難航しているのです」

「だから、腕利きの冒険者に知恵を借りようというわけだな？」

「仰るとおりです」

マーシャが申し訳なさそうに頷く。

国内で対処できないのであれば、国外の知識を頼ればいい。意地になるよりは実に効率に良い考えだった。しかし問題なのが、国家クラスでもどうにもできない事態となると、余程の事例だ。一種の魔術による作用ならまだしも、精霊相手となると魔王個人の知恵では対応し切れない可能性がある。

「実は昨日も同じように頼んだ冒険者の方がいらっしゃったのですが……」

「逃げられたのか？」

「それならそれで良いのですが、その方は昨日の朝方にバルデルト湖へ行ったきり未だに戻っていないのです」

「……それはまずいのではないか？」

「もう、かなり」

最初に訪れた職員が必死に魔王に声を掛けたのはそういった理由もあったからなのか、と内心で舌打ちする。魔王は立ち上がり、身支度を整える。

「分かった。今すぐバルデルト湖へ向かってそいつを連れ戻してくる」

「よろしく願います」

「仕事内容は、バルデルト湖の調査と昨日から帰ってこない調査員の確認でいいな？」

「とりあえずはそれで。これがバルデルト湖への地図です」

「マーシャから地図を受け取り、コートのポケットへとしまおう。

「様子を見てきてからまたここへ伺わせてもらう」

「わかりました。お気をつけて」

マーシャに見送られて魔王は役所を出た。

第2－2話：汚染水（2）

魔王はブリュートからやや離れ、バルデルト湖へと続く道を歩いていた。

ブリュートの住民にとって普段から行き来する機会が多いせいか、道はしっかり舗装され、道中には様々な店が点々と見受けられた。しかし、どこも昼間なのにも拘らず、店を閉じている。特別目に見える脅威があるわけではないが、魔王以外にその道を歩いている者はいない。

「国よって住人に立ち入らないよう規制がされているのか」

『その割には立ち入り禁止の警告の表示がありませんでしたね』

「ならば、住人による自主退避かもな」

こういった事態には基本的に野次馬——今回ののは町と大いに関係あるから少し表現が違うかもしれないが——というのがどこの国にも存在する。危険と言われても、興味本位で現場に訪れる者は珍しくない。

また、その逆で心配になって自ら行動を起こそうとする者もいるだろう。何せバルデルト湖の水はブリュートの住民にとっては生命線に等しい。日常的な生活は疎か、国内外問わず商売としても欠かせないものだ。バルデルト湖が完全に汚染されれば、ブリュートの町の経済は大打撃を受け、今までの発展が嘘のように崩れていくだろう。

そのために魔王はこうして足を運んでいるのだが、現場を実際に見てそう簡単にはうまくいかないと予感させられる。

「これは……酷いな」

一通り進み、バルデルト湖が一望出来る場所までやってきた。

本来ならば綺麗な湖が見渡せる筈だが、それを紫色の霧によって覆い隠されてしまっている。これがマーシャの言っていた瘴気だろう。魔王は瘴気に触れない距離で、吸い込まないよう注意しながら観察を始める。

見るからに毒々しい霧の発生源は、やはりバルデルト湖そのもの。湖から陸へ、瘴気が蒸気のように上がってきているのがはっきり確認出来る。ずっと漂っている瘴気もよく見れば、一定の距離まで来ると消える。そして、新たに湧いた瘴気によって再び上書きされる。そのせいでずっと瘴気が消えずに空中にあるように感じてしまう。

異常な光景。

単に湖が汚染されただけなら、普通こうはならない。瘴気が上がっている光景は、魔王には誰にも侵入させないための妨害に思える。つまり、人為的に瘴気が生み出されている。

「水精霊が原因と決め付けるのは軽率か」

魔王は自分で確認するように呟く。

この状況で一番怪しいのは、バルデルト湖に住む水精霊だ。バルデルト湖に欠かせない存在故に、異変の正体も必然的に水精霊へと結びついてしまう。

何故なら、水精霊は“水”を司る精霊だ。たったそれだけで説明がついてしまう。

津波、渦潮——それらの自然現象を魔術師が必死で作り出したとしても、水精霊は身体の一部として振るうことが出来る。規模にもよるが、水系ならばこれらの魔術師が作った魔術よりも、遥かに強力な攻撃を放てる。水に関する知識も、地上で暮らす者よりもずっと豊富な筈だ。

水による戦いで水精霊に勝る者は、『ディオ・リナ』でも数える程だろう。だからこそ、バルデルト湖は汚染を作った原因は水精霊

である可能性が高い。バルデルト湖は大陸でも有名な程の水精霊が“大勢”いる湖だ。真っ向から勝負を挑んで勝てる筈もない上に、戦いを挑む愚か者は水精霊をよく知れば知るほどいなくなる。湖を汚染させようものなら、普段温厚な水精霊も黙ってはいない。

しかし、現にバルデルト湖は汚染されている。仮に原因が水精霊でないとするば、その元凶は更に厄介とも言える。水精霊さえも退ける元凶は確実に強い。おそらくは、瘴気で足止めを食らっている国の兵士たちよりも、ずっと。そして、魔王にはそれに心当たりがあった。けれど、結論を急ぐつもりもない。

『とりあえず、今はバルデルト湖の周囲を散策するべきでしょう。今回の仕事は偵察ですから』

「そうだな。我々よりも先に来た冒険者も気になる」

魔王は散策を開始する。

周囲をよく見て歩き、何か重要なものはないかを探す。その内にあることに気付く。

「植物は汚染されていないのか………？」

湖ばかりに気を取られていたが、瘴気内にある木々や草などの植物には、パッと見ただけでは汚染されている様子はなかった。水はブリュートの噴水のように濁っているのも関わらずだ。

「案外水以外には効果がないのかもしれないな」

『それでも自ら飛び込んで確かめるのだけは止めてくださいね』

「緊急時以外はそんな無謀なことはいさ」

それこそ、行方不明の冒険者が倒れているところでも見つけられない、瘴気の中に入るとは現段階ではないだろう。瘴気の正体も

はつきり解らない内は迂闊うかつに触れるべきではない。

『——きゃはははっ！』

注意しながら歩いていると、唐突に今度は魔王の耳に、この場に不釣合いな声が聞こえてくる。

女性の笑い声。

魔王に対する嘲笑ではなく、腹の底から声を出す笑い。声は瘴気からやや離れた木々の向こうから響いていた。怪訝に思いながらその声の方へ足を運ぶと、女性の会話が届く。

「もう、ウィーネちゃん良い飲みっぷりっ！　ディーさんは良い飲み友達を持って幸せだ！」

「ワタシもディーさんと出会えて幸せです。この短時間でとても大好きになりました」

「ディーさんも、ウィーネちゃんのこと大好きだぞーっ！」

「キャアアアアアッ！」

最早、場違いどころか気違いの類だ、と魔王は思わずにはいられなかった。

声の方へ行くと、最初に見えたのは氷の小屋だ。小屋と呼ぶには柱と屋根だけの簡易なもので、瘴気の方角にだけ壁が作られていた。それだけでも魔王には疑問はあったが、中の住人によってその思考は消去された。

小屋の中には二人の、とても奇妙な組み合わせの女性がいた。

一人は偶然にも魔王と面識がある人物だった。栗色の髪を長いポニーテールに結った二十代中間程度の女性。耳に剣を模した十字架のピアスを付けた人物は、ヴァナディス神殿国の酒場で魔王に絡んできた酔っ払いのディーだ。

もう一人は、人間ですらなかった。全身が水で出来た身体的人物

——水精霊だ。

二人はそれぞれ酒瓶を持ちながら、氷の小屋の中で酒を飲んでいった。周囲に転がっている酒瓶は数え切れない程あり、それを飲み干した当人たちは頬を酔いで赤く染めながら談笑している。

——この二人は一体何を考えているんだ？

汚染された湖の近くで酒を酌み交わす者がいるかなど、誰が想像出来ようか。呆れながら更に近づく。

「お前たち、一体ここで何をやっている？」

魔王は未だにこちらに気付かない二人に声を掛ける。

二人は魔王へ振り向き、ぼんやりとした目でこちらを見てくる。時間が止まったのではないか、と錯覚させられる程、急に二人は動かなくなる。いきなり人が現れれば驚くのは当然のことだが、今更こちらに気付いた二人に魔王は再び呆れながらとりあえず返事を待つ。

やがて、デイーの方が先に笑顔を取り戻していく。

「クルスクんだー！」

そのまま近づいてきた魔王に抱き付いてくる。酒臭い息が魔王の鼻に付く。

「は、離せ！」

「照れんなよー」

そういつてデイーはぐりぐりと頬擦りをしてくる。離そうにもデイーの掴む力が強くて引き剥がせない。この酔っ払いの細腕のどこにそんな力があるのか、と不思議に思いながら、魔王はもう一人の方へ目を向ける。

「あうあう」

人間で例えるなら十代前半くらいの容姿の水精霊がおろおろとする。魔王の突然の来訪にどう反応していいか困っているようだ。見た目通り気弱そうな水精霊は、助けを求めるようにデイーの方へ視線を向けた。しかしデイーはそれに気付くことなく、だらしなく魔王に寄りかかっている。代わりに魔王が助け船を出す。

「デイー、あの水精霊は何だ？」

「およ？ ウィーネちゃんだよ？」

然も当然と言わんばかりにデイーは答える。おそらく水精霊の名前だろう。解つても、もっと詳細な説明は出来ないのかと思い、酔っ払いに過度な期待はするものではないと考え改める。

何故バルデルト湖が汚染されている今、水精霊が陸に上がっているのか。汚染の原因は何なのか。どうしてこんな場所から動かないのか。とりあえず、魔王には訊きたいことが沢山あった。

「ねえねえ、クルスクくんも一緒に飲もうよー。まだ沢山あるからさー」

「今のお前に私の言葉が通じないのはよく解ったから黙れ」

こちらの気持ちはお構い無しにと、まだ飲もうとするデイーを魔王は窘める。重石と代わらないデイーを押しつけ、ウィーネと呼ばれた水精霊の近くまで行く。

「一体何があった？」

前置きもなしに魔王は訊ねる。余計なことから話せば脱線するの

は明白だからだ。

「えっと、あーと……ワタシはウィーネ、です」

「ああ……クルスだ」

「……」

「……」

自ら名乗ったウィーネに魔王は、そう言えばお互い自己紹介して
いなかったな、と名乗り返したわけだが、それっきり視線を彷徨わ
せながら落ち着かなさそうにモジモジする。どうやら見た目通り人
見知りする性格のようだ。

「私はバルデルト湖の汚染について調べに来た。何か知っているこ
とはないか？」

まずは目的は伝える。用件が用件だけに、ウィーネも怯えている
場合ではない筈だ。

「……三日前」

ウィーネがぼそりと独り言のように言う。

「三日前？」

「星が降ってきた夜から、湖がおかしくなりました」

「……っ」

魔王はウィーネの言葉を聞いて、自分でも判るくらい顔を顰める。
それを見たウィーネがビクツとするが、今の魔王にはそれを気にす
る余裕はなかった。

魔王は汚染の話を聞いてから、バルデルト湖に直に来るまで、一

つの推測を考えていた。

水に関して右に出る者がいない、と言っても過言ではない水精霊の住処が汚染されている。余程の例外的な出来事がなければ、なりえない話だった。

しかし、魔王にはその例外に心当たりがあった。心当たりがあったからこそ、確認するまでは結論を急がないようにしていた。そして、ウィーネの証言で推測は確信へと変わった。

――汚染の原因は私の身体か……。

三日前の夜。

それは魔王の身体が元シフィア王城の空で散った日。

汚染された時間から日数も合っている。更に、水精霊の住処の水を汚染する程のものを、自分以外に魔王は知らなかった。

魔王の身体はそれだけで強大な魔力の塊と言ってもいい。それを何者かが得れば、莫大な力を与えることになる。得た力はその者によって、良い意味でも悪い意味でも大きな影響を周囲に及ぼす。今回は湖の汚染という悪い意味で目の前の現実を造り出してしまったようだ。

「では、何故お前はここにいる。仲間はいないのか？」

次の質問をすると、ウィーネはそわそわしながら顔を上げる。

「ワタシはたまたま水から上がってたから……すぐに水面上が瘴気で覆われるようになって、中がどうなってるのか確認できません。湖へ行こうにも、瘴気のせいで近づけなくて……どうしていいのか判らなくて」

「ふむ」

だから、とりあえずこの場で様子を見ていた。

ウィーネの話を聞いて魔王は困り果てる。水辺に近づけなければ

調査をすることが出来ない上に、それを邪魔する瘴気の正体も解らなければ対処は不可能だ。

そこで、ふと思い出す。

「この氷の小屋は誰が作った？」

「ワ、ワタシです」

ウィーネが自信無さ気に答えると、手を胸の前に掲げる。そこから水が溢れ、一瞬で凍ってしまう。

「水精霊にそんな能力があったのか」

「いいえ。バルデルト湖でもワタシだけです」

初めて聞く話だった。

水精霊は名前の通り水を司る精霊だ。だが、水温を体内で調整することは可能でも、凍らせることが出来る水精霊は聞いたことがない。ウィーネの言葉から、バルデルト湖内の水精霊の間でも特異な存在であることが判る。

しかし、現在それは大した問題ではない。魔王は調べているのは水精霊ではなく、バルデルト湖の汚染の原因だ。個人的な興味が湧いてきたが、今は自重するべきだろう。

そこで改めてもう一つの目的を思い出す。

「まさかとは思うが、ブリュートから依頼を受けた冒険者というのはデイーのことなのか？」

相手をしてもらえないことを拗ねているのか、デイーは少し目を離した隙に再び酒を呷あおっていた。

声を掛けてもらえたことが嬉しいようで、顔を合わせた途端笑い出す。

「そうだよー！ よくわかったねー？」

「消去法だ。それよりもお前は普段何をやっているんだ？」

デューはパツと見ただけでは職業が判らない。危険とされているバルデルト湖へ向かうには軽率な格好で、荷物も小屋の端に置いてあるが、その周囲に散乱している酒瓶を見る限り中身は酒ばかりなのだろう。ただの飲んだぐれにしか見えない。そんなデューが何故バルデルト湖の調査の依頼を受けたのか、魔王には理解出来なかった。

「デューさんのお仕事は商人！ 色んなもの売ったり買ったりと大陸中を旅しているのです！」

「ほう」

有り得ない話ではなかった。軍人や傭兵と違って戦う術はなくとも、大陸中を旅する商人であれば、様々な国の知識や情報が嫌でも入ってくる。そこから瘴気の正体を知ることが出来ないかと、調査を依頼したのならば納得も出来る。もし、傭兵などとふざけた答えであれば、今の考えが全く逆になるところだった。

「その割には酒しかないように見えるが」

「クルスクンさー。もしかして商人は全員馬車に商品沢山乗せて旅してるとか思ってるー？」

「？ 違うのか？」

突然何の話だ、と耳を傾ける。

「違うよー。そういうのはさ、基本的にどっかの商会連中全員の積荷だったりするんだよね。個々で運ぶと大変だから、商会所属の連

中同士で纏めて町まで運ぼうってわけ。まあ、個人で馬車使ってる人はいるにはいるけど、今はあまり見なくなっただねー。商会連中に運ばせれば荷物は軽くなるし、ちゃんと荷物には護衛も付いて安心だしね」

つまり、出歩く度に商品を手元に置いておかなくても良いということだ。便利なシステムだと魔王は思った。

「ディーも商会に商品を預けているということなのか？」

「違うよ。ディーさんはそこの商人と格が違うからねー！」

ディーがわざとらしく、にやりと笑う。

「なんと、ディーさんは大陸中の国々に倉庫を持っているのです！」
「何だと？」

一口に商会と言っても様々なものがある。専門的なものを扱うところや、複数の種類の商品を同時に扱うところ。それらは特定の場所に倉庫と店を構え、そこを中心として各国へ商品を販売している。だが、どれだけ大きい商会でも自分の国内ならまだしも、他国にまで複数の倉庫を構えるというのは難しい。何故なら、倉庫は思いのほか土地を必要とする上に、中に兵士などを荷物として隠せば国内から奇襲などを受ける可能性がある。実際に過去にそういった事例があったからこそ、入国のチェックは厳しく、他国内に倉庫を置くのもかなりの条件が必要になった。大きい商会でもあまり他国には倉庫を置きたがらないだろう。

「商人にとって一番大切なのは信頼。小さな子供から老人、町外れの農村から王城で暮らす王族まで、希望に叶う質の高い商品を提供していく内に多くの信頼をディーさんは得ました！ その結果沢山

の国に認められるほどにまで大きくなることが出来ましたとさ！
だから、商品は各国にそれぞれ常備されてるから在庫だけ覚えとけば心配要らず」

デイーは拳を握り、力説する。

言い方はともかく、やっている内容は簡単に出来るものではない。
嘘を言っているようにも見えないことから、魔王はデイーの認識を改める。

「……お前の商会はすごいな」

「え、デイーさんはフリーだよ？」

「……個人でそこまで出来るものなのか」

「結果に見合うだけのことをしたまでだよ。それに、商会なんかに入っても殆んど儲けと手柄が持っていかれちゃうからね」

「自分の手柄を持っていかれるのが嫌だから商会に所属しないのか？」

「それだけじゃないけどね」

小さく、デイーは寂しそうに答える。

「商会に入ると確かに色々便利だけどさ。代わりに自由じゃなくなるんだよね」

「仕事だから仕方がないのではないか。それに、全く自由に出来ないわけではないだろう」

「その通りだけどね。でもね、商会に入るとさ『○○までに○○を○○で売って来い』って指示されるんだ。それってめんどくさくない？ デイーさんは好きな時に好きなことしたい性格だからフリーで活動してる。組織に縛られるのは勘弁」

何らかの組織に所属すれば、大なり小なり行動を制限される。そ

れは国や人種問わず共通と言えるだろう。それが嫌なのは誰でも同じだ。ディーの言っていることは、子供の我が儘に近い。

魔王としては、意外なものを見た、と言った感じにディーの話を聞いていた。

「ディーは一人でいるよりは、団体にいる方が好みかと思ったのかな」

「誰かと飲んだり話したりするのは大好きだけど、仕事付き合いでつてのは嫌かな」

「それでも自由奔放に活動しているイメージがあるかな」

「どうだろうねー。でも、ディーさんがフリーだったから、今日こうして逢えたと思えない？」

ディーが何らかの商会に所属していれば、こうやってバルデルト湖へ訪れることはなかっただろう。商会はそんな寄り道を許さない。ディーと魔王が再開することも、ウィーネとこうして会うことも出来なかったかもしれない。

悪戯をする子供のように尋ねてくるディーに、魔王は意地悪く笑う。

「ならば、今日は厄日だな」

「ひっどーい！」

「自由に生きるのは結構だが、他人に心配を掛けるんじゃない。ブリュートの町長がお前の安否を気にしていたぞ？」

「ありやちゃ……ウィーネちゃんと飲んでることに夢中で忘れてた。悪いことしたなー」

「それなら、一端ブリュートへ帰るぞ」

「あーい」

ディーが気だるそうに荷物を片付ける。そこで先程からほったらか

かしだったウィーネが目に入る。これからブリュートに帰るにあたって、ある意味一番の問題だ。

ウィーネの方は、魔王が何を考えているのか解らないせいとか、首を傾げている。

——さて、どうするか。

魔王は頭を悩ませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9585v/>

堕ちた魔王の理想郷

2011年12月28日01時47分発行